
IS チートは隠すもの

マーシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS チートは隠すもの

【Nコード】

N9134V

【作者名】

マーシー

【あらすじ】

やる気がなく気まぐれでめんどくさがりの青年が特典を貰ってISの世界に転生する、が、「・・・これは、酷い」貰った特典がヤバ過ぎる。青年は静かな生活ができるのか。この作品は作者の妄想とwikiによって作成されています。

プロローグ（前書き）

初めて書いたので酷いところが多々ありますが温かい目で見てください。

プロローグ

「……ダリイ」

のっけからそんなことを言っている青年が一人。
そしてその青年の前で土下座をしている老人が一人。

「いや、本当にすまなかった」

「……いや、謝罪とかいいからさ今の状況を説明してくれ」

「わかったわい。お主の状況を説明するとお主は分かっていると思う
がすでに死んでおる」

「あ、そうなんだ」

「……驚かんのか」

「驚いて元に戻るなら驚くけど？まあ無理っばいけど」
眠たそうな顔でつぶやく青年。

「むう、まあそうなんじゃが……」

「で、俺は死んだとして此処はどこなんだ？」

「此処は分かりやすく言うなら「転生の部屋」じゃな」

「転生の部屋？」

「うむ。本来ここに来る者は魂のみで意思などはないのじゃがお主の場合は「よくあるテンプレで間違つて殺してしまったとかかな？」……その通りじゃ」

「このような事はそうそうおきはせぬのじゃが実わ「あゝいい言わなくても。聞いたとこで死んだことが無くなる訳でもないし」……ぬう」

自分が死んだのにまるで他人事のように話す青年。

「で、テンプレよろしく特典貰つて他の世界に転生させるってことかな」

「なぜ分かつた!！」

「テンプレだから」

「……」

なんとも言えない顔で押し黙る老人。

「で、では欲しいとく「特典も転生もいいからそのまま転生したいんだけど」は？」

「い、いやそういう訳にもいかんのじゃ。自然に死んだならまだしもワシの手違いで死なせてしまったゆえにこのまま転生させたらお主のいた世界に歪みが起きて対処するのが大変なんじゃよ」

「自業自得だろ。それ」

「そうなんじゃが、頼むワシの言つとおりにしてくれんかの。このとおり」

そしてまた土下座を始める老人。

「……ハア。分かったよ。あんたの言つとおりにするよ」

「おお。してくれるか」

「しないとずーと土下座したままだろ」

すごく疲れた顔で言う青年。

「で、でわ改めて特典を言ってくれい」

「じゃあ一つ目は転生先は俺がいた世界と似た世界にすること、二つ目は転生先の体は男で高身長で馬鹿がよってこないような体、三つ目は誰にも負けない自衛手段、この三つで」

「一つ目はともかく二つ目と三つ目はどういう事じゃ？」

「二つ目のはチンピラだのDQNだのがよってこないようなればいい、三つ目は元いた世界と似ているとはいえ何が有るか分からないからな。今みたいに」

「うぐ」

「まあ詳しくは任せるよ。考えるのめんどくさいし」

他人事のようにしゃべる青年。

「いいのか、わしに任せても」

「よっぽど変じゃなきゃいいよ」

「うむ。まかせい。最高のを用意しよう」

「がんばって」

かくして青年は元いた世界とは別の、されど似た世界に転生する。

設定（前書き）

この設定は作者のこうじゃないか？という考えとwikiで調べた情報を元に書いてます

設定追加しました。ネタバレ的な事が書かれています。一度全話を読んでからお読みください

設定

主人公

鈴木 キノ

容姿

180cmを越す身長にガッチリとした体格、とても悪い目つきのせいでヤクザによく間違われるが本人は人除けに良いと気に入っている。

性格

基本めんどくさがり屋で厄介ごとやトラブルなどを嫌う。同意をしない約束事などは平気で破る。ただし自分から言った約束事や一度でも自分から手を出したことは最後までやり遂げる。

専用機体

グレートゼオライマー

神が用意したキノの自衛手段。だが自衛手段を通り越し過剰防衛といつて良い物になった。

元はキノが生前唯一やり込んでいたゲームソフトに出できた隠し機体。ただゲーム内ですでにチート化していた機体を神がキノの「任せる」の一言に自重を忘れ魔改造したもはやバグと言っても過言では無い仕様になってしまった。

ISではなくあくまでもキノの自衛手段のための機体。だがIS

としての機能も一応は搭載されている

自衛のためなら主人であるキノに報告せずにこっそりと裏で暗躍する。最近意思の様な物が確認されてきた。

次元連結システム

グレートゼオライマーに搭載されている特殊システム。

異次元から無限のエネルギーを取り出す事ができその応用で空間跳躍・全方位バリアー・無尽蔵のエネルギーによる強力な攻撃等々さまざまな利用方法がある。

元からチート臭いのそこに神が手を加え原作漫画版の自己修復機能にゲーム内での設定である特殊兵器のシステムも組み込まれているので時間停止までできるバグ使用。

これも次元連結システムのちよつとしたおうy（yz

備考

上記にある自己修復機能は機体のみならずパイロット、つまりキノにも適応されそのおかげでキノは切り傷擦り傷等は瞬時に治り骨折等も一日足らずで治ってしまい、さらにバグ使用のこのシステムは例え機体とキノが木っ端微塵になったとしても瞬時に再生すると言うもはや不死身に近い事になってしまっている。

武装

エネルギー波

前腕部の光球からエネルギー波を放射する。ゲーム内だとグレー

トになると消えてしまう武装だが神が使えるようにした。出力の調整で極細から極太のビームを出せる。

次元連結砲

次元連結システムの力で別次元から取り出したエネルギーを集束し、ワープさせて敵にぶつけるという攻撃。これもゲーム内だと消えるのだが神が使えるようにした。というよりこれら以外の武装がISに対してオーバーキル気味になるので使えるようにした。これも調整しだいで相手の体の一部分から全身と攻撃できる。

デッド・ロン・フーン

巨大な竜巻を起こし相手にぶつけることで相手を粉碎する。フルパワーで使用的した場合、気象衛星に写る様な大きさの竜巻が起きる。

アトミック・クエイク

地が裂けるほどの大地震を引き起こし、その上に本来なら核ミサイルをばら撒くという無差別破壊攻撃。ただしミサイルは核ではなく燃料気化弾頭、ナパーム弾、クラスター爆弾等に変更できるようになっているが結局は無差別破壊には代わりが無い。

トウインロード

次元連結システムの応用で自機の分身を作り出し両肩の発射装置から打ち出すプラズマ光弾と腰部分に格納されている大型ビーム砲を同時に当てることにより空間ごと対象を破壊する。バグ使用のこの機体は分身が無数に現れ一定範囲の空間を破壊する事ができる。

Ｊカイザー

背部に搭載されている砲台を前方に移動させ使用する、超長距離砲撃攻撃。フルチャージで使用した時の射程は50kmを越す。

プロトン・サンダー

背部のスラスターを変形させ放つ攻撃。周囲数kmの物質を微粒子化する。これも調整しだいで周囲だけではなく指向性を持たせ前方のみに攻撃することができる。

烈メイオウ攻撃

グレートゼオライマーの持つ武装の中で最強の攻撃力を持つ最凶の攻撃。次元連結システムをフルに使用して異次元の膨大なエネルギーを相手に直接ぶつける超広範囲攻撃。ゲーム内ではエフェクトで成層圏まで広がる爆発が起こっていたが、このバグ使用のグレートゼオライマーはマジで成層圏まで広がる爆発を起こせる。最強の攻撃力を持っているがゆえに使用ができないという悲しい結果になった。

世界電脳

グレートゼオライマーが自衛手段と称してキノに秘密にしながらこっそり立ち上げた企業。

こっそり立ち上げたわりにはすでに日本の9割近い割合であらゆ

るシェアを独占、世界だと3割近いシェアを独占している。しかも独占している所は各国の大企業、重要施設等のその国に必要な施設の電子機器から、建築、警備、資材の搬入などをほぼ独占しているのでもし世界電腦からの支援が受けなくなると確実に国の機能が麻痺するとまで言われている。

世界電腦の首脳陣はグレートゼオライマーが選別し選び出した人間に”特殊”なナノマシンが投入されているので逆らう事や裏切りなどは絶対に起きる事はない。

世界電腦所属、人材派遣組織、「ACE」

世界電腦が誇る人材派遣組織。「軍人からベビーシッターまで」と限りなく幅広い職種に対応し、さらに派遣されるのは皆一流と、派遣組織としては最候補の組織である。

最近出てきた、ISに対してもすでに一流の人材を揃えている。その中には山田真耶の名前も…

八卦龍

世界電腦の技術者達が作り上げたキノの為の専用機。専用機だがISではなくISの機能を使用できるだけの完全な別の機体。

機体性能は他のISと比べると圧倒的に高い。基本性能だけで第三世代のISを圧倒できるほど

八卦龍には戦闘補助用の高性能AI「MIKU」が搭載されており戦闘時には各装備の制御や情報処理などを担当し、日常生活でもIS学園内でのみ様々な情報の報告を担当する。

が、いかに高性能であろうともキノの持つグレートゼオライマーには足元にも及ばない。

八卦球

八卦龍に搭載された専用特殊装備。

”風”、“火”、“水”、“山”、“地”、“月”、“雷”、“天”の八つからなる特殊装備。

基本形態は薄く発光する黄色い球体で、それを八卦龍の両肩と胸部にあるアタッチメントに装備する事で各文字に対応した装備を展開、使用できるようになる。

装備していない時はBT兵器として機能し、自動行動、自動迎撃、自動防御と機能する

両肩と胸部の三箇所装備する事ができるので合体攻撃的なことも可能。

”特殊” ナノマシン

グレートゼオライマーが作り上げたナノマシンの事。これを投入された人間はナノマシンが細胞を少しずつ作り変え約一週間で体中の細胞を作り変えられてしまう。

作り変えられてとは言っても人では無くなる、のではなくむしろ身体能力の向上、老化しなくなる、精神状態の改善とむしろ身体に対してはいい事だけである。

が、その機能は唯のおまけであり本来の機能とは全身の細胞を作り変える時に対象のDNAレベルでのグレートゼオライマーへの服従である。

一度命令されたら一切の抵抗は出来ず、むしろその命令は自分で考え出した、とまで思ってしまうほどである。

始まりの日（前書き）

時間軸がおかしい事になっていきますがそこは魔法の言葉「これも次元連結システムのちよつとした応用だ」で何とかかなります。

始まりの日

12年

あの転生うんぬんから12年がたった。

あの老人は俺が言った通りの特典を付けてくれた。一つ目の元いた世界と似た世界に、というのは確かに細かいところは微妙に違うが気にしなければ元いた世界とほとんど同じ世界である。2年前にここは違う世界なんだと改めて認識したが。

二つ目は馬鹿が寄って来ないようにといったのだが12歳で身長が180cm越しとかねーよ。まあ身長だけならまだ良いんだが目付きがヤバイ。三白眼で、濁った目付きになってる。どこのヤクザだ。おかげで学校のクラスは毎日が葬式のごとく沈んだ雰囲気になってた。

おかげでよく絡まれたのだが大体が目を合わせると逃げていく。まあ楽だから良いか。

で三つ目の自衛手段だが・・・酷い。これしか言えん。確かに誰にも負けないとは言ったけど、ここまでとは。ここまで来るともう笑うしかない。というか笑ってないとやってられん。

さて特典のことはここまでにして今何をしているかというところガテン系の仕事で働いてます。

「おーい、キノ休憩だ」

「はい。二宮さん」

この人は二宮銀二さん。この仕事場の先輩でいろいろとお世話になっている。

「いや、キノが来てから仕事が楽になったよ」

「・・・そう、でしょうか？」

「そうだとも。背が高くて力もあるし人一倍働く。まあ目付きが悪いのが玉に傷だな。・・・今の男共は根性が無いから」

「・・・まあ、そういう時代ですから」

2年前に起きた通称「白騎士事件」

日本に向けて2000発以上のミサイルが発射されるという事件が起きた。だがそのミサイルの半数以上をたった一機で撃墜したIS、それが通称「白騎士」と呼ばれるISだった。

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」宇宙開発を目的とされ開発されたマルチフォーム・スーツ。宇宙開発を目的として開発された物の「白騎士事件」のせいで軍事目的として使用されるようになってしまった。

これだけならまだ今のような女尊男卑の世界にはならなかったのだがこのIS“女性しか扱えない”のである。このことから「女性“偉い”などという風潮がおき今のような女尊男卑の世界になってしまったのである。」

「まったくISだがなんだか知らんがおかしな世界になっちまった

もんだな」

「そう、ですね。……ホントおかしい世界ですね」

「そうだとも！あの白騎士だか白錦だか知らんがあれが日本を守ったとか言われているが犠牲者だって出ているんだぞ、……つと悪いお前に言うことじゃなかったな。すまん」

「いえ、もう済んだ事ですから」

そうこの「白騎士事件」表向きは犠牲者が出てないようにされているが真実は違う。

一組の夫婦が犠牲者として死亡しているのだ。夫婦の名前は「鈴木直弥」「鈴木裕子」そうこの世界での親である。あの日、親父とお袋は結婚記念日として旅行に行った日だった。せつかくの記念日だからと二人で行ってもらったのが間違いだった。三人で行っていれば二人は死ぬことはなかった。

親父とお袋はこんな見た目の俺をなんの偏見の目で見ることなく育ててくれた。元の世界では殆ど無かった親子の絆という物を教えてくれた両親に対して本当に尊敬し、愛していた。それをあのISが奪ったのだ。その時初めて俺は、自分の意思で「アレ」を使った。今思えばいくら両親を殺されたとはいえ殺したのはミサイルでありそれを撃墜していた白騎士に当たるのは間違いだったが、あの時はそうでもしなければ自分を保っていられなかった。

「まあアレだ。困った事があつたら相談しな。できる限りは応えてやる」

「ありがとうございます」

「……さて休憩はここまでにして始めるか」

「はい」

ちなみに12歳でなぜ働いているかというところ、まずは自分の精神年齢の事がある。この世界の戸籍上は12歳だが精神年齢は結構な年なので子供の中ですでに復習し尽くした授業を習うのはかなりキツイ。見た目の事もあり第三者から見ると、中学校のクラスの中に成人男性がしかも裏家業の人っぽいのが一緒に勉強している、という風に見られるので、というか見られてたので中学校の担任と、校長先生に相談して必要最低限の出席だけして後は外に出て働く、という事にしてもらった。いろいろ無理があつたが何とかこり押しで通らせた。

自分の見た目のせいで学校を脅してるように見えたが気にしない。

未成年者保護・労働基準法等もいろいろ問題があつたが「アレ」を使い戸籍上の年齢を+10歳ほど足して書類上は問題ないように細工した。「アレ」が便利すぎる気が……

此処の会社の人たちはあまりこちらの事情等に深く聞きはしてこなかったので助かっている。二宮さんに聞いたところではこの会社そうだったいろんな事情を抱えた人でもシツカリと働き、問題を起こさなければある程度目を瞑ってくれているらしい。

あと、両親が死んですぐに政府から、今回の事件の事で死んだ両親の事は「白騎士事件」とは何の関わりは無いことにする。などというふざけた事を通知してきた。大量の金額の入った通帳と一緒に。

しかもこの事を第三者に少しでも漏らせば日本、いや各国で生活できないようにすると脅しの文章も入っていた。実際「アレ」から自分の家が監視されていると報告が来た。

政府としては今回の事件でISの有用性がハッキリと分かったのでこの事件で人が死んだ、などという汚点を作りたくは無かったらしい。俺がただの一般市民ならこの事に対して口を塞ぐしかないが、俺はただの一般市民ではない。だから報復してやった。

こんな事を仕出かしてくれた馬鹿な役人さんは、立て続けに不幸な出来事が起こり続けて精神を病んでしまい専門の病院に入院したそうだ。

「ぱぱと終わらせて飲みに行くか」

「……いや、自分未成年ですが」

「キノの見た目ならわかんねーって。はっはっは」

「……はあ」

ちなみに今は、両親が残した遺産で生活をしている。結構な金額があつたけど、このお金は無駄に使う事はしないように、自分の生活費は自分で稼いでいる。

政府が寄こした通帳はそっくりそのまま「アレ」に調べさせた全うな慈善団体に寄付した。口止め料なんて汚い金だが全うな事に使われればいいだろう。

親父、お袋。今の世界は居心地が悪いですが何とかやっています。
なので安心して見守ってください。

とある軍事ファイルより

「冥王事件」

白騎士事件が起きた日の深夜に起きたもう一つの事件の通称である。

当時ミサイルを単機で撃墜するという驚異的な戦闘力を見せた白騎士を捕獲するため各国の戦闘機や戦艦などが深夜に総攻撃を開始したものの白騎士により半数以上を撃墜され捕獲は不可能と各国の上層部が判断し白騎士も戦闘区域を離脱しようとしたとき、「アレ」は現れた。

白騎士とは違い完全なロボットと違っていい装甲、白騎士より一回りほど大きい全身、ただそこにいるだけで周りを威圧するような雰囲気を感じ何よりも驚かせたのは、突然現れたことである。半数を撃墜されたとはいえ戦艦のリーダーは機能していてリーダー範囲には何も反応は無かったし、白騎士もあの機体の出現には驚いていたようだ。

そして、現れた機体が右手を白騎士に向けて突きつけ手の先にある球体が光った時白騎士の体が吹き飛んだのである。戦闘機以上の速度にミサイルを撃墜する戦闘能力を見せ各国の軍事力を単機で半壊させたあの白騎士が避ける事もできずに吹き飛んだのである。

そこから、白騎士と謎の機体の戦闘が始まったのだが先の戦闘よりも各国衝撃が走ることになる。

単機で軍事力を半壊させる白騎士を「圧倒」しているのである。

白騎士の持つブレードは肉眼で見えるほどの厚いバリアに防がれ、

右手の球体が光れば白騎士に衝撃が走り左手の球体からは極太のビームを出し白騎士を攻撃し、距離を離そうと白騎士が全力で離れても一瞬で後ろに回りこまれ殴り飛ばされてしまう。

各国の軍事力を半壊させる白騎士を子ども扱いする謎のロボット。白騎士を圧倒し白騎士の装甲がボロボロになりブレードも折れ撃墜されそうになった時あのロボットは急に攻撃を止めたのである。そして苦しむように両手で頭を抱え消えてしまったのである。

その後白騎士はこちらの追撃を振り切り逃走。あの謎のロボットも行方知れず。各国はこのことに対して緘口令を出しあのロボットに「プルート」、冥府の王というコードネームを付けた。このことよりこの深夜に起きた出来事を「冥王事件」と呼ぶようになった。

白騎士がISと発表され開発者の篠ノ之東博士に各国がプルートの事を追求しても、篠ノ之博士は口を閉ざし行方を暗ましプルートの謎は深まるばかりである。

始まりの日（後書き）

やっ
ち
ゃ
た
ぜ

運命が動いた日（前書き）

主人公がチートなのではない。自衛手段がチートなのである。

運命が動いた日

15歳になりました。

13歳から肉体労働で働き出した俺だが、体のほうもチートだったようで働けば働くほど力がついていつて今では仕事場の主力になっている。鉄骨も一本なら普通に持てる。でもムキムキのマツチヨではなく引き締まった体で身長と目つきのせいでさらに人相がやばくなった。

働くと同時に勉強も始めた。一応中学校は卒業したが中卒程度の学力じゃやっていけないから。勉強を始めてから気づいたが頭もチートだった。前世では赤点ギリギリの英語や社会など一度教科書を読み、問題を解くを2〜3回繰り返し返せば完全に理解できるようになっている文章も同じで2〜3回読めば暗記できる。おかげで勉強が楽しくてしょうがない。

このおかげで今では各分野の専門書を使って勉強している。皮肉な事だがさまざまな専門書を読み学習していったおかげでISの事にも詳しくなってしまうた。

今の時代ではどの専門分野でも最終的にはISに関わってきてしまふので、どうしてもISに詳しくなってしまう。別に知りたくも無いんだがな……

最近の生活は朝4時に起きて6時までトレーニング。7時までに朝食や弁当作りを済ませ仕事場まで走っていき8時から夕方6時まで肉体労働。帰りも走っていきながら帰り9時までに夕食や買い物掃除等を済ませ深夜1時まで勉強をして就寝。かなりハードだがチ

ートボディは伊達じゃなく病気にもならず普通に生活ができた。

最近になってこのハードな生活にもなれ余裕ができてきたので「アレ」を本格的に扱えるように訓練を始めたのだが、スペックがおいしい。

確かにゲーム内でもバランスブレイカーだったがここまでじゃなかった。今はある程度専門知識があるが有るからこそこの異常がよく分かる。なんで最弱の武装もフルパワーで使ったら気象衛星に観測されるサイズの竜巻が出るって。最弱でこの威力。フルパワーで最強攻撃を使ったら……。考えるのは止めとこう。

取り合えず武装面は置いといてシステム面の方かというと、これもおかしい。空間跳躍・全方位バリアー・無尽蔵のエネルギーはまだいい。ゲーム内もそうだったから。

ただ何だこの自己修復機能って。

機体の修復は分かるがパイロットも修復するって。確かに仕事で切り傷や擦り傷がすぐに治っておかしいとは思ったがこれを見る限り木っ端微塵になっても即座に再生修復するって、どこの不死身の化け物だ。さらに時間停止機能まである。

相手は時間停止機能で動けない状態でこっちは無尽蔵のエネルギーを使った殲滅攻撃を乱発できる。

「……………酷いと言えん」

さらに調べると兵器としての機能以外にもパソコンや時計、電話にメール等々さらには電子レンジに冷蔵庫と、兵器以外の機能もかなりあった。今までこいつを使う機会が殆どなかったから、こんな機能が有るとは知らなかった。

さらに調べてこれを見つけた時はとても間抜けな顔をしていたに違いない。

「……………ISコアの製造方法だと」

あわてて調べたらこいつ、ISコアにハッキングをかましてデータを根こそぎ奪っていやがった。

さらにコア製造方法を元に俺の専用機を製造しようとしていた。無論即中止してその製造は破棄させた。なぜこんな事をしたのか調べたら「自衛手段」とか返してきた。

自衛手段でなぜ専用機の製造になるのか調べたら、白騎士と戦闘をした時ISを俺にとって有害な物と認識したのだが自機は俺の自衛のため自由に動く事はできない。

”なら同系統の技術、つまりISを使用し最強の機体を作り他の有象無象が手を出せないようにすればいい”

などという機械にあるまじきぶっ飛んだ理論を考え実行しようとしていたのである。

専用機のスペックもこんなぶっ飛んだ理論を出すだけあってスペックもぶっ飛んでた。

システムの応用により無尽蔵のエネルギーを供給し空間転移をしながら相手の360度全方位からビームを叩き込み、相手の攻撃は常時展開しているバリアで無効化。終いには時間停止の機能を使い全方位からビームを打って回避不可能の状態にしてから時間停止を解除するという、どこぞの吸血鬼のようなISに有るまじき機体を作ろうとしてた。

製造する前に見つけれてよかった。ホントによかった。

このIS製造以外の自衛手段は何だと調べたら、核弾頭による放射能汚染の除去の仕方、バイオハザードが起きた時の対処の仕方など、普通はありえんだろ、というような物が多々あった。しかもその殆どにフルパワーによる最強攻撃による無力化と載っていた。

「汚物は消毒だー！」とでも言わせる気か。こいつは。

他にも何か変な事をしていないか調べたら、各国の貸金庫に数億から数十億の資金を作ってた。どういことだと調べたら「何事も金があれば大体どうとんでもなるから」などと返してきた。

こいつ俺を無視して自立稼動してないか？

とにかくこれ以降何かする時は俺に確認するようにした。これで馬鹿な真似はできないだろう。専用機なんていう今の世の中じゃ厄

介事以外の何物でもない物なんていらなんだよ。俺は静かに、穏やかに、平穩に過ごしたいんだ。ISなんていう厄介事の塊に、ISの生みの親に目を付けられたくないんだよ。

この時、俺は”専用機の製造破棄”ではなく”ISCコアの製造方法”に関するすべてのデータの破棄をするべきだったのである。

専用機の製造可能という事は俺がISを”扱える”という事であ

り、ISの”女性しか扱えない”という常識をぶち壊す物であり、このミスが後に俺に特大の厄介事を持つてくるとは今の俺は思いもしなかったのである。

とある秘密ラボ

「ふんふん」

複雑に並んだケーブル、大小さまざまなモニター、積み重なった専門書。

そこで頭にウサ耳をつけ居座る女性が一人。

「ふんふんふん……ん？」

「この子にあるこの跡は何かな？」

常人には真似出来ない速度でタイピングを始める彼女。

その顔は、先ほどの笑い顔から変わり表情が無くなり人としての感情がまるで無くなり機械の様な無表情になった。

「私の大切な、大切な子からデータを奪った物がいる？」

「.....い.....せない.....」

「私の！私の子供から勝手にデータを奪うなんてゆるせないいいいいいいいい！！！！！！」

錯乱したかの如く周りに当り散らしそれでも気が治まらないのか親指の爪を噛みだす。

この姿を、彼女を知っているものが見れば驚愕しただろう。

自分と数人の人物以外はそこら辺にある石ころ以下にしか思っていない彼女が声を荒げ感情をむき出しにして周りに当り散らす事などまず有り得ないからである。

運命が動いた日（後書き）

書いている途中3回ほど文章を消してしまい、テンションが駄々下がりになった。

束さんは書いてるうちにこうなってしまった。何でだ？
少なくとも初期の段階ではこんなキャラではなかったのだが。

取り返しの付かないミス（前書き）

原作に近づくよ

取り返しの付かないミス

18歳になりました。

「アレ」を本格的に扱うようになって3年。3年前と比べ体も頭脳もかなり向上したのに未だにこいつの底が知れない。扱うだけならゲーム内の中盤ぐらいのマサト君ぐらいはいけるが、終盤のように科学者とパイロットとしてはまだまだである。

こうして、「アレ」を扱えるようになって思うのはマサト君マジ主人公。チートボディを貰って毎日仕事に勉強づけでむろん真面目に「アレ」を扱えるように特訓をしているのに半分ぐらいしか扱えないって言うのに、マサト君はマサキの記憶が有るとはいえ一年からずくに一流パイロット並みに扱えるんだから主人公補正がどれだけすごいかわかる。

ちなみに訓練をする時は地球にはいません。主に宇宙で訓練をしています。理由？地球内で訓練をできる場所なんてありません。出来たとしても機動訓練が精一杯。攻撃訓練なんてしたら即ばれます。

で、宇宙空間で攻撃訓練をして各武装を試してみたのだが……うん。俺ISに使うのは禁止するわ。各惑星から離れたところにある隕石（といっても直径で数キロ以上あるが）に対して使用してみたのだがどれをつかっても木っ端微塵になってしまう。最小パワーで。

こんなんISに使ったら絶対防御？なにそれおいしいの？の如く塵一つ残さず消滅してしまう。オーバーキルも真っ青だよ。ゲーム内だとこんな攻撃をポンポン出してたのか。地球スゲー。

さて、「アレ」の事は置いて最近の出来事を話そう。

「白騎士事件」を筆頭にISの出現による女尊男卑の横行。ISに乗れるわけでもないのに”女性だから男性より偉い”などという馬鹿げた考えが蔓延し女性が男性をパシリに使う、なんて事が当たり前の世界になってしまっている。

俺の周りはまあ重労働の仕事だから女性は殆どいないからあまりそういうことは無いが、他の仕事は大変のようだ。

「おーいキノ。仕事場に行くぞ」

「はい。いま、いきます」

「しかし、最近の情勢はひでーもんだな」

「そうですね」

「アイエスだかアイスだかよく分かんが自分が乗れるわけでもないってのに自分は偉い、なんて思ってるやつが多くて大変だよ」

「本当ですね」

「まあ家は、前から力カア天下だな。がはははは」

「ふふ。二宮さんの家は、前からそうでしたね」

二宮さんの奥さん、二宮恭子さん。一人暮らしの俺によくしてくれた人である。肝っ玉が強いとか何というか、俺と始めてあったときも

「暗い顔だね、もっと笑顔になりな」

と、俺のこの顔を見ても驚くどころか笑いなとってきた人だ。
二宮さんの家はカカア天下だが二人ともお互いを信頼しあっている
から喧嘩もするけど、喧嘩するほど仲がいいという感じだ。

「まあ、なんにしても俺たちがすることは変わらんがな」

「ええ。そうですね」

そして、今日の仕事が終わりいつもどおりに家に帰り勉強をして
寝た。

（明日から、一週間近く仕事が無いんだっけ）

（いい機会だから宇宙で長時間訓練をしようかな）

そんな事を考えながら眠りに付く。

一週間後

「うゝゝん。久しぶりの地面だな」

一週間前に食糧や水などを買い込みそのまま、ずっと宇宙で訓練をしていたのである。

「ここ一週間の情勢はどうなったかな」

ピ、とテレビをつける。

「ゝゝであり、6日前に世界初の”男性”のIS適合者が発見されたことを受け、政府は各県の男性に対し適正試験を開始すると」

ピ、とテレビを消す

・

・

・

・

・・・は？

「”男性”の適合者、だと」

「……まあ、俺には関係ないか」

「専用機の製造は中止して、破棄したからな」

この時、もつとよく考えていれば回避できたのに、”破棄した”という結果だけに満足してしまいそれ以上のことを考える事を止めてしまったのが、この後の取り返しの付かないミスに繋がるのである。

数日後

「……っつ、か」

今俺は、適合検査の会場に来ている。あのニュースを見てから数日後に政府から適合検査の通知が来て会場に来たのだが、メンド臭い。

俺の周りには人がいない。政府開催の検査だから、と言う訳ではないが外出用の服を出して着ているのだが、黒のスーツに真っ白のシャツ、赤いネクタイを着こなし目つきを隠すためにグラサンを付けている。

検査を受けるといふより、ヤバイ物の取引に行くというほうがしっくりと来る見た目である。

受付の人かなりビビッてた。

「番号893番の方、どうぞ」

「……俺の番、か」

ゆっくりと立ち上がり検査会場に向かう。そして検査会場にあったのは静止状態のIS。

「では、このISに手を触れて、ヒィ」

「………フウ。何か」

「い、いえいえ、何でもありません」

ビビられたことにため息をつきながら、ISに手をかざしたら突如流れ込むISの情報。

「これ、は……………」

「う、うそISが起動してる！」

ほんの一瞬でISの機動情報から操作手順などさまざまな情報が頭に直に流れてきたが思った事はただ一つ。

（…………なぜ、なんでISが起動するんだ？）

（「アレ」の中にある専用機の製造情報はすべて破棄したはずなのに）

（今「アレ」の中にあるのはISコアの製造ほ……………」

（ISコアの製造方法！！）

（そうか！製造方法が分かるなら其処を弄って”男性”である俺が扱えるようにする事なんてこいつには簡単な事）

（だが、それはあくまでこいつの中にあるデータを使った場合だ）

（今触ったこのISにはこのデータは無い。ならなんで……………」

「……………さん…ノさん…キノさん！！」

「………な、なんですか」

「さっきから呼んでいるのに気づかれなかったので」

「い、いや。ちょっと、驚いてしまって」

「まあ、その気持ちは分かりますが・・・とにかく貴方は世界で一番目のIS”適合者”になりました」

「ですからこの後は~~~~~」

其処からの記憶はあやふやであまり覚えてはいない。

ただ分かる事は俺の静かに、平穩に、穩やかに過ごすというのはもう不可能ということだ。

取り返しの付かないミス（後書き）

補足

なぜキノがISを起動できたかというところグレートゼオライマーがISコアのデータを根こそぎ奪った後そのデータを弄ってキノが起動できるように書き換えた後でそのデータを今後はISコアにインストールしたからである。

インストールしたのはキノに専用機の製造を止められた時の保険である。

製造を止められる

←

自機は動けず、専用機も作れない

←

なら他のISコアもキノに反応する

←

そうすれば専用機を作らざるを得ない

←

結果 専用機が作れる

自衛手段のためならキノに対する迷惑もいとわない。

それがグレートゼオライマークオリティ。

束さんが気が付いたのもこのインストールの跡に気が付いたからである。ただ中身を書き換えられた事は”データを奪われた”事に意識が向きすぎていた事と、さらに自分以外の人がISコアのデー

タを書き換えられるとは思っていなかったからである。

つまりキノの平穩を奪ったのはグレートゼオライマーなんだよ!!

Ωくナ、ナンダッテー

話し合い（前書き）

原作突入はもう少し先。

そして遂にあの名前が登場！

話し合い

あの適正試験から一週間。

疲れた。体はまだまだ動けるが、精神がガリガリと削られた。

あの後、俺は政府のお偉いさんや政府お抱えの科学者に会わされた。まあ世界で二人目の”男性”の適合者、しかも二人とも同じ国から発見されたのだから、お偉いさんはいろいろと大変だったようだ。

お偉いさんとは交渉役の人と一緒に話しをしたのだが。ただ、ね。会ったたび会ったび皆ビビるんだよ。試しに少し不機嫌な顔して舌打ちしてみたら、交渉役の人冷や汗だらだら流してたからね。政府の人も強気な態度をとってはいいたけどよく見て見ると震えてたから。

交渉はとても難航した。俺はISなんていう厄介事に関わりたくない。筋違いかも知れないが「白騎士事件」のせいで俺は両親を亡くしているし、その死亡を政府は国際的な影響だの見栄だの何だのでこの事件に関係ない事にしたのだ。しかもその子供に親の死亡の詳細を他の人に喋る事を禁止したのだ。その見返りなのか大金を送ってきたが全部即寄付してやったがな。

政府としては、自国から見つかった二人の”男性”適合者。今の女尊男卑の世界を変えられる可能性を秘めた二人を手放すなんて事はできない。出来ないのだが、一人目は、その背後に世界最強の称号を持った姉と、今の世界を作り出した世界最高の頭脳を持つ天才がいるので、下手に政府が手を出したら世界最強と世界最高の頭脳を敵に回すことになるので下手な事はまずできない。

では、二人目かというとバックにはこれといったコネや人脈は無いから手を出せるかというと、これも難しい。なぜなら彼は間接的にとはいえISによって両親を亡くしており、そのせいで中学に上がる前から働いていて調べたところ成人男性でも根を上げるような重労働をしており、しかも政府は彼の両親の死の真実を見栄のために「白騎士事件」とは関係ないことにして、その子供に対して真実を語る事を禁止しその後は大金を渡しただけでその後の事は、アフターケアの一つもしていなかったのである。

こんな事を仕出かしておいて適性があつたら掌を返したように、あれこれいつてきてもまず信用などされるわけが無い。

「で、ですから政府としては、キノさんには身の安全を確保するためにIS学園に入学していただいてですね」

「……」

「も、もちろんそれ以外にも要望がありましたら最優先でお答えしますし」

「……」

「せ、政府といたしましてはキノさんには、毎月それなりの金額を払いますので」

「……」

「で、ですのでその、…IS学園にご入学していただけないかと」

「……………」

「だ、だめでしょうか」

「……………」

「あ、あはは」

「……………俺に」

「え？」

「俺から、両親を奪ったISに関われと。」

「い、いやそれは……………」

「俺の、未来や夢を踏みにじったあISに関われと。」

「そ、そんな今度は俺から自由まで奪うのか！……………」

「ふざけるなよ」

「ヒイイ」

「ISの適合者なんていう糞の役にも立たない物のために、俺の自由を奪われてたまるか。これ以上、貴方たちと話す気はありません。帰らせていただきます」

「え、い、いや、キノさん！？」

政府の人の声を無視し、止め様とした人を押しのけ無理やり帰った。

この時ISが起動した事や、政府の人の対応、それ以外にも「アレ」のしでかした事などで冷静でいられなかった事が、まだ取り返しがかるうじてつくこの出来事を取り返しの付かない結果にしてしまったのである。

次の日

一日たつてある程度落ち着いて、とりあえず自分の部屋で寛いでいたら、小型端末から電話の着信音がしたので見てみると。

「二宮さんから？」

この小型端末、見た目は最新式のスマートフォンだが中身は「アレ」がやりたい放題自重せずに作った物なのでいろいろとおかしな機能が入っているが今はおいておき

「はい、すず「キノか！！俺だ、銀二だ！」っ、に、二宮さん？」

「ど、どうしたん、ですか？」

「どうしたんですか？じゃねえよ！！おまえテレビ見たか！！」

「いえ、今日はまだ」

「ならすぐにつけてニュースを見てみる」

「ニュース、ですか？」

ピ、とテレビをつける。

「~~~~~先日未明に、世界で二番目の男性のIS”適合者”が発見されました。名前は「鈴木 キノ」18歳で~~~~~」

そこには俺の名前と写真、そして”IS適合者”の情報が流れていた。

「こ、れは」

「そうだ、キノがISの適合者だなんてのがどの番組でも流れてやがる。おかげで会社になんという事なのかっていう電話が鳴りっぱなしだ」

「な、なんで」

「何でかは俺が知りたいくらいだ。とにかくキノ、一度会社に来て……おい聞いているか、き」

「フ」

「フハハ」

「フハハハ、アーハハハハハハッ!!!!!!!!!!!!!!」

「政府の連中やりやがった」

「俺が、適合者ということを世界にばらしやがった!」

「これで、世界各国から狙われなくなったらIS学園に入れっ
てか」

「いいよ。あんたらの思惑に乗ってやる」

「ただし、報復はさせて貰うからな」

「なんせ、先に手を出したのはあんた等だ」

「だからこれからする事は『自衛』だからな」

「だからやっちまえ」

「グレートゼオライマー」

とある新聞の記事より

「国会議員謎の失踪!？」

先日、わが国で二人目の”男性”のIS適合者が発見され世界的な話題となった。

一人目が発見されてから半月とたたずに二人目が発見された事に対し政府は

「この貴重な人材は国を挙げて保護していきたい」

と、発表し二人をIS学園に入学させる事を決定した。
二人は15歳と18歳と多少年は離れてはいるが二人しかいない
適合者である。

仲良くしてもらいたい物である。

一方で二人をIS学園に入学させるように指示した国会議員が謎
の失踪をしているとの
噂を入手した。

これは二人の入学が決定してからそれを指示した国会議員の数日
間の行動が、

まるで神隠しにあつたかのごとく不明な事が原因と見られる。

議員の殆どがその間の記憶がハッキリとせず曖昧な証言しかして
いないのだがその中で気になる証言があつた。

「顔の所に光る球体がついた巨大なロボットを見た」

ロボットと聞けばISを思い浮かぶが顔に光る球体をつけたIS
など聞いたことが無い。

これは錯乱し幻覚を見ていたのではないかという説が強いが、何
人かが同じような

証言をしていることから何かしら繋がりとすると、私は思う。

後日、この記事を書いた新聞会社は小火が起こり
なぜかこの記事の情報だけが焼失してしまったのである

話し合い（後書き）

はい、やっちまいました。

書いているうちに当初考えていた入学方法と全く別の方法になってしまいました。

当初は「白騎士事件」の詳細を発表する事と引き換えに入学し千冬さんとあったとき罪悪感を抱かせるつもりがなんでこうなった。

しょうがないので千冬さんには別の仕方罪悪感を感じてもらおう。

次回予告

謎の失踪を遂げた国会議員

そこで見た謎のロボットとは

国会議員は本人なのか

裏で動く巨大企業の影

キノのこれからはどうなってしまうのか

次回

「巨大企業『国際電脳』の真実」

君は冥王の力を見る

予定と書いて未定と読む

入学準備と書いて侵略済みと読む（前書き）

今回グレートな自衛手段が自重していません。

人によっては嫌悪感を感じるかもしれませんが感じる人は読むのを止めください。

それでも読む！という人は、めい　おーと叫びながらお読みください。

入学準備と書いて侵略済みと読む

世界に情報がばらされてから数日後。

「グレートゼオライマー」に「殺すな」とだけ命令を下し馬鹿な事をしてくれた政府の人間に、「自衛」行動を実行させた。

結果。殺すより酷い事になった。

「GZ」（名前が長いので頭文字だけで）は今回の馬鹿げた行動を起こした立案者、実行者等ちよつとでも関与した人物すべてを対象として行動を開始した。

ほんの数十分で関与した人物全員を洗い出し、その人物達の過去の経歴から始まり人脈や総資産、家族構成に身体情報など、有りとあらえるすべての情報を集めてきた。中には愛人関係だとか汚職だとか本人しか知りようの無い情報とかがあった。

で、その情報を使い一人一人呼び出して「GZ」がしたことは自己修復機能の応用で作った特殊なナノマシンを脳内に投入し人格をそのままに、こちらの命令を忠実に聞く生き人形にしたのだ！

このナノマシンの怖いところは一度投入されてしまうと投入された人物の細胞と一体化し少しずつ体を作り変えていく事である。作り変えられた細胞は普通の細胞と全く同じなのだが、唯一違うのはDNAレベルで「GZ」の命令を聞くようになっていたという事だ。

さらにこちらの命令に対して一切の疑問を持つ事は無く、自分自身で考え行動したかのごとく思ってしまうのである。今回の事で俺

は日本政府の約3割から4割の人間を自分の思いど通りに動かせるようになってしまったのである。

やっちまえ、と命令したのは俺だがこの結果は考えもしなかった。というか想像も出来ないよ。俺の命令一つで日本政府内でクーデターとか起こせるのである。

やりすぎだろ。

ただこのナノマシン、こちらの命令を聞かせる（強制）以外は、投与された人物の身体能力や代謝機能、精神安定などなど色々と向上させる機能になってるので良かったと思っただが、よく考えると俺の命令を忠実に聞く人物が長期間政府内にいるという事になり、さらに精神安定の効果のせいなのか投入された人物の人としての魅力？が向上するのか投入された人物に好意を持つ人物が増加する傾向にある。

つまりは政府内でいくつもの派閥が作られ、その派閥のトップに俺は、無条件で命令が出来るのだ。拒否は一切なしで。

「GZ」がした行動に、立ちくらみしそうになった。これだけでも酷いのさらに追い打ちをかけるかのごとくさらに、とんでもない情報を持ってきた。

以前、こいつが世界各国の貸金庫にウン十億もの資金を作っていると知ったのだが、どうやって作ったのか？こいつがちまちま株取引してるわけないしどうやって作ったのかというと……

世界規模のコンピュータ会社その名も「世界電脳」などという大企業を設立、運営してた。

「世界電脳」といえば日本に本社を構え世界各国に数百以上の支社や子会社を持っており、日本国内では約8割近い割合で使用され、世界では約3割もの使用率を誇る電子機器製造、販売をしている大企業である。

使用されている施設の殆どは各発電施設、各国の大企業、重要施設等を占めている。さらに子会社や支社等も建築業、食品加工業、ライフラインの設置、設備さらには専門職種の人員教育、派遣などなどがあり、こうした電子機器以外の事業も含めると他を圧倒的に引き離し世界のトップに君臨する企業である。

むろんIS関係も他の企業を大きく引き離し、噂では他の企業が未だ第三世代を開発、研究しているのに対しすでに第四世代の研究開発に手を出しているとか。

さらに「世界電脳」の作る機械部品全てに特殊なナノマシンが含まれており、その役目はその機械部品の使用履歴を記録し「GZ」に送信する、というシンプルな物だがその使用履歴は、部品の稼働回数から始まり、何時、何所で、どの様な事に使用したか事細かに記され、それが電子部品なら入力された文章ですら記録、送信されるのだ。

つまり、電子部品そのものが発信機であり、記録装置なのである。誰もキーボード”自体”が発信機になっているなど思いもしないだろう。

そして「GZ」に送られてくる膨大な情報を「GZ」は瞬時に処理、管理し俺はそれをいつでも閲覧できるのである。

そんな企業を作ったのが「GZ」であり企業のトップ陣営はあのナノマシンによってすでに生き人形になっている。つまり「世界電脳」のトップ陣営にも俺は無条件で命令が出来るのである。

．．．．

．．．．．

．．．．．

少しは自重しろ！！！！

気が付いたら、「GZ」に頼らなくても世界経済を意のままに操れるだけの権限を手にしてしまったのである。

そして、政府の馬鹿共のせいで入学する事になったIS学園だが建設された場所は”日本”内でありその特性上、学園設備は細かい物を初めとするすべての設備にトップクラスの技術が使われる場所である。

Q 世界規模で電子機器から建築、整備運搬等の技術を持っているトップクラスの企業は？

A 世界電腦だろ。常識的に考えて。

IS学園のほぼ全ての設備は「世界電腦」が作っているものであり、さらに其処に勤務している人員の大体が「世界電腦」から派遣され、「GZ」は「世界電腦」の作り出した物全てを管理、運営しているのでつまり、IS学園で俺に対して隠し事は不可能、という事だ。

どんな魑魅魍魎が出るか場所かと思っていたら、自分で作った箱庭と言っていい場所だった。

と言う事で、入学する前からすでに侵略済みという圧倒的な余裕を持つ事で何とか気持ちを持ち直し一応3年は通う事になるであろう学園の注意人物を「GZ」を出してもらって確認していると、

「生徒会役員……」

「……更識 楯無、その配下、の布仏 虚と布仏 本音」

「各国代表候補生……」

「……更識 簪、セシリア オルコット、サラ ウェルキン」

「IS学園の事実上の運営者……」

「……轡木 十蔵。」

「教師陣は……！」

「……織斑……千冬！」

「そうか……貴方は、まだ”IS”なんて物に関わっているんだ」

「そうか……そう、か……」

「……決めた。」

「潰そう」

「今の世界を作り上げた、ISを」

「ゆっくり、ゆっくり」

「砂時計の砂が落ちるように」

「そして、織斑 千冬に篠ノ之 束」

「貴方達には堕ちてもらいます」

「ISに関わった事を嫌悪するほどに」

「ISを作った事を後悔するほどに」

「ISが俺の未来を、夢を奪ったように」

「貴方達の未来を、希望を、生きる意味を」

「奪わせてもらいます」

「フフフッ・・・ハハハハッ」

「ハッ——ハッハッハッハ——！！！！」

ゆっくりと動き出した運命

砂時計の砂が落ちるようにゆっくりと破滅に向かう世界

ISによって破壊され、蹂躪された世界は

冥府の王によって再び破壊される

破壊された世界に有るのは

希望か、絶望か

それはまだ、誰にも分からない

第一部
完

入学準備と書いて侵略済みと読む（後書き）

なんでこうなった！

ども作者のマーシィーです。

勢いとその場任せに始めたこの作品。

初めの頃はこんな感じではなくもつとテンプレ臭がする作品になる
予定なのにホントなんでこうなった！

目つきの悪いキノがメインキャラに誤解されたり勘違いされたりし
ながら、グレートゼオライマーの力をバンバン使い進んでいくはず、
だったんだけどな。

あれだ、間違つて3回も文章を消してしまった時に出てきた束さん
のセリフあたりからそれはじめてこうなってしまった。

束さんの呪いか！

閑話 それぞれの過去 織斑 千冬（前書き）

原作との違いを考えてみる。

閑話 それぞれの過去 織斑 千冬

私の名前は「織斑 千冬」と言う。

周りの人間は私のことを「ブリュンヒルデ」や「世界最強のIS操縦者」等と言って称え、敬意や憧れを持って見ているが、私はそんな綺麗な人間ではない。力に溺れたった一人の弟を守れなかった最低の姉だ。

私たちの両親は、一夏が幼い頃、失踪した。もともと家には滅多に帰ってこなくて定期的にお金を振り込んでいるだけで殆どしゃべった事はなかった。だから私は一夏に寂しい思いをさせないように姉として家族として愛情を持って接していた。

だから、今でも思う。一夏の体ではなく心を守るべきだったと。

両親が失踪してから私は近所の篠ノ之夫妻のお世話になった。篠ノ之夫妻は剣道の道場を開いており私と一夏はそこで剣道を教えるもらいながら生活をしていた。

そこで一人の女の子に会う。それが後の世界を作り変えた天才、「篠ノ之 束」である。

彼女は普通の人とどこか違った。私と同じ年齢の癖に大人が読んでも分からないような専門書を読みいつも一人でパソコンばかり弄っていた。

だが、私は彼女のことが気になってしょうがなかった。

何故かは分からない。相性が良かったのかそれともそれ以外の何かがあったのかは分からないが、ともかく私は篠ノ之 束と親友になった。

それから私と一夏、束とその妹、篠ノ之 簞の四人で遊んでいた。

一夏と簞がじゃれあい其処に束が入り込み騒動を起こし、私が苦笑しながらそれを止めたりと、一番楽しくて、私がただの織斑 千冬でいられた最後の時だった。

私が高校に入学した頃に束が見せてくれた物。それは今のISの大本となるいわばISのプロトタイプだった。この頃私は自分たちの将来に不安を感じていた。何時までも篠ノ之夫妻のお世話になるわけにもいかない、だが一夏はまだ小学生にもなっていない。そんな不安の中、束に見せてもらったこのISのプロトタイプ。

まだ、社会に出てもいない子供だった私にはこれがどんな物か、そしてそれがもたらす結果を考えもせずただ、「これがあれば一夏を守る」そう思っていた。それが一夏を傷つけるとも思わずに。

これに関わりだしてから、私は家にいる時間が少なくなっていた。それで一夏が寂しい思いをしていると分かっていながらこれにのめり込んでいった。そして高校卒業がまじかに迫った、あの日。

日本に向かってミサイルが2000発以上発

射された

私はすぐさま束に、最終調整をしていたこの機体を使用できるように言った。

「束！すぐにこれの発進準備をしてくれ」

「な、ちーちゃん。この子はまだ最終調整が終わってないんだよ！」

「空を飛べて、ブレードが使えるばそれでいい！」

「でも「束！」っ」

「お前がこの機体を大事に思っているのは一緒に見てきた私にだって分かる」

「だが、今日本に向かってきているミサイルをどうにかするにはこの機体の力が必要なんだ」

「だから、頼む。この機体を出してくれ」

そう言って私は頭を深々と下げた。

「ちーちゃん」

「……分かった。そこまでちーちゃんが言うならこの子を出してあげる。」

「束！ほんと「ただし！」っ」

「5分待つて。調整を終わらすから」

「出来るのか？」

「私を誰だと思ってるのかな？世紀の大天才、篠ノ之束様だよ」

「ふふっ……そうだな。束は天才だったな」

「だったってどういう事、ちーちゃん!!」

そして調整の終わった機体、「白騎士」を装着し私はミサイルの迎撃に向かった。

ミサイルの迎撃は八割以上を撃墜し”多少”は迎撃できずに打ち漏らしてしまったが、十分納得のいく出来だった。

この時、私は「単機で千発以上のミサイルの撃墜」と言う普通ならあり得ない出来事を成し遂げた事に興奮しそしてそれを成し遂げた自分に酔っていてこの事件で起きた”被害”の事を何も考えてはいなかった。

その事が、後に私から全てを奪っていくとはこの時の私は思いもなかった。

その後、束から自分を捕獲するために各国の軍隊が派遣されたと

聞き、そこで戻ればいい物を先の出来事と自分は強いなどと馬鹿げた勘違いで束の静止の声を振り切り一人で軍隊の迎撃に向かった。エネルギーが半分を切ってはいたがそれでもこの「白騎士」の力はすさまじく、私一人で各国の軍隊を半壊に追い込んだ。そして各国が撤退を始めるのを見て私も撤退しようとした時、「アレ」は現れた。

白を基準に紫のラインの入った装甲

其処にいただけで他を圧倒する存在感

薄く光る球体がはめ込まれた頭部

こちらのセンサーに反応させず突然現れたその機体を見た時、私は言い様の無い寒気に襲われた。

その時、すぐさまその感情に従い逃走していればよかったのに、私の体は石のように動きはしなかった。

そして、その機体の右腕がゆっくりとこちらに向かって上げられその先端にはめ込まれた球体が光った時、先のミサイル迎撃の時や軍隊との戦闘、過去の訓練でも味わった事のない衝撃が全身に走った。

其処から、私の心を折る戦闘が始まった。いやアレは戦闘なんかではない、アレは私という<ゴミ>を処分するただの掃除だった。

金属を紙のように切断するブレードは目に見えるほど分厚いバリアに阻まれ、右手が上がれば何所にいてもどれだけ離れていても必ず全身を砕くような衝撃が走り、左手からは視界を埋め尽くすような光が走り、戦闘機ですら追いつけない速度で距離を離そうとしても、視界に入っていたのに次の瞬間には私の背後に出現し殴り飛ばされ、そしてまた右手の攻撃で弾き飛ばされる。

それはISと言う兵器に乗り、力に溺れ増長した私の心を折るのに十分な出来事だった。

そんな事が、五分か十分かそれとも一時間以上か時間の感覚が全く無くなりそして「白騎士」の装甲はボロボロでエネルギーも殆ど無く、ブレードも衝撃でへし折れ後はもうこのまま殺されるのを待つだけとなった時、急にあの機体からの攻撃が止まった。

どうしたと、見て見るとあの機体は両手で頭部を押さえ込み苦し

んでいるように見えた。そして一度だけこちらを見て、現れたときと同じように突然消えてしまった。

その後の記憶はあまり覚えてはいない。ただなりふり構わずにあそこから逃げ出した事だけは覚えている。

それから、私は普段人をおちよくするような顔をしている束に泣き喚かれながら、打たれ、殴られ、そして泣き付かれた。不謹慎だが初めて本気で怒られた事に少しうれしく思い、そして親友を此処まで悲しませた自分に激しい怒りを覚えた。

その後も一夏や箒、篠ノ之夫妻に怒られ悲しまれ、そして心配された。

だから、私はもう二度と周りの人を悲しませないようにと強く、強く自分を律する事にした。

常に自分を律し、常に人の理想で在れと思い、常に自分に対し厳しくしていった。

その姿を見て心配する一夏に厳しくしてしまうほどに。

世間にISが浸透し、そこでISを使用した世界初の大会、「モンド・グロツソ」が行われたとき私はあの時からどれだけ自分が”強く”なれたかを確かめる為、束が作った「白騎士」の後継機、「暮桜」と一振りの刀「雪片」と自分の技量のみで出場し、結果優勝し「ブリュンヒルデ」等と言う称号を得たが何の感動も興奮も自分が強くなったという感も得られなかった。

この頃、家に帰るのは月に2、3回で帰ってもただ寝るだけで一夏とも簡単な会話をするだけになっていた。まだ愚かにも私は自分の弟なら私のことを分かってくれているなどと、自分勝手なことを思っていた。すでに取り返しが付かないとこに來ているとも知らずに。

その事に私が気づいたのは第二回「モンド・グロツソ」が行われた時である。決勝当日、私は普段苦勞をかけている一夏に少しでも楽しんでもらおうと、招待状を送ったのだが

その結果は、「一夏が何物かに誘拐された」、と言う事だった。

その情報を、ある国の情報部から知らされた時、私の頭の中は真っ白になった。

もう心配させない、悲しませない、と誓ったのに私の立場を考えず、軽率な行動をとった結果が一夏の誘拐と言う最悪の結果となって帰ってきたのである。

情報部から貰った情報を片手に、決勝の事など考えもせず一夏の捕われた場所に向かい、そこにいた誘拐犯をなぎ払い雪片や、暮桜についた返り血もお構いなしにその施設の一番奥にあった暗く狭く、物が乱雑に放置された部屋に軟禁されていた一夏を見つけた時、私を見た一夏の顔は安心した顔でも助けが来たと安堵した顔でもなく無く

恐怖に怯え歪んだ顔だった

その顔を見たとき私は自分が一夏からどの様に見られているかを理解してしまった。

私は一夏にとってもう大好きな姉でもたった一人の家族でもなく

ただ、恐怖の対象としてしか見られてはいなかったのだ。

それでも、私は一夏を助けるために歩みよったのだが一夏がとつた行動は

近くに落ちていた先が尖った物を自分の喉に刺そ

うとしたのだ

それを見て私は直ぐに近寄りそれを払いのけ、「何をしている！
！」、と声をかけ様としたが一夏はさらに暴れだして私から雪片を
奪おうとした。

他にも方法は有っただろうに一夏の行動に焦っていた私は一夏を
殴り気絶させた。

その時、一夏が気を失う時言った言葉を聞いて私は絶望に襲われ
た。

「死に……た……い」

この時を境に、私は一夏の事が分からなくなった。そもそも私は自分以外の人の事を理解しようとした事があつたらうか。

一夏の事も、分かっているつもりでいただけで、一夏の好きな料理、好きな遊び、好きな事、一夏の学校の事、家で普段なにをしているかなど、私はたった一人の家族で、守って見せると誓った弟の事を何も知らない事にやっと気が付いた。

気が付いた時、もう私は一夏とどう接していいのか分からなくなっていた。

だから、一夏の前から逃げるように、情報を渡してくれた国に教官として向かった。

その後、一夏と擦れ違ったまま時間だけが経ちそして一夏が世界初の”男性”のIS適合者となって私が勤めるIS学園に入学してきた。

そして、二人目の”男性”のIS適合者が入学してくる時

私の運命の歯車が動き出した

子供だった私がした出来事が大人になった私に降りかかる

子供だったからなど通用せず

ただその運命を受け入れるしか私に出来ることは無く

愚かな私は

冥府の王の贅となる

閑話 それぞれの過去 織斑 千冬（後書き）

この作品内の千冬さんは白騎士事件の時まだ高校生であり、また対人関係や人生経験が家庭の事情で普通の人とより乏しくなっています。

高校生とは言えまだまだ子供。

そんな時まるでテレビのヒーローのような力を手に入れたら？

と、言う感じで書いてみました。

この作品内で千冬さんの厳しい物言いはただ単にそういう態度でしか他の人と接する事が出来ないだけ、というかそれ以外の方法を知らないからである。

いや、書く前はこんな鬱っぱい話じゃなくてね、千冬さんも、もっとまじな扱いだったんだよ。

ホントだよ？

ただ書いてる途中からどんどんずれて行って結局こんな感じになったんだ。

閑話 それぞれの過去 篠ノ之 束（前書き）

CAUTION!! CAUTION!! CAUTION!!
ON!! CAUTION!! CAUTION!!

今回の文章では束さんの行動が理解できない事があります。

支離滅裂な感じの部分があります。

原作の束さんのキャラを壊したくない。

こんなの束さんじゃない。

と思われることがありますのでそのような方は読むのはご遠慮ください。

CAUTION!! CAUTION!! CAUTION!!
ON!! CAUTION!! CAUTION!!

閑話 それぞれの過去 篠ノ之 束

八口八口、束の名前は「篠ノ之 束」って言うんだよ。覚えなくてもいいから。私の名前を覚えていいのは、ちーちゃんといっくん、それと箒ちゃんだけなんだからね。

束は世間からなにやら「世紀の大天才」とか「世界を壊した天災」だとか何とか言われてるけど、どうでもいい事だね。有象無象のどうでもいい物が何を言っても束様には関係ないのだー！

束は生まれてすぐに他の物とは違うって理解したんだ。だって他の物がまだ碌に文字を読めない時に束様はすでにいろんな分野の専門書を読んで理解できたんだから。ヒュー、さすが私！天才だね。

だからかな、束は何時も一人でいたんだ。周りの物は勝手に束から離れていったから。あ、でも箒ちゃんは違うからね。束の大切な妹なんだから。

でも、いいの。だって識別する必要も無い如何でもいいのが周りにいても鬱陶しいだけだから。

そんな時かな、初めて他の物とは違う、ううん。他の物と比べる事すらおこがましい私の、束の、大切な、たあああいせつな、初めての親友に会ったのは。

親友の名前は「織斑 千冬」って言うの。名前に似合ってたってモカッコよくてそれでいて他の物とは、違ってた初めてあった時に思ったの。

こんな事を思ったのは初めてでその感情が何なのか、どうしてそんな風に思ったのか、考え出すと止まらなくなりそうだったけど、

そんな事よりもつとつと千冬、いやちーちゃんの事が知りたくなつたの。

それからは、毎日毎日ちーちゃんといろんな事を話したんだよ。

他の物と違い難しい事を話し続けても少し困った顔をしながら最後まで聞いてくれるの。だからもつとつと話をしたんだ。

少ししてからちーちゃんの弟の「織斑 一夏」って言う弟君を紹介してくれたんだけど、弟君、そうだねーうん。いっくんはちーちゃんと同じでいっくんも他の物とは違うって思えたの。

その時の束はとっても幸せだった。だってずっと篝ちゃん以外で束が認識できる物なんていないと思ってたから。それが二人も現れたんだから束さんびっくりだよ。

その後はちーちゃんにいっくん、篝ちゃんと束の四人で遊んだんだ。楽しかったな。いっくんと篝ちゃんがじゃれあつてる所に束がちよっかいを出してそれをちーちゃんが苦笑しながら止めに入る。

そんな時間がずっと続けばよかったのに、楽しい事はすぐに終わっちゃう。ちーちゃんと束が高校に入った時かな、ちーちゃんが元気がなくなつてたの。何でもちーちゃん、自分の将来が不安なんだって。だからそんなちーちゃんに少しでも元気になつてもらえるために束が長年考えてた「この子」を見せてあげたの。そしたらちーちゃんすごく元気になつて束に「この子」の事をもつと詳しく教えてほしい」って言うてきたの。

束の子に興味を持ってくれて嬉しかった束は、ちーちゃんに「この子」のパートナーになつてもらおう事にしたの。束は調整や整備は出来ても、扱う事はできないから。

それから高校の三年間、ちーちゃんと一緒に「この子」の調整と訓練に費やしたの。この事でいっくんや篝ちゃんに寂しい思いをさせちゃったのは心ぐるしいけど、それでも「この子」の事の方があの時は大切だったの。

それで、卒業が近づいてきた頃、またちーちゃんの元気がなくなってきたの。「なんで元気が無いの」って聞いても、「気にしなくてもいい」って言って教えてくれないんだもん。教えてくれた方がいいのに。だから束は考えたの。ちーちゃんがなんで元気が無いのかって。

そして、思い付いたのが「あの子」を初めて見せた頃に言っていた「自分の将来が不安」って言う言葉。きつとちーちゃんは卒業した後が不安なんだ。だったらこの大天才である束様に言ってくれればいいのに。

どうしたら、ちーちゃんの不安がなくなるのか考えて考えたの。

（今の世間ではちーちゃんが就職するのは難しい）

（ちーちゃんが”女性”だから？）

（あんな物達が”女性”だからってだけでちーちゃんを下に見るなんて）

（ゆるせない……ゆるせないよ、そんなこと！）

（”女性”ってだけでちーちゃんが下に見られるなんてゆるせない……！）

(そんな世間なんて、それを当たり前と思ってる世界なんて)

「壊しちゃえ」

それから、どうすれば”女性”であるちーちゃんが上に見られるのか考えたの。そこで目に入っただのは「あの子」。

そこで思ったの。（「この子」力があればちーちゃんを元気にそしてちーちゃんを上にする事が出来る）って

だけど、ただ単に「この子」の事を発表してもあの物達は「この子」の事を碌に理解出来ないくせに、「この子」だけ”欲しがってちーちゃんの事なんて如何でもいい”って思うに決まってる。

だからもつと、世界が「この子」の事を理解できるような出来事がないと駄目。

そんな時、何所から知ったのかぼう何チャラとかいう組織が東に接触してきたの。

「貴様が開発、研究している機体、その情報を渡せ。さもなければ貴様の住む町や国を破滅させる」

これを聞いた時、笑っちゃったね。笑わせてくれたお礼にぼう何チャラの組織の情報を根こそぎ奪ってあげたの。もちろん跡なんか残さずこつそりとね。

東一人に情報を奪われるような組織が何が出来るって思ってたら、情報の中に日本が射程圏内に入っているミサイル基地の情報が有って、しかも発射コードまであったの。

それを見て、ピン、ときたね。（この情報を使えば「あの子」とちーちゃんを活躍させれる、うまくいけば世界を変えられる）ってね。

此処からはすぐさま「あの子」が戦える用に調整を始めて、それと一緒にいつでミサイルを発射できるように準備し始めたの。

考えた事はいたって簡単。「日本に向かって発射された2000発以上のミサイルを「あの子」ちーちゃんが撃墜する」っていうとってもシンプルな作戦だね。

データを見れば「あの子」ちーちゃんの力があればただか2000発のミサイルを撃墜する事なんて簡単だって分かっているからね。

この時、「あの子」とちーちゃんの力だけを見ていた私は、その事が起こす結果と被害の事など気にも留めていなかった。

それが、始まりだったのかもしれない。

最終調整がもう少しで終わる、って時思いもしないアクシデントが起きた。

まだ、最終調整が終わってないのにミサイルが発射されてしまったのだ。

なぜ？とすぐに調べたらミサイルの発射は「この子」の調整が終わって少ししてから発射されるように時限式のタイマーをセットしておいたのに、ぼう何チャラがそのタイマーを弄ったみたい。ただ束様特性のプログラムのおかげで発射時間をほんの少し早く出来ただけだけ。

束様の計画の邪魔をしてくれたぼう何チャラにどうやって報復し

てやろうか考えてたら、ちーちゃんが息を切らして、研究所に来たの。そして

「束！すぐにこれの発進準備をしてくれ」

「な、ちーちゃん。この子はまだ最終調整が終わってないんだよ！」

「空を飛べて、ブレードが使えればそれでいい！」

「でも「束！」「っ」

「お前がこの機体を大事に思っているのは一緒に見てきた私にだって分かる」

「だが、今日本に向かってきているミサイルをどうにかするにはこの機体の力が必要なんだ」

「だから、頼む。この機体を出してくれ」

そう言ってちーちゃんは頭を深々と下げた。

「ちーちゃん」

「……分かった。そこまでちーちゃんが言うならこの子を出してあげる」

「束！ほんと「ただし！」「っ」

「5分待つて。調整を終わらすから」

「出来るのか？」

「私を誰だと思ってるのかな？世紀の大天才、篠ノ之束様だよ」

「ふふっ……そうだな。束は天才だったな」

「だったってどういう事、ちーちゃん!!」

そういつて最終調整を始め、それは直ぐに終わり

「…ふう。ちーちゃん、調整が終わったよ」

「そうか。……ならすぐに出るぞ！」

「うん。すぐに準備するね」

「……そういえば、この機体名前はあるのか？」

「どうしたの、急に」

「いや、これからする事はこの機体にとって初陣となる」

「それなのに名前が無いのはどうもな……」

「なら、もっと早くに聞いてくれればよかったのに」

「じゃあ、教えてあげる」

「その子の名前は」

「白騎士っていうんだよ」

その後は「白騎士」とちーちゃんが空を自在に飛びまわり、ミサイルを撃墜していったの。

その姿を見て束はとても感動したの。束が一から考え作り、育て上げた子がちーちゃんと一緒になって空を飛び回る姿は何よりも綺麗に感じられたから。

ミサイルを撃墜し終わってその成果に満足していたらちーちゃん達にむかって各国の軍隊が向かっているっていう情報を入手したの。

初めての实战に「白騎士」のエネルギーが半分になってからちーちゃんに「戻って」っていったのにちーちゃん、「まだエネルギーは半分残っている。このまま軍隊を追い払ってくる。」なんていつて勝手に飛んでいっちゃった。

圧倒的な力を使えるからっていつでも二人だけなんだから、無理をして欲しくなかったけども、たかが戦闘機と戦艦程度、エネルギーが半分でも十分に対応できるって思ってたのに、実際その通りになったのに「アイツ」のせいでそんな思いは滅茶苦茶にされた。

白騎士越しにモニターで見ているのにまるで目の前にいるような存在感

それが右腕をちーちゃんに向けたとき白騎士のモニターに衝撃が走ったの。生半可な攻撃じゃ揺れもしないはずなのにノイズが入るほどの衝撃が走ったの。

それを見た時、すぐにちーちゃんに其処から逃げるように言ったのにさっきの攻撃で通信機能に異常が発生してこっちからの通信が出来なくなってしまったの。

そしてこちらの声を通じないまま戦いが始まってしまった。

それは、見ているだけしか出来ない束にとって拷問に等しかった。

天才と自分で言っていたのにどんな原理で攻撃しているかも分かんず、どんな攻撃も防げると豪語した装甲はボロボロにされ、どんな金属も切断できるように作ったブレードは相手の張ったバリアに

「そっか、そっか大丈夫なんだね？」

「ああ、そのしん「バシイ！」っ、なにを……」

「これは心配させた分」

「ビシイ」「っ」

「これはあの子を傷つけた分」

「……ほんとに心配したんだよ」

「ちーちゃんが死んじゃうって本気で思ったんですよ」

「私”のせいでちーちゃんを殺しちゃうかもって思ったんだよ」

「……すまん、束」

「うつう、ぢーじゃーん」

「ごめん、ごめんな束」

二人は泣きながらお互いを強く強く抱きしめあつ。

だが二人は気づかない。

お互いが”何”に対して謝っているのか。

そのホンの小さな、小さな勘違い。

それは時間と少しづつ、少しづつ大きくなっていく。

そして気が付いた時、それはもはやどうにも出来ない物となってしまう。

今回の出来事は「白騎士事件」って言われるようになってISの有用性を世界中に見せ付ける事ができた。これでちーちゃんが見えない物達に見下される事はなくなるはずで、ちーちゃんも大変な目にあっただけ元気になってくれるかな？

ふふ、いい事をした後は気持ちいいね。だって”親友”のため

なら他の有象無象がどうなったて問題ないよね？むしろ泣いて喜ぶべきだよ。だってこの束様の”親友”のために役に立ってるんだから。

三

あはは

[illegible]

かくして、狭い狭い小さな世界で生きる愚者は

その思いにて世界を塗り変え

その世界で笑い続ける

ゆえに気が付かない

世界を塗り変えるということは

同じく塗り変えられるということ

愚者は気が付かない

冥府の王がゆっくりと這い寄る事を

愚者は笑い続ける

一人きりの世界の中で

閑話 それぞれの過去 篠ノ之 束（後書き）

これは酷い。

どもども作者のマーシーです。

さて今回のお話のメインである篠ノ之束さん。

この作品内では”親友”である千冬や一夏、篝のためなら世界を敵に回します。躊躇なく。

彼女の中では認識できる物が人でありそれ以外はすべて物扱いにしています。

狂ってると思いますが彼女にとってはそれが普通なのです。

こんな扱いの束さん。

実は……最初期の段階ではメインヒロインだったんです。

いや、本当に。

天才過ぎたゆえに孤独に過ごす彼女。

其処に現れた自分でも解読できない力を持つキノ。

最初はただ単に興味が沸いただけの対象だった。

だが会うたびに少しずつ変わる心。

そして気づく思い。

二人の仲はどうなるのか？

こんな感じにメインヒロインを張るはずだったのに何でこうなった。

閑話 それぞれの過去 織斑 一夏（前書き）

原作主人公の事を考えて見た。

そうしたらこうなった。

表面上は同じはずなのに、内面がかなり違う。

作者が書くと

どうしてこうなる

閑話 それぞれの過去 織斑 一夏

俺の名前は「織斑 一夏」っていうんだ。よろしくな！

世間からは「世界初の男性のIS適合者」とか「全世界の男性の希望」だの言われてるけど、俺としては、まあ正直どうでもいいかな、って思ってる。けど感謝もしてる。

だって、「俺^{ぼく}」を見てくれるから

僕の一番古い記憶は、大好きな姉さんと箒と束さんの四人で遊んでた時の記憶かな。あの時は楽しかった。箒をからかうと、あいつムキになって追いかけてきて其処に束さんが割り込んできて一緒にからかうと、箒のやつさらにムキになって追いかけてくるんだからまあそこら辺になると姉さんが苦笑しながら止めに入ってくるんだけどね。

こんな風に四人で楽しく遊んでいられたらどれだけ良かったか。

僕と姉さんには両親がいない。姉さんに聞いても「家族は私だけだ」って言って教えてくれなかった。幼かった頃の僕はその事に疑問を感じなかったわけではないが、姉さんが言うんならそうなんだ、って思ってた。って思ってた。

でも、やっぱり本能なのか両親がいない事が寂しいと思ってた。

でも姉さんが親代わりになつてくれてたから良かったんだけど、僕が小学校に入る少し前から姉さんが家に帰ってくるのが遅くなり始めた。どうしたの、って聞いて見ても部活だとか言つて詳しくは教えてくれなかった。

その頃、東さんはなんか自分で作つたとか言う研究所で引きこもりながら何かを作つてたみたい。
みたいって言うのは箒がそう言つてたから知つたんだ。

姉さんが帰ってくるのが遅くなつて来てから僕は、家に帰るのが嫌いになった。周りの皆は家に帰つても「おかえりなさい」って言つてくれるのに、僕は家に帰つても誰も「おかえりなさい」って言つてくれないし暗い家に一人でいるのは怖かつたんだ。

だから、僕は幼馴染の箒がいる家によく通つてたんだ。其処にいれば箒のおじさんが「おかえり、良く来たな」って言つてくれて迎えてくれるんだから。それにおじさんは両親がいない僕たち姉弟の面倒を良く見てくれて世話をしてくれた。両親を知らない僕はおじさんの事を、その、お父さんみたいに思つてたんだ。

一度箒がいる前でおじさんの事を「お父さん」って言つてしまつてすごく恥ずかしかった事がある。箒はその事で「お父さんは箒のお父さんなんだから！」って言つてくるし「はっはっは、お父さんか」箒はやらんぞ！」とか言つてきた？何でだろ？

でも、そんな日も長くは続かなかつた

「白騎士事件」、日本に向かつて2000発以上のミサイルが発射され、そのミサイルを「白騎士」と言われたISがたった一機で

殆どのミサイルを撃墜した事件が起きた。

IS、正式名称は<インフィニット・ストラトス>。これこそが束さんが研究所に引きこもながら作り上げ、今の世界を壊す切欠を作った機体の名前である。

このISを作りあげた束さんは、この事件とISのおかげで名前が世界中に知られることになりそれに伴い、政府の人が世界的に有名となった束さんの家族を守る、重要人物保護プログラムとか何とか言って筈とおじさん達を連れて行ってしまった。

僕はおじさん達と離れたくなかったけど、僕は何にも出来なかった。

大好きな姉さんも「白騎士事件」が起きた日に大怪我を負って帰ってきてから別人になったみたいに厳しくなった。

傷が治っていないのに動こうとしている姉さんを止めようとしたら「私の事は大丈夫だ。それよりも一夏、勉強は〜」なんて言っていて心配してるのに逆に起こられる事がよくあった。

この頃から、姉さんの事が少しづつ分からなくなっていった。皆と遊んでいた時に見た顔と今の顔、どっちが本当の僕の大好きな姉さんなんだろうって。

姉さんが帰って来ない日が多くなってから、僕の家事や料理の腕が上がった。家には僕しか居ないから当たり前前だけだね。それから、毎日一人でご飯の準備をしたり掃除をしたりしてた。

寂しかった。姉さんは帰ってこない、筈やおじさんも何所にいるか分からない。家に居ても暗くて静かで僕が世界で一人だけになったみたいで、家に居るのが怖かった。

姉さん、どうして帰ってこないの？僕わがままなんて言わないから、一緒に居てよ

そんな時に会ったのが僕の大親友の「五反田 弾」だった。

きっかけはなんだったか思い出せないけど、気が付いたら僕は弾と親友になっていたんだ。

弾と遊ぶようになってから弾の妹、「五反田 蘭」とも遊ぶようになったんだけど

僕は、彼女の事が分からなかった

別に名前を覚えれないとか、相性が悪いとかじゃなくて、体が、心が彼女の事を理解しようとしなかったんだ。それに気づいてから僕は”女性”の事がよく分からなくなってしまった。

だから、彼女の言う事やする事、僕に対しての行動に、僕は”嘘”をついた。

本当は何も分かってないのに、彼女の言った事に分かったような振りをして、知ったようなことを言って嘘をつき続けた。

こんな事はいけない事だっけ分かってるのに僕は嘘をやめられなかった。だって、だって

”嘘”をつくと僕を見てくれるから

姉さんや箒が僕の周りから居なくなっただけ、僕が嘘をつくと僕

の周りには人が集まった。嘘をつけば僕は一人じゃない。一人じゃないから寂しいのも大丈夫。だから僕は嘘をつく。

嘘をつき始めてから少しして僕たちのクラスに転校生がやってきた。名前は「凰 鈴音」て言っ て何でも親の都合で中国から引越してきたみたい。

彼女は典型的な今時の女性だった。ISが登場してから世間は女尊男卑の風潮が強くなっていた。ISは女性しか扱えないから、つて言う事が彼女達を助長させているみたいだったけど、僕はあんまり興味が無かった。ISが登場してきたから筈やおじさん、そして姉さんが僕の前から居なくなってしまったんだから。

そんな彼女と弾はよく喧嘩をした。「これが喧嘩するほど仲が
いいってやつかな」って言ったら二人して「そんなわけあるか」
って怒られた。

それからいろいろと喧嘩や言い争いもしたけど、彼女と友達になった。僕は相変わらず”嘘”を彼女についていたのに彼女は時折僕の言った事に対して顔を赤くして怒ってきたり、何も言わず俯いてしまったりしていて、その事を弾に聞いてもため息を返された。何でだろう？

この頃から、
” 僕 ”
” は ”
” 俺 ”
” になつた。

鈴から（彼女からそう言うように言われた）「一夏は”僕”っていうより”俺”って言うほうが似合ってるよ」って言われ僕はこのままがよかったけど、もし嫌だって言って鈴が僕の前から居なくなつた、ら……？

姉さんや箒のように僕の前から居なくなる……

い、いやだ……そんな……僕の前から居なくならないで……

も、もう一人であの暗い場所に居たくない……

一人はいやだ、一人は寂しい、一人は悲しい、一人は辛い、一人は……

「……か……ちか……一夏……!!」

「っ、何だよ鈴」

「何だよ鈴、じゃないわよ。急に黙るんだもん」

「……その、いや、だったかな」

「い、いや、そうじゃないよ」

「ただ今まで僕って言ってたから」

「驚いただけだ」

「そっか。じゃあどうするの?」

「鈴」がそう言うなら今日から自分の事は俺って言うよ

「ありがとな、鈴」

そういつて、自分に嘘をつく

「っ、も、もう一夏のバカ!!」

「ちょ、なんで殴るんだよ!」

「自分で考えろ、バカ」

そんな風に女性に対して嘘をつきながら過ごしていた頃、姉さんとは殆ど会話らしい会話をしなくなっていた。月に2、3回寝るためだけに帰ってきてるだけの姉さんとは何を話したらいいのか、俺は分からなかった。

そんな時、姉さんから一通の招待状が届いた。それはISを使った世界大会「モンド・グロッソ」の決勝戦の招待状だった。正直、俺は行く気は無かった。

姉さんがこの「モンド・グロッソ」第一回目の優勝者だっていう事ですら、弾に聞かれるまで知らなかったんだから。

そんな風に行くかどうか迷っているうちに決勝戦が近づいてきて結局行く事にした。姉さんと何を話せばいいか、どう接すればいいかは分からないけど姉さんが来て、って言っているんだから行かないとね。

自分に嘘をつき、たった一人の姉にも嘘をついた一夏

その結果が二人の仲を引き裂く結果になるとは思ってもせずに

決勝戦の会場に向かう途中、一人の女性に話しかけられた。

「その坊主、ちょっといいかい？」

「はい？なんですか？」

「いやね、今日の大会の決勝戦の会場は何所か知ってるかなって」

「決勝戦の会場ですか、俺も行く途中だからいっしょにどうですか」

「……いいのかい」

「ええ」

「そうかい、じゃあお姉さんと”一緒”に来てもらうかな」

「え、そつちじゃ……」「プス」え？」

「ふふ、悪いね」坊主」

「お姉さん、あんたを攫うように頼まれてるんだよ」

「これもお仕事だから怨まないでくれよ」

その後のことはあまり覚えてない。

後から俺を助けてくれた姉さんから、俺は誘拐されたって聞いたけど誰がどんな目的で誘拐したのかは教えてもらえなかった。

ただ、暗く、狭い部屋で刀を持った女性が俺を殺そうとしてきた事だけは覚えてる。

真っ赤に染まった刀を持ちながらゆっくりとこちらに歩いてくる女性。

その時の俺は暗く狭い部屋に一人で居た事で子供のときの暗い家を思い出して錯乱していたと思う。

だから、見間違えだよな。

真っ赤な刀に返り血を浴びた女性の顔が

千冬姉さんの顔だったなんて

顔が見えた後の記憶は無いけどただ、俺は刀を持った女性に殺され
れると思った。

だから俺は言ったんだ。

「死にたくない」って

それから、姉さんは他の国に長期間滞在するといって出てってしまっ
た

だから、俺の中で姉さんの事が完全に分からなくなってしまった

俺が何か姉さんに対していけないことでもしてしまったのかな

だから姉さんは俺の前から居なくなってしまったのかな

分からない、姉さんの事が、女性の事が

誰か、助けてよ

俺^{ほく}を助けてよ

道化は嘘をつく

皆が自分の前から居なくならないように

寂しいのはいやだと

一人ぼっちは怖いと

自分の心の中で叫びながら

だがそれを皆に言う事はなく

ただただ嘘をつく

それが自分の心に嘘を付く事だとしても

閑話 それぞれの過去 織斑 一夏（後書き）

だから どうして こうなる

ども、寝不足の作者マーシーです。

さて今回のお話で初登場した原作主人公、織斑一夏くん。

原作では熱血漢で人の心の機微に鋭く思いやりが出来るいい子なのに、恋愛関係はまるで駄目という典型的なハーレム主人公で、行動理念も「自分の力で人を守りたい」というかつこいい思いをもっています。

が、この作者が書く作品内の一夏くんは女性に言うセリフのほとんどは同じなのですがその中身は「誰かを守りたい」ではなく「自分の前から居なくならない様に」するために言ってます。

つまり、熱血な行動やくさいセリフも全ては自分の前から居なくならないためにしているのです。

幼い頃、誰も居な暗く静かな家に一人ぼっちで生活していた事がトラウマになってしまったようです。

ヒロインに対しその氣が有るようなセリフを言うのは好きだからとかではなく自分が拒否的な発言をして自分から離れていくのをやめさせるためにいっているだけで恋愛感情はありません。

作者が書くと皆歪んで行くのは何でだろう？

次回はいよいよ原作突入！

でも、考えがまとまらないいいいいいいいい

ちなみにヒロイン（と書いて駒と読む）はシャルロットさんに決定

しました。

理由？書きやすいからだよおおおおおお

まあ、登場してもきつといろいろと歪んでるだろうけど。

入学前夜と専用機（前書き）

入学時期は一夏とセシリアが決闘し終わって、鈴が入学して来る前です。

今回から原作介入するのですが作者がいろいろやったせいでいろんな意味で原作がめい　おーされました。

あと有名な人がちよこつと登場します。

その有名な人が作った専用機が出てきます。

で、その特殊装備が自重しておりません。

それでもいい人は魔法の言葉を詠唱しながらお読みください。

これも次元連結システムのちよつとしたおうy（yz

入学前夜と専用機

「GZ」による報復行動が終わって、数日後。

今俺はIS学園に入学するための最終チェックをしている。

最終チェックといっても持つていくものはすでに準備が出来ているし、足りない物があっても直ぐに用意は出来るのでまあ、一応とあったところだ。

さて、IS学園に入学するにあたって「GZ」が用意した物がある。

俺専用のIS、つまり専用機というやつだ。何所のどいつだ、専用機なんて作ったのは……まあ「世界電脳」しかないか。

「GZ」のやつ、専用機の製造の情報は破棄したのにまた作りやがった。何かする時は俺に許可取れって言ったのに、この専用機は「世界電脳」が作った物で自分は関与してないとかほざきやがった。「世界電脳」はお前が管理運営してるんだろ、関与してないとかおかしいだろ？

と言ったら、フリーズしやがった。どう見ても嘘だろ。でもこうなったらウンともスンとも言わないんだよこいつ。

俺がIS嫌ってるのを知ってるのに何で専用機なんて持つてきたんだ言ってみたら、この専用機、厳密にはISではなく、ISの全基本システムを解読、流用して使用できるようにした別物らしい。ただシステム上はISと表記して世間の目を誤魔化しているらしい。

……あれ？

じゃあ、「世界電脳」の技術者達、ISコア自力で解読したのか？

……いやいやいや。ちょっと待て。ISコアは今現在、束と「GZ」しか理解は出来てないはずだぞ。いくら「世界電脳」の技術力が高いって言ってもあくまで他の企業に比べたらって意味で束やまして「GZ」には届かないはずだぞ。

これはどういう事だと、確認したら技術者の中に「木原 マサキ」の名前があった

……え？

冥王が実在しているだと？あわてて「GZ」に確認したらこの木原マサキ、技術者としては原作と同じかそれ以上らしいが性格はマサキではなく「秋津 マサト」と同じようで危険性は「GZ」いく無い様だ。

これは、本気であせった。原作以上の技術者でもさすがに次元連結システムは作れないだろう。きつと、たぶん。

……一応「GZ」に監視させとこう。

原作以上の技術者であるマサトが作った専用機は、今世界中の企業や国が開発に手間取っている、第三世代の性能を大きく引き離していた。基本スペックの時点ですでに第三世代の数倍は上なのである。

さらに第三世代の特徴であるイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器を応用、発展させた特殊装備、名前を「八卦球システム」を装備している。

「八卦球システム」、専用機を中心に「七つ」の球体が浮遊しておりその一つ一つに、原作OVA版に出てきた「八卦ロボ」のそれぞれの機体を持つ武装情報が組み込まれており、それを専用機の中心部と両肩にあるアタッチメントに装着する事でその武装が展開され、使用できるようになり、さらに組み合わせる事で、様々な状況に応じた戦い方が出来る、というシステムらしい。さらに装着されていない時はオートで専用機の周りを浮遊し相手の攻撃に対して特殊な空間制御システム、ようはバリアを展開させ防御したり、全球体に装備されているビーム兵器で自動迎撃をするように出来ている。

八卦なのに球体が「七つ」なのは「風」「水」「火」「月」「山」「地」「雷」の七つの兵装は完成しているのだが、最後の「天」はマサトの頭脳をもつても開発が難航しておりまだ完成してないのでとりあえず他の七つだけ実装したらしい。

八卦球って、やっぱりこいつ冥王じゃないんだろ？ クローン

とか作ってそうで怖いんだが。

さらにこの専用機、「八卦球システム」を使用するに当たってそれを制御する超高性能AI、名前を「MIKU」が搭載されている。氷室の方が、それともネギの方かと思っただつちも違った。普通に制御するためのAIで、簡単な対応は出来るが「GZ」ほど柔軟では無い。というか「GZ」と同じレベルで自重しないとかやめてほしい。

そういうことで、俺はIS学園に入学する時の立場は「世界で二番目のIS適合者」と同時に「世界電脳」所属の専属IS乗り」という立場になった。

さらに洗脳した日本政府の連中に政府が保護すると、公式の場で発表させた。

つまりは下手に俺に手を出すと「GZ」と「世界電脳」、さらに洗脳した日本政府を敵に回すという事だ。

さらにこれだけの後ろ盾が有る上に、今の俺の見た目は学生というよりSPとか裏家業の人物といった方がしつくりと来るぐらい恐いのである。特に目つきがおかしい位にキツイ。子供は見ただけで泣くレベルで街中を歩くだけで人が避けていく。こんな見た目の奴に早々喧嘩を吹っかけるような馬鹿はさすがにいないだろう。さて、考えている内にチェックも終わったし今日は早く寝よう。

IS学園が一種の治外法権の場所だからといって、世界規模で活動する大企業の専属IS乗りで、日本政府が公式の場で保護すると宣言しているのにも関わらず 俺が”男性”というだけで喧嘩を売ってくる大馬鹿物がいるとはこの時思いもしてなかった。

「あの、織斑先生」

「なんですか、山田先生」

「その、明日入学してくる二人目の男性適合者の事なんですけど……この資料、本当なんですか？」

「ああ、その資料に載っている事に間違いは無い」

「……では、あの「世界電脳」の専属IS乗りって言うのは」

「……それも、本当の事だ」

「ど、どうしよう、私「世界電脳」の人材派遣でこの学園に来てるのにもし、なにか粗相をしてしまったら」

「そういえば、山田先生は「世界電脳」の人材派遣の組織に所属していたな」

「まあ、専属といってもよほどの事が無い限り大丈夫でしょう」

「……なら、なんで目線をそらすんですか？」

「……急用を思い出しましたので、失礼します」

「ちょ、織斑先生……」

キノが入学する前の日のとある会話その2

「会長、これを」

「ありがとう、虚」

「……これ、だけなの、彼の情報は」

「……はい。本家の方の力をもってしてもそれが限界でした」

「しかも、情報収集に行った者達全員が帰ってきていません」

「それは、本当なの」

「はい」

「……そう。では彼の情報収集はもういいわ」

「代わりに帰ってきてない人達の捜査に全力で当たって」

「会長、それは」

「分かってる。でもそれを指示したのは私なの」

「だから、せめてその人達がどうなったか知っておかなければいけないの」

「だから、お願い、虚」

「……分かりました。可能な限りやってみます」

「おねがいね」

「では、失礼します」

「……ふう」

「キツイわね。自分が指示したからとはいえ、いったい貴方には、どんな秘密があるっていうの」

「……鈴木 キノ」

始まりの鐘は鳴った

冥府の王は動き出す

世界を破壊するために

誰もとめる事はできず

ただ王の裁きを受けるのみ

入学前夜と専用機（後書き）

原作突入……と思った人

これはめい おーの罫だ！！！

おふざけはここまでにしても、作者のマーシーです。

原作突入できると思っ たんですけどね

書いてる内に前日の事になってしまいました。

さてやっと出てきたキノの専用機。

前々から考えていたのですが、八卦口ボって全部に黄色い球体が付いてるじゃないですか？

アレを使った何か出来ないかなって思ってたのが今回の専用機に利用されました。

イメージとしてはハウドラゴンのボディに肩の部分にも球体を付けれる部分を追加した感じですかね。

烈では無く天の方でいいんじゃないかという意見もいただきましたが、それじゃあ直ぐにばれてしまうので。

次回は戦闘までこぎつけれるか、な？

身の程知らずの子供（前書き）

何とか戦闘描写までいけ……いきたくないな

この作品内では歪んでない人の方が酷い目に会う事があります。

なぜだ！！

身の程知らずの子供

入学当日

今、IS学園に向けて「世界電腦」が用意した車で移動してます。この車、一見するとただのリムジンに見えるのだが、「世界電腦」の技術者が遊び半分と実験半分で作った車で、金属部分には特殊な精製方法で作られた金属で全て作られており、この金属俺の専用機にも使用されているので、第三世代のISに搭載されている兵器でも集中砲火でもされない限り傷が付かないくらい硬い。

さらにISのシステムまで流用されてるので短期間なら空を飛べるのである。飛行機能をつけるならもつと他の物に付けろ、と言いたいとこだが開発者いわく「空飛ぶ車は子供の頃からの夢」とか言ってる聞かないんだよね。まあその気持ちは分からないでもないけど。

「キノ様。そろそろIS学園に到着します」

「そうですか」

「到着後はIS学園に派遣されている組織の者が案内しますので」

「分かりました」

そんなやり取りがあった数分後、IS学園に到着した。

IS学園

アラスカ条約に基づいて日本に設立された、IS操縦者育成用の

特殊国立高等学校。操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地内はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があり、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。が、この学園を建築、設備運営、物資搬送、人材等はほぼ全てが「世界電脳」が仕切っているので一切の干渉が無いというのは間違いで、正確には「世界電脳」以外の企業、国の干渉が一切無いというのが現状である。

どの国にも「世界電脳」の恩恵を受けているのが現状であり特に先進国や技術大国と言っている国ほど余計に干渉ができない。なぜなら大国になるほど重要施設やISとは関係の無い大企業の殆どが「世界電脳」製の商品を使用しているので、もし下手に干渉して「世界電脳」に損傷を出してもして、その国に輸出している製品の殆どを輸出禁止にされでもしたら国に大損害が出てしまう。

ゆえに、手を出したくても出せない状況がずっと続いているのである。

「IS学園に到着しました」

「送迎、ありがとうございます」

「いえ、仕事ですから。それに貴方はわが社の専属IS乗りなのでですからこれぐらいは」

「そうですか」

「では、この後は学園にいる企業関係者が待っているはずなので」

「わかりました」

「では、お気よつけて」

送迎してくれた運転手さんに一言お礼を言って車から降りる。

そしてさらされる、視線、視線、視線。

まあ、ほぼ女性しかないこの学園に、以前適正試験で使った上
下黒のスーツに赤ネクタイ、ついでに目線隠し用のサングラスをつ
けて、着替え等の入った真つ黒のトランクケースを持った190c
m近い身長の方が校門前に立っていたらまあ目立つわな。

そこ、通報しようとするな。というか迎えの人物はまだこないの
か。真面目に通報されそうなんだが。

「……あの！」

「…はい？」

「ぴゅい!!」

声をかけられ声が出た方に目線を向けたら、なんか子供っぽい人
がいた。そして涙目になって驚かれた。

「ちょっと、あれ山田先生まずいんじゃない」

「涙でてるよね、あれ」

「これ、通報した方がいいんじゃない…」

……これはまずい。このままでは通報した人が「GZ」に社会的に殺されてしまう。

「…貴方が、企業関係の？」

「は、はい。わ、私「世界電脳」内、人権派遣組織、『AS E』所属の山田 真耶と言います」

「そう、ですか。自分の名前は鈴木 キノ、といいます」

「は、はい。先日送られてきた資料で確認していますので名前の方はだ、大丈夫です。」

「……なら、なぜ驚いたんですか？」

「そ、それは……（写真で見た顔つきと実物の顔つきが此処まで違うなんておもってもなかったんですおおおお）」

「……声、出てますよ」

「ぴゅいーいー！」

「……………弄るのが楽しいな、この人。」

「まあ、そういうのは慣れてますから」

「す、すみません。すみません。すみません。」

そついつて、頭を下げ続ける山田先生

「山田先生をあんなに謝らせてるなんて……」
「ちよつと、本気でまずいんじゃない、あれ」
「誰か、警備の人呼んできて!!」

さすがにこれ以上はまずいか

「…山田先生」

「すみません。すみません。すみません。」

「……ふう。山田先生!!」

「はiiiiiii!!」

「時間も無いので、案内お願いできますか？」

「は、はい!では、つ、付いて来て下さい」

そういつて駆け足で走っていく山田先生

「山田先生そのまま逃げてー超逃げてー」

「あの人追いかけてるよ」

「今警備の人呼んだから」

……俺も駆け足で追いかけよう

「おりむゝ、おはよゝ」

「一夏、おはよう」

「一夏さん、おはようございます」

「ああ、おはよう、本音に篤、セシリアも」

朝の挨拶を済ます四人

「そういえばおりむゝ知ってる？このクラスに転校生が来るって」

「この時期にか？篤にセシリア知ってるか？」

「いや、私は聞いてないが」

「私も聞いておりませんわ」

そういつて話を切り出す布仏 本音

「生徒会のおねいちゃんから聞いたんだけどおりむゝに続く二人目の男性らしいよ」

「二人目って言うと、ああ、この前テレビや新聞でやってた」

「そうそう。でちょっと前にクラスの後ろに大きな机と椅子が入ったでしょ」

「そういえば、整備の人達がなにやら運び込んでいましたわね」

「む、あの一番後ろに有るアレの事か」

そういつて四人して教室の一番後ろにある机を見る

「かなりでかいな」

「大きいな」

「大きいですわね」

「おっきいね」

四人が見た机は他の机に比べると一回り近く大きかった

「アレだけ大きいって事は、二人目さんは巨人さんだね」

「いや、巨人はないだろ」

「でも、あの大きさならそれなりの身長ということですね」

「うむ。一夏よりかは大きそうだな」

そういつて談笑をしていると

「大変、大変だよー!!」

「どうしたのにつき。そんなおおごえだして」

「このIS学園に不審者が入り込んだんだって!!」

「何だって!!」

「なんでも山田先生が襲われたらしいよ」

「山田先生が襲われたですって」

「そう。しかも逃げた先生を追いかけて行ったらしいよ!!」

「な、けしからん。逃げる女性を追いつけ回すなど」

「そうですわ! いったい警備の人間は何をしていたんですか!」

そういつて騒いでいると

「み、皆さん。席についてください。HR始めますよ」

そう言いながら普通に入ってくる山田先生

「つて、山田先生！！大丈夫なんですか！！」

「ど、どうしたんですか、織斑君！？」

「どうしたんですか？じゃ無いですよ。山田先生、不審者に襲われたんでしょ！！」

「ふ、不審者に襲われた！？私なのですが？」

「そうです。朝、校門前で」

「校門前でつて……いやあれは」

「席に着かんか、ばか者共！！」

ドアを開けて入ってきたのは1年1組の担任である織斑 千冬その人である

「もうHRの時間は過ぎているんだぞ。何を騒いでいる」

「織斑先生、山田先生が不審者に襲われたつて……」

「不審者？……ああ彼の事か」

「つて織斑先生知ってるんですか！？」

「その事も含めて説明する。だからとつと席に着かんか！！」

そういつて生徒を一喝し、それにつられ席に着く生徒達

「あー、時間が過ぎてしまったがHRを始める。だが、その前に転入生を紹介する。知つての通り先日発見された二人目の”男性”適合者だ」

その言葉にざわめくクラス一同

「二人目の男性適合者!!」

「このクラスでよかった」

「ホントホント」

「静かにせんか!!」

一喝で静かになるクラス一同

「コホン、では入ってきてもらうが、お前達に一つ言っておく事がある」

「？」

「その、なんだ。彼の事を見た目で判断しないように」

言いにくそうに少し顔を背けながらしゃべる織斑先生

「嘘！織斑先生が言いよどんでる！！」

「あの織斑先生が！！」

「天上天我唯我独尊を地で行く先生が!!」

「……お前達が私の事をどう思っているかよ……くわかった」

いい笑顔でにこやかに笑う先生。目は笑ってはいないが

「ア、アハハハ」

「その、なんていうか、そのねえ……」

「……すみませんでした！」「……」

少しもずれずに謝るクラス一同

「……ふう。まあいい。では、入って来い」

そして、ドアが開き入ってくる転入生

「ひい！」

「なあ！」

「そんな！」

そして入ってきたのは

ドアを越す身長

ガッチリとした体格

キツチリと整えられた髪

そして

暗く澱み濁りきつた眼

まるで世界全てを憎み怨み呪う様な目つきをしたIS学園の”男子服”を着た男性が入ってきた

「…あー、鈴木、自己紹介を」

「……はい」

返事をしてクラス内に顔を向けるが

「………」

「………」

「………」

誰一人としてこちらを見ない

「………して、大丈夫ですかこれ」

「貴様ら、鈴木の顔は見なくてもいいから前は向け」

「お、織斑先生。それはちょっとどうかと」

「………まあ、慣れてますから、いいんですが」

結局、クラス全員が前は向いてはいるが全員視線が泳いでいる状態
で自己紹介が始まった

「…鈴木、キノといます」

「「「「「」」」」」」

「…………ふう。まあ、よろしく、お願いします」

「「「「「」」」」」」

「す、鈴木君、他には……」

「…………この状態で言っても、意味は無いかと」

「…………すみません」

「…………いえいえ」

そう言って、会話が終わると葬式会場の如く沈んだ雰囲気になった教室

「…では、席に着け。席は一番後ろのあの席だ」

「…はい」

カッ、カッと足音が響く教室内

普通なら響く事など無いのに今の教室内ではとてもよく響いた

その後、授業中一切の私語は無く有るのは山田先生の声と、指摘された時のみ生徒が喋る、と言ったところの進学校でも無いような静か過ぎる授業があった。

時間は進み、お昼休みになったものの、誰一人として席から動こうとしない。いや動こうとしないのではない、皆恐怖で動けないのだ。

「…………ふう。」

ため息を一つつき立ち上がり教室から出て行くキノ

「……………いった？」

「……………いったばい？」

「……………いったみたい」

「……………はあ……………」

暮らす全員が同時にため息をつく

「恐かった、ほんと怖かったよう」

「アレは絶対何人が殺してる目つきだよね」

「何であんな目つきの人が二人目なの……………」

皆言いたい放題である

「皆言いきすぎじゃないか？」

「そう言うー夏さんだって何か言いたそうでしたわよ」

「俺は、ただ一緒に飯でも食べないかって誘おうと……………」

「……………本気で言ってるのそれ……………」

その一言に反応するクラス一同

「止めときなよ、織斑君」

「そうだよ、きつと断られるって」

「と言うか、彼が誰かと食事してる所が想像出来ない」

本人が居ないからと言って散々な言い様である

「いや、皆それは酷いだろ」

「いいえ、一夏さん私には分かりますわ」

「セシリア？」

「私は立場上、両親の遺産を守るためにさまざまな人達と会ってきましたけど、その中には下種な考えや思いを持って接してきた人達もいましたわ」

「そういう人達は、体外目に輝きが無く濁っていましたが、あの人の目はそんな人達の目が輝いて見えるほどに濁りきっていました」

「絶対に、あの人は犯罪者ですわ！しかも極悪非道な！！」

「いや、犯罪者なら此処に来れないだろ」

「……………そうだとしても、絶対にいい人ではないですわ」

本人が居ないことをいいことに言いまくるセシリア、が

「……極悪非道で、犯罪者、ねえ」

「……………え？」

聞こえてきた声に固まる、セシリア

「……………忘れ物を取りに戻って見たら、酷い言われようだな」

クラスから消え去る音

「……………くくっ、ただ目つきが悪いただそれだけで、犯罪者扱いとは」

ゆっくりとセシリアに歩み寄るキノ

「まあ、俺もこの目つきのおかげでいろいろ言われてきたが」

セシリアの目の前で止まり、上から見下ろすようにセシリアの目を見るキノ

「初対面で、犯罪者扱いされたのは初めてだ」

「ヒィ」

「……………言いたい事が、有るなら直接言えよ、な？」

がくがくと全身を震えさせ怯えるセシリア

「……………まあ、気をつけな。何所で”誰が”聞ってるか分からないから、な」

そういつて引き返し、出て行こうとした時

「……………です」

「…？」

「鈴木 キノ！！貴方に決闘を申し込みます！！」

「
「
「
「
「

「
「
「
「
「
な、
なんだっ
てええええ
ええええ
——」
」

一人の歪んだ思いに塗りつぶされた世界で

歪んだ思想に育った子供

ゆえに気が付く事ができない

子供である自分が仕出かした事が

どのような結果をもたらすかを

身の程知らずの子供（後書き）

セシリアーーーーー！！！！！！

無茶しやがって

ども、作者のマーシーです。

今回から本格的に原作に入っていくのですが、セシリアエ……………

この作品内では大体のキャラが歪んでいます。（内面的に）

そんな中、貴重な歪んでないキャラのセシリアですが、なぜかキノと決闘することに。

どうしよう？ボコボコにされる場面しか浮かばない。

歪んでないキャラの方が（身体的に）酷い目にあうのはなぜだろう？

した

セシリアに

” 原作ログアウト ”

の

フラグ

が立ちま

気が付いた時にはもう遅い（前書き）

前回、セシリアに原作ログアウトのフラグが、と書いたところ

かなりの反響を受けました

セシリア、そんなに嫌われてるのかな？

- でも、実際にログアウトされると・・・（作者WIKI確認中）・・・

別に問題ない？

気が付いた時にはもう遅い

セシリアの”決闘”騒ぎが過ぎて放課後。

あの後には酷かった。クラス一丸となってセシリアを止めようとしたのだが

「彼に対して言いすぎた事は、謝ります。ですがそれとこれは別の事です!!」

って言って聞かなかったんだよね。しかも勝手にアリーナの使用許可取ってくるし。

こっちは承諾してないから勝手にしろ、って言うんだよ。めんどくさい。

さて、放課後になったから、さっさとこの場から離れて静かな所にでも「あの、キノさん!」ん?

「よかった。まだクラスに居たんですね」

「…山田先生? なにか」

「えつとですね、とりあえずこれをどうぞ」

と、言って渡された物は

「カギ? …… ああ、寮の」

「いえ、一軒家のカギです」

……？

「一軒家の、カギ？……寮のカギではなく？」

「はい。そうですけど……聞いてません？」

「……聞いてませんが」

「さつき「世界電腦」の建築部門の責任者から連絡があつて「キノ様のご自宅、完成しました。」という言葉と一緒に渡されたんですが、キノさん、知らないんですか？」

「あいにく、何も」

「そう、ですか……とりあえず行ってみましょうか？場所も教えてもらいましたし」

「そう、ですね。行ってみましょうか」

「では付いて来て下さい」

「はい」

そう言つて歩き出す山田先生の後ろを付いていくのだが

「一軒家つて、どういうこと！？」

「しかも「世界電腦」が作ったつて言つてたけど」

「もしかして、彼つてかなりVIP？」

「……でも、同じ寮じゃなくてよかった」

「それはわかる」「」

……気にしない

「此処です」

「……これ、ですか」

そこは、寮から少し離れた場所にある森の一番奥にあった。

見た目は純和風の一軒家だったのだが

「……大きすぎ、じゃないですか」

「そ、そうですね」

そう、一人で暮らすには明らかに大きすぎるのである。

少なく見積もっても8大家族が一人一部屋は使えるぐらいはある。

「……でかいよ、どう見ても」

「は、ははは」

「まあ、寮で暮らすよりマシ、でしょう」

「えっと、なんで……」

「……この見た目で、寮を歩き回れると、思いますか？」

「……すみません」

「……いえいえ」

そうやって、どこかで聞いたような事を繰り返す二人。

「で、では私はまだ、お仕事がありますのでこのあたりで」

「……見送り、ありがとう、ございます」

「いえ、これも先生の仕事ですから」

「…一つ、いや二つほど、聞きたい事が」

「はい、何でしょう」

「……なんで、生徒の俺がさん、付けなんですか？」

「あゝ、それはですね、私IS学園の教師ですけど所属は「世界電脳」なんですよ。つまり教師として派遣されている立場なんですね」

「……」

「で、キノさんは、「世界電脳」に一人だけの専属IS乗りで、私は変えの効く派遣ですから、そこら辺の事情で生徒ですけどさん付けなんです」

「…そう、ですか」

「そうなんです。あ、でも私は先生ですから怒る時は怒りますからね」

「フフ、恐くは、なさそうですけどね」

「む、私だって怒るときは怒るんですからね！」

そう言いながらむくれる山田先生。

それを苦笑しながら、見つめるキノ。

「コホン。この話はここまでにして後の一つは何ですか？」

「……山田、先生」

「はい、何でしょうか」

真剣な目つきになったキノにつられ真剣な態度をとる山田先生。

「……なんで」

「なんで？」

「……………目線が、ずれているんですか？」

「え」

「……」

「……」

「……………」

「？」

「ごめんなさ……いいいい」

謝りながら駆け出し、離れていく山田先生。

「……やっぱりがまん、してたのか」

ため息をつきながら家に入っていくキノ。

だが、キノが居る家の方向から泣きながら駆け抜けていく山田先生を見られ、変な噂が立つのを彼はまだ知らない。

ちなみにこの一軒家、「世界電脳」の建築部門、技術開発部門等のさまざまな部門の人達が自重を投げ捨てて作った力作で、一定の範囲には膨大な量の罠が仕掛けられており中には対IS用捕獲罠や迎撃用のセンチリーガンなどさまざまな物があり、それら一つ一つに各部門の専門知識を無駄に使い込んだ物となっているのでよほどの事が無い限り突破は不可能である。

しかも家にはアリーナに使われている遮断シールドを小型強化した物が5重に張られているので第2世代はもちろん第3世代の機体でも突破は不可能となっている。

次の日

授業開始10分前に教室に来たキノ

入った瞬間静まり返るクラス内

「……フウ」

「ヒイ」

ため息すら過剰に反応するクラスメイト達。

（めんどくさいな〜もう）

そんな事を思いながら始まる授業。

昨日と同じく静まり返ったクラスで進んでいく授業。

「……そういえば、オルコットさん」

「はい、何でしょうか？」

「えっと、昨日小耳に挟んだんですけど、キノさんに決闘を突きつけたとか、冗談ですよね？」

「いいえ、冗談ではありませんわ」

「……本当の事ですか」

「ええ」

「……」

「……？」

「キノさん、この話は本当ですか？」

「……いや、俺は、承諾してないので知りません」

「な！」

「ふう、そうすかな「貴方！逃げるのですか！！」っ」

「……逃げる、も何も受けてないんだが」

心底、めんどくさそうに答えるキノ。

「受けてないって、本気で言ってますの！」

「……俺は、一度も「受ける」とも「はい」とも、言った記憶は無いが」

「そういつて逃げる気ですか！」

「……」自由に」

そういつてもう興味は無いと顔を背けるキノ。

「一夏さんと同じ男性適合者だからもつと男らしい人かと思いましたが」

「……」

「一夏さんと違って男らしくないんですね」

「……」

「何か言ったらどうなんですか！！」

「……」

この時、セシリアは冷静ではなかった。

一夏との戦いで男性と言う物を見直し、さらに一夏に好意を抱いていたセシリアにとってキノという存在は許しがたかった。

世の中の男性全てが一夏のように、とは思わなかったが一夏と同じIS適合者、だから二人目の男性適合者も同じような人と思ってい

たのに、見た目は不審者その者であり、態度も悪く、更には山田先生を泣かすような事を立て続けに起こす、など許しがたい行動ばかりとっていたのである。

無論、これはセシリアの主観での話であり実際は、違っのながらもととプライドが高く女尊男卑の世界で育ち、一夏と出会い多少は丸くなったとはいえ深い所では男性を下に見ていたセシリア。

だから、周りの止める声に耳を貸さず、そしてキノに対して”I S”に関わっている者が言っではいけない言葉を言ってしまうのである。

「セシリア、それ以上はやめとけよ」

「そうだよ、せつしー」

「……ふん、これだけ言っても何も言い返さないなんて、碌な育て方をされてないんですわね」

「……おい、今、なんていった」

「聞こえなかったなら、もう一度言ってあげます」

「あなたは、”ろくでもない親に”育てられたんですねって」

「セシリア、いくらなんでもその言い方は「バン!!!!!!」!!!!!!」

クラス中に響く音、それはキノの机の上から聞こえた。

「……俺の事はどう言われたって、別にいい」

ゆつくりと立ち上がり

「だが、な、俺に愛情を注いで育ててくれた両親の事を」

セシリアを睨みながら近づき

「侮辱する事は、絶対に、ゆるさん！……！」

圧倒的なプレッシャーを放ち、言い放つキノ

「う、あ……」

「だから、受けてやる」

「え？……」

「決闘を、受けてやる、と言っているんだ」

「キノさん、本気ですか！？」

「両親を侮辱されて、静かにしていただけるほどやさしくは無いんですよ、俺は」

「そう、ですか……イギリス代表候補生、セシリア・オルコット
！……」

「は、はい！」

其処にいたのはいつもの、どこか子供っぽい雰囲気がある先生ではなく一人の”大人”としての姿を現している「山田 真耶」の姿

があつた

「貴方は、国を代表する候補生として有るまじき態度をとりすぎ
ています」

「え？」

「今回の出来事は、イギリスに通達すると同時に、「世界電脳」
の本部にも通達される事でしょう」

「ど、どういう事ですか？祖国への通達は未だしもなぜ其処に「
世界電脳」が出てくるんですか！..」

「オルコットさん、私が派遣としてこの学園に来ている事は知っ
ていますね？」

「ええ、初日に聞きましたわ」

「では、”どこ”からも覚えてますね？」

「それは「世界電脳」からと、でもそれが今関係ある「キノさん
は！..」のっ！」

いつもの姿からは、想像も出来ないほどの大声を上げる山田 真
耶。

「キノさん、言ってもいいですね」

「.....まあ、遅かれ早かれ、ばれる事ですから、どうぞ」

クラス所か学年中が震えるような声が上がる

「うつそ、鈴木くん専用機持ちだったの」

「「世界電腦」の唯一のIS乗りって」

「「世界電腦」って世界トップの超大企業じゃん」

「あれ、って事はセシリアさんって……」

「「「「「「世界電腦に喧嘩を売ったって事？」」「」「」「」」

クラスの皆が理解した時セシリアの頭の中は真っ白になっていた

「な、なん……」

「オルコットさん、自分がいったい何を仕出かしたか分かりましたか？」

「わ、わたしは……」

「今更、何を言ってももうどうにもなりません」

「アリーナの使用許可は明日の午前からですので、”いろいろ”と準備をした方がいいですよ」

につこりと誰をも魅了するような笑顔を浮かべて言い放つ真耶

もはや周りの声が聞こえていないセシリア

そしてその状況を見て薄く笑うキノ

誰もが思う

あの時こうしていれば、ああしていれば、と

だが、その思いは無意味であり

無価値である

身の程を知らぬ子供は

気が付いた時にはもう遅く

冥府の王の裁きを受けるのみ

気が付いた時にはもう遅い（後書き）

PV30万越え、だと

ども、PVの多さに怯える作者のマーシーです。

やっと専用機の名前が出てきたのに山田先生に先に名前を言われてしまったキノ。

と言うか山田先生がとってもカッコいい。

普段は子供っぽく生徒にからかわれているのに。

決めるここではシツカリと決める大人な山田先生。

メインキャラよりよっぽどメインっぽいつてどういふことだ。

第&一夏&千冬マジ空気。

戦闘描写に入れると思ってましたが結局は駄目でした。

でも次回は絶対に入ります。

でも作者の技量で読者様を満足させれるかわかりませんので温かい目でござんください。

セシリアの”原作ログアウト”の確率が上がりました

八卦龍（前書き）

戦闘開始、でもうまく書けるか自信が無い。

でも戦闘シーン以外で八卦龍を使う時なんて、有るのか？

感想に有ったコメントにボツコボコにしたセシリアを引き取って洗脳して、メイドさんに……

なんてのが有ったのですが。

そんな事したら作者の脳みそが沸騰してエロ小説になってしまう
気ががががが

でも、いいかも

八卦龍

決闘を受託してから次の日の朝。

あの後、セシリアは気絶してしまい保健室に連れて行かれた。今回の決闘騒ぎ、昼少し前に騒ぎがあったというのに放課後には全校に広まっていた。変な尾びれをつけて。

「不審者の正体は「世界電脳」の専属IS乗り」や「「世界電脳」のISは第4世代らしい」はいいのだが「登校初日に先生を襲って追い掛け回した」とか「「世界電脳」の力で女性を食い物にしている」だの「一軒家に女性を連れ込んで……キヤ」と、なんと言うか女性の嗜好きは此処までか！と思ってしまう。

さて、そんなこんなで学園に着いたのだが

「あの人が……」

「……だって」

「決闘するって……」

周りの視線と噂話が辛い。

「あ、キノさん。来ましたね」

「おはよう、ございます。山田先生」

「はい、おはようございます」

そういつて挨拶してきたのはいつもの服装と違ってスーツ姿の山

田先生だった。

「えっと、どうしかったです？」

「……いえ、似合ってるな、と」

「フフ、お世辞でも嬉しいですね」

微笑みながらそう言う山田先生はいつものような子供っぽさは無く仕事が出来た女性、といった雰囲気を出していた。

「今日は、どうしたんですか？」

「はい、今日の私はIS学園の教師ではなく、「世界電腦」所属の監視委員として来ています」

「…監視委員？」

「はい。簡単に言えばキノさんが使うIS「八卦龍」の使用データを監視、記録、報告する役目をもった人と言う事ですね」

「監視、記録、報告、ですか…」

「お堅い感じがしますけど、私からキノさんに何か意見する、と言う事はありませんのでキノさんは思い通りにISを使用してください」

「分かりました」

「あと、ですね」

「？何か」

「今回の決闘騒ぎの所為で午前中の授業はなくなりました」

「は？」

「原因は、キノさんが持っている「八卦龍」の所為なんです」

「……ああ、なるほど。「世界電腦」が作り上げた唯一のIS、それが機動する、となれば誰もが見たくなりますからね」

「そうなんです。そう言って観戦したい、と言う生徒数がほぼ全校生徒なので急遽学園側が、午前中の授業を無くし代わりに授業の一環と言う形で、アリーナを開放してしまっただけです」

「まあ、世界トップの大企業が製造したISとなればそういった事も、起こる？んですかね」

「……すみません、キノさん。本来ならこのような事にならない様にするのが教師としての役割なのに」

「……いえいえ、山田先生はよくやっていますよ、俺が見ている限りは」

「そう言っていたら、助かります」

そう言った後、姿勢を正しこちらを向く山田先生。

「では、「世界電腦」専属IS乗り鈴木 キノさん。アリーナへ

案内させていただきます」

「よろしく願います」

アリーナに向かう二人の姿は、IS学園の教師と生徒、では無く世界トップの大企業が誇る人材派遣組織「ACE」所属の仕事人と、同じく世界トップの大企業の専属IS乗りと言う肩書きを持つにふさわしい雰囲気を出していた。

アリーナ内選手控え室

其処にはセシリアを心配した一夏、箒それと担任の千冬がセシリアの様子を見に来たのだが其処で見たのはいつも、プライドが高く、上品な口調と物腰から大人びて見えていたセシリアの姿は無く、目の下に深い隈を作り、何かに怯え震えているセシリアの姿があった。

「セ、セシリア？大丈夫か」

「……や……なん……」

「おい、セシリア？聞こえてるか、セシリア！」

「……なんて……いやで……」

「セシリア……！」

「っ……い……ちかさ、ん」

「そうだ、俺だ一夏だ」

「一夏さ、ん、わ、私は……」

「何が有ったんだ、セシリア」

「そ、それは……」

「……大方、専用機の取り上げ、代表候補生からの除外通知が来たか」

「なぜ、その事を……！」

「織斑先生、それはどういう事ですか」

「オルコットが決闘を申し込んだ相手がそれだけ悪すぎた。と言う事だ」

「相手ってキノの事か？」

「違うわ、ばか者。「世界電脳」の事だ」

「「世界電腦」って確かにキノの専用機は「世界電腦」が作ったって言ってたけどそれが、どうして専用機の取り上げに繋がるんだよ」

「……それは、イギリスの約半数近くの企業、重要施設、輸入関係が「世界電腦」の力に頼っているからですわ」

「セシリア？大丈夫なのか？」

「ありがとうございます。一夏さん」

「それで、今言った事は……」

「今言った通り、今のイギリスは国の半数近くのさまざまな事柄に「世界電腦」の力に頼っています。そんな中でイギリスの代表候補生が、「世界電腦」のIS乗りに一方的に決闘を突きつけ、あまつさえ相手を侮辱したら？」

「……「世界電腦」とイギリスとの関係が悪化するな」

「ええ、そういう事でイギリス政府は今回の決闘のけじめとして私から専用機の取り上げ、代表候補生からの除外、謝罪と言う形で膨大な金額を払う事にしましたの。そしてその金額の殆どは、私の実家から払う事になっています」

「フフ、両親の遺産を守ろうとして必死に努力して、代表候補生に選ばれるくらいになりましたのに自分の所為で、両親の残してくれた物全てを失う事になるなんて、馬鹿な話ですわね」

「そんな事は「良いんです!!」!!」

「良いんですよ一夏さん。これは私がしてしまった事。だからその結果に対して責任を取らなければイギリス淑女として顔が立ちませんわ」

そう言う彼女の顔は控え室に入った時と違い、穏やかになっていた。

「最後に一夏さんとお話が出来てよかったですわ」

「さ、最後ってどう言う事だよ」

「……この決闘が終われば私はIS学園から離れます。実家の方で遺産整理をしなくてはいいけませんので」

「IS学園から出て行くって言うのか！」

「ええ。そう言う事ですわね」

「……でも、IS学園はあらゆる国家、組織の干渉を受ける事は無いはずじゃあ……」

「何事にも例外はあるのですよ、一夏さん。この学園の約8割以上の物事、全てに「世界電脳」の息が掛かっていますの。だから「世界電脳」だけは、この学園に対して強い、いえ絶対的な発言力がありますわ」

「だから、今回の決定はもう変えられませんの」

「そ、そんな……」

「一夏さん、そんな顔をしないでください。私は一夏さんの笑顔が好きなのでから」

「せ、セシリア……わかった。こ、こうかな」

「フフ、そんな顔では笑われてしまいますわよ」

「オルコット、時間だ」

「はい、織斑先生。……その、短い間でしたがありがとうございます」

「フン、最初から最後まで手間をかけさせおつて……行って来い」

「はい！」

控え室から、アリーナへ向かうセシリア。

「セシリア……！」

「はい？」

「さよなら、なんて言わない。だから”また”会おうぜ！」

「一夏さん……はい。”また”お会いしましょう」

この会話が「織斑 一夏」と「セシリア オルコット」の最後の会話だった。

「……始めようか」

「ISの世界を破壊する第一歩を」

「その、生贄になってもらうぞ」

「セシリア・オルコット」

アリーナ内はIS学園の生徒達の熱気で盛り上がっていた。

世界トップが総力を挙げて作った専用機、「八卦龍」と世界で二番目の”男性”適合者を一目見ようと、どの生徒達も今か今かと待ちわびていた。

「超大企業の「世界電脳」が作った専用機、どんな姿なんだろう」
「それも有るけど二人目ってどんな人なんだろう、私まだ見てないんだ」

「噂だとかかなり恐いらしいよ。どうしてもかは知らないけど」

そして、決闘の開始時間となり先にセシリアとブルー・ティアーズが入場してきた。

「…まだ、来てないようですね」

「いや、もう来ているぞ」

「！！いったい何所から」

「目の前だよ」

セシリアのホンの数メートル前から聞こえてきた声、だが姿形は無くISのハイパーセンサーにも反応は一切無かった。

「姿を現しなさい！」

「クク、そう慌てるな。今見せてやる」

そして、現れるキノの専用機。

「これが俺の専用機「八卦龍」だ」

「そ、れが、「世界電脳」の作ったIS……」

現れたのは、薄い銀色を基準に赤いラインの入った全身装甲、胸

部と両肩に同じ大きさの穴が付いたアタッチメント、そして球体の付いた頭部

（プライベート・チャネルでの通信？）

（クク、気分はどうか？元イギリス代表候補生さん）

（！何所でその情報を）

（「世界電脳」所属の俺が知らないわけないだろう）

（そう、ですわね。でも、今はその事は関係有りません）

（そうだな、もう専用機どころかISに乗る事もないお前には関係ないことだな）

（いったい何所まで、知っているんですか！）

（ククク、今は関係ない、のだろう）

（っ！！）

（では、始めようか、結末の決まっているこの決闘お決まりをな）

そして始まりの鐘がなる。

「出し惜しみなどしません！お行きなさいブルー・ティアーズ」

そして放たれる、2機のミサイル形のブルー・ティアーズ。

「……クク」

放たれた2機のミサイルは”回避所か防御もしない”「八卦龍」に直撃する。

「直撃した！？……何を考えているかは知りませんが、このまま行かせて貰います」

直撃し、煙の中にいる「八卦龍」に対し展開させた4機のブルー・ティアーズと専用ライフル、スターライトMKIIIで追撃をかける。

「回避も防御もしないってどういう事！？」

「何か不備でも有ったのかな……」

「まさかこのまま終わりって事は無いよね……」

観戦していた生徒達もキノの取った行動に不満を隠せずに居た。

「まさか、これで終わりなど……」

何も反応を起こさないキノに対し一旦攻撃を止め、距離を取るセシリア。

が、次の瞬間

<ブルー・ティアーズ1番機、大破>

「な！？」

煙の中から放たれた一条の光、それに当たった一機のブルー・テ

イアーズが一発で大破した。

「イギリスが作った第三世代形IS、ブルー・ティアーズ。どの程度かと思っただけこの程度か」

煙が消え現れたのは、”無傷”の「八卦龍」の姿だった。

「アレだけの攻撃を受けて無傷ですって！！で、ですがアレだけ攻撃を受ければシールドエネルギーは……」

「残念だが、シールドエネルギーは減ってなどいない」

「な、なぜ！攻撃を受ければシールドエネルギーは減るはず」

「何のための全身装甲だと思っている。貴様の攻撃では「八卦龍」の装甲に傷すら与えられん」

「そ、んな……」

ブルー・ティアーズの持つ全ての武装を使い、アレだけの攻撃を加えたにも関わらず、傷一つ付ける事ができ無い「八卦龍」の装甲。

この時点で、セシリアには勝つ方法はなくなってしまった。

「「八卦龍」のお披露目がこんなのでは、つまらんな」

「くっ！ですがまだ私は負けて……」

「いや、貴様の負け、だよ」

<ブルー・ティアーズ2番機、3番機、4番機、大破>

「ど、何所から攻撃を受けたというんです!」

「情けだ、教えてやる。「MIKU」、「八卦球」のステルスを解除しろ」

<了解>

キノが言った後、「八卦龍」の周囲に現れる七つの球体。

「これが、「八卦龍」の専用武装にて最大の特徴、「八卦球」だ。まあ一つはまだ未完成だな」

「「八卦球」……」

「こいつ、一つ一つが自動攻撃、自動防御、自動行動を可能としている。貴様の持つ欠陥品のBT兵器とは違うんだよ」

「「世界電腦」はBT兵器を完成させていたのですか!」

「BT兵器としての機能など「八卦球」にはおまけにすぎん!」

「BT兵器の機能がおまけ!」

「そうだ。では、「八卦球」のお披露目と行こうか。「MIKU」、「八卦球システム」発動!!」

<了解。八卦球システム、起動>

「八卦が一つ”風”を起動させる」

<八卦球、”風のランスター”、装着>

掛け声と共に周囲の球体の一つが「八卦龍」の胸部にあるアタツ
チメントに装着される

<武装、展開>

機械音と共に「八卦龍」の背中に一対の巨大なランスターが現れる

い

「さあ、”風”の動き、特と見るが

其処からは、”決闘”などという優しいものではなくただの”蹂
躪”だった。

巨大なランスターを自在に操り、第三世代であるブルー・ティア

ーズですら反応ができない速さで近距離は格闘、遠距離からはビームを使いさらに残りの「八卦球」は「八卦龍」の動きに合わせ自動で動き回りビームを放ち攻撃をする。

ホンの少しの時間でブルー・ティアーズの装甲は完全にボロボロになり、武装も全て破壊されもはやブルー・ティアーズとセシリアに抗う手段は無かった

「っ……はあ、はあ」

「ホンの少し遊んでやっただけでこれか。つまらん」

「くっ……!」

「……まあいい、この決闘おまつりも、もう終わらせる」

「「MIKU」、武装開放」

<了解、”風のランスター”、武装開放>

ブルー・ティアーズから大きく距離を離し、両手を広げ言い放つ。

「デッド・ロン・フウウーーン」

その声と共に胸部にはめ込まれた球体から”風”の文字が浮かび上がると同時に背中の巨大なスラスターから六つの竜巻が放たれる。

それは六方向からブルー・ティアーズに襲い掛かり、浮かんでいく事が限界のセシリアは回避も防御もすることは出来ず、直撃した。

「きゃああああー—————」

六つの竜巻は一つの巨大な竜巻となってブルー・ティアーズ諸共セシリアの身体、精神共に深い傷を残していく。

「フフフ、ハハハ」

「アーハッハッハッハッハ！！！」

アリーナ全体に響き渡るキノの嗤い声。

それはアリーナで観戦していた全ての人の心に突き刺さるような声だった。

かくして始まる破壊の歌

始めは風にて始まりを告げる

誰も彼も止める事は出来ず

ただ風の声を受けるのみ

八卦龍（後書き）

超難産でした。

寝不足がデフォになってきた作者のマーシーです。

セシリア終了のお知らせ。

八卦球の初めては風のランスターの武器になりました。

原作OVAも風がはじめだったしいいかなって。

次回はセシリアのその後と今回の事でもたらされる世界情勢を書ける、かな？

NGシーン1

風ではなく雷だったら

「くらえ、プロトンサンダー」

「きゃああああー……」

プロトンサンダー＝原子核破砕砲

つまりセシリア消滅

NGシーン2

火だったら

「受ける、マグラッシュ」

「きゃあああーーーーー」

マグラッシュ〓プラズマ光弾〓超高温

〓塵一つ残さず消滅

NGシーン3

山だったら

「シューー」

「きゃあああーーーーー」

大量のミサイル〓ボロボロの装甲&ほぼ無いエネルギー

〓ミンチより酷い事に

つまり風でオーバークルだったんじゃ無く、他のがオーバークル
過ぎて風になったんだよ!!

会話と接触にその後（前書き）

セシリアの扱いに困ってる作者のマーシーです。

洗脳改造されたメイドにするか、堕ちて裏街道まっしぐらにするか。

それとも思い出の中で生きてもらうか……

まあ、書いてる内にどうなるかは決まるかな？

会話と接触にその後

決闘から数日が過ぎた。

あの後セシリアは即IS学園内にある医療施設に搬送され、ブル
ー・ティアーズはISコア以外全てが大破し、ISコアも後一步で
破壊される所まできていた。

やり過ぎた、という気持ちが無いわけでは無いが実際あれでも威
力は落とした方なのである。

八卦龍の八卦球システムはフルチャージで使った場合八卦ロボに
届くぐらいの力は有る。フルチャージしたとは言えISサイズで八
卦ロボクラスの火力を実現する木原マサキの技術力には驚きである。

本当に、木原マサキじゃないだろうな……

まあ、それでもGZには全く届いてはいないが。

それは置いておき、あの決闘の後は大変だった。まず、アリーナ
から出ると織斑一夏と篠ノ之箒、それに織斑千冬が来ていた。

「キノー！アレはどう言う事だよー！」

「……アレ、とは？」

「惚けんなー！セシリアにした事だー！」

「ただ、攻撃して倒しただけ、何を怒っているんだ」

「な！！いくらなんでもアレはやり過ぎだろ、もつと他の方法は無かったのかよ！！」

「そうだ、いくらなんでもアレはやり過ぎではないか！！」

「……フウ。それだけか、言いたい事は」

「何だと！！」

「今回の事は、全てアイツから仕掛けてきた事。その結果が自滅だとしても自業自得、だろ」

「それに、ISなんて言う”人殺し”の兵器に乗っている以上、死ぬ覚悟ぐらい持つてるだろう？」

「ISが人殺しの兵器！？と言う事だよ」

「人にばっか聞かないで、自分で考える事だな」

「キノさん、今回の「八卦龍」の戦闘データの記録が取りたいので、「世界電脳」の施設に移動したいのですがよろしいでしょうか？」

「…分かりました。では、行きましょう」

「山田先生は、キノがした事どうとも思わないんですか」

「すみませんが、今の私はIS学園の教師ではなく、「世界電脳」所属の監視委員としてここに居ます。ですので、キノさんがした事

に対して意見を言う事はありません」

「そんな！」

「ですが、あえて言わせていただくなら今回の決闘で発生した結果は自業自得、としか言えません」

「山田先生までそんな事言うのかよ」

「…織斑 一夏さん。専用機を持つという事、そして代表候補生という立場は、貴方が思っているよりずっと重い事なのです。クラス代表を決める時のオルコットさんの発言、あの時点ですでにオルコットさんはイギリス政府から代表候補生としての能力を疑われていたんですよ」

「あの時から！？どうしてそうなるだよ」

「代表候補生とは名前に有る様に、国を代表するという事。いくら候補生としてもそれは変わりません。ゆえに候補生はその行動一つ一つに注意をしてなければいけないのです。自分の行動がすなわち自国が相手をどう思っているか、という事を表してしまうのですから」

「ですから、クラス代表を決める時のオルコットさんの発言はイギリス政府が日本を格下に見ている、と思われても仕方が無い発言でした。ですが、それだけの発言をしたのに代表候補生で居られたのは何故か？分かりますか、一夏さん」

「そ、それは……専用機を持っていたから？」

「それもあります」

「それも？」

「専用機というのは世界に467個しかないISCコアを使いただ一人のために装備を開発し、専用のスタッフを集め、運用するので。それにISCコアの特性上、直ぐに替えが効く、と言う物ではないので専用機乗りが馬鹿な事をしたからと言って直ぐに専用機を降ろされる、と言う事は無いのです」

「なら、なんでセシリアは……」

「それは、一夏さん。貴方が居たからです」

「俺が居たから？」

「山田先生、それ以上は……」

それ以上言わせない、と言う風に織斑先生が前に出ようとするも

「すみませんが、織斑先生。今の私はISC学園の人間ではなく、「世界電脳」の人間ですので織斑先生の言うことは聞けません」

そう、今の山田真耶はISC学園の教師では無く、「世界電脳」の人間としているのだ。ゆえに織斑先生のいう事に従う理由は無かった。

「山田先生、俺が居たからってどういう事なんだよ」

「それは貴方が、世界初の”男性”適合者だからです。イギリス

政府はオルコットさんの発言と行動に対し、代表候補生として相応しくない、と考えていたようですがあのクラス代表を決める時の試合の後の貴方との関係を知って多少の発言や行動には目を瞑ったのです」

「何で、セシリアが俺と仲良くなっただけでそうなるんだよ」

「……貴方の背後には世界最強の称号を持つ肉親と、今の世界を作り上げた世界最高の天才、その二人が居るからです。イギリス政府はオルコットさんと貴方の関係が良好である事を知って、オルコットさんを使い、貴方を通じて二人にコネを作ろうとしたんです。そのためにクラス代表戦の時の発言に対し、イギリス政府は極秘裏に日本政府に対しかなりの金額を渡しオルコットさんの発言を聞かなかった事にして貰ったのです」

「そ、んな」

「ですが、その様な行動も今回の一軒で無駄に終わってしまいました。貴方を通じ二人にコネを作ろうとした結果、自国を潰しかねない事になってしまったのですから」

「……じゃあ、セシリアが俺にいろいろしてくれたのは、俺じゃなくて、俺の後ろの二人と仲良くなるためだったのかよ」

「いえ、それは分かりません。オルコットさんの行動がイギリスからの指示なのか、それとも指示ではなく本心からの行動なのかは」

「……」

「これで、貴方がこの学園で、いえ今の世界でどれ程の価値を持

った存在なのか分かりましたか？本来ならこの様な事は言いたくはありませんでしたが、今回の一軒で自分の立場を知らない事が、どれ程危険なのか分かりましたね」

「…はい」

「……では、私達はこれからまだする事がありますので失礼します。いきましようか、キノさん」

「……ええ」

そう言って、出て行く二人。

「一夏、その……」

「……第」

「な、なんだ？」

「俺が専用機を買えたのも、クラスの皆が仲良くしてくれるのも俺じゃなくて、俺の後ろの二人を見てるからなのか？」

「そ、そんな事有る訳無いだろう。クラスの皆はそんな事は思っ
てなどいない！！」

「そ、うかな」

「そうだ！皆一夏の事を見ているんだ。決して後ろの二人を見て
いるわけじゃない！」

「そう、だよな」

「ああ」

「……ありがとうな、箒。元氣が出たぜ」

「う、うむ。元氣が出たならいい」

だがこの時、一夏の中に不信感が生まれていた。

（皆が俺に構ってくれているのは俺ではなく、俺の後ろに居る二人を見ているのではないか？）

その様な思いが生まれその思いは少しずつ大きくなっていく。それがどの様な結果を出すのかはまだ分からない。

アリーナから出て戦闘データを取るために専用施設に移動しているのだが織斑達との会話のせいですでに通路には他の生徒達が居たのだが、皆こちらに気づくとサツ、と道を空けて避けるのだ。

見た目が悪いのとあの決闘の事でさらに恐がられているみたいだ。まあ、これで今回のような事はもう起こらないだろう。と言うか起こす奴が居るなら見てみたい。

そうこうしているうちに設備の有る所に着き、「八卦龍」の戦闘

データを取る作業が始まった。ちなみに「八卦龍」の待機状態は八つの球体が付いたネックレスである。

「キノさん、今回の戦闘データを取るのに少し時間が掛かりますが如何されますか？」

「どのくらい、掛かりますか？」

「初めての实战データなのでじっくり取りたいようなので夕方近くまでは掛かるようですね」

「……なら、先に戻っていても構いませんか？」

「では、終り次第連絡しますね」

「お願いします」

「八卦龍」を先生に預け、教室に、と思ったのだが放送が流れてきて「1年1組鈴木キノさん、生徒会室にお越しください。繰り返しします」と生徒会から呼び出しを食らった。

さて、如何しよう。確か生徒会長は「GZ」からの報告で注意人物に入っていたはず。呼び出しの理由は今回の決闘の事で、このタイミングなのは「八卦龍」は戦闘データの記録取りで預けていて俺の手から離れるのを待っていた、と言うところか。

無視してもいいんだけど後々、めんどくさそうだな。まあ顔合わせと言う意味も合わせて会いに行くか。「八卦龍」が無いなら如何とにでも出来るなんて思ってるなら、大間違いだという事もついでに教えに行くか。

「会長、鈴木キノが到着しましたが」

「そう。では通してくれる、虚」

「はい」

生徒会室のドアが開き、入ってくるキノ。

「っ……貴方が鈴木キノ君かな」

「…はい」

入った瞬間引きつった顔をした更識 楯無会長、そしてその反応を見てまたこの反応か、と内心思うキノ。

「じゃあ、なんで呼ばれたのは分かるかしら？」

「今回の決闘の事、ですか？」

「そう、今回の決闘の事なんだけど、ハッキリ言ってやりすぎよ」

「……」

「ＩＳコア以外の部分は全て大破、コアの方も後一步で大破する直前だったみたいで貴方、世界に４６７個しかないＩＳコアの一つを破壊する所だったのよ」

「……」

「いくら貴方が「世界電脳」と言う大企業の専用機乗りだからと言つて、ＩＳコアを破壊なんてしたら、それをいい事に「世界電脳」の事をよく思っていない企業や国を敵に回す所だったのよ」

「……」

「…ねえ、聞いてる？キノ君」

「言いたい事は、それだけ、ですか」

「！……それはどういう事かしら」

キノの一言に目を細める会長。

「……てつきり、”帰ってこない”人の事を聞かれると、思っていたので」

「！！」

その一言を言った直後、キノの首にラスティ・ネイルを瞬時に

展開して突きつける。

「……何をするんですか」

「……驚かないの？」

「貴方が刺すより早く、貴方が死ぬだけ、なので」

「それは「会長周りを」！」

虚に言われラスティ―・ネイルを突きつけたまま自分の周囲を見
てみると

「これ、は……」

楯無の周りには” 7 つ ” の球体が浮かんでいた。

「どうして「八卦球」が……」

「「八卦龍」が無ければどうにかできると、思っていたようですが、それは甘い考えですね。「八卦球」は手元に「八卦龍」が無くても展開できるんですよ」

「そ、んな、無理よ！！ISの兵装をISを持たずに展開するなんて……！」

「それを可能とするのが「八卦龍」であり「世界電脳」の技術力、
と言う物です」

「「世界電脳」の技術力はそこまでなの……」

「…さて、この剣。如何するんですか？」

「…退けさせてもらっわ」

自分の周りの「八卦球」に注意しながらラスティー・ネイルを消す楯無会長。

「貴方もそれを、消さないの？」

「ええ、いきなり攻撃されたら、嫌ですから」

「くっ……」

悔しそうな顔でこちらを睨む楯無会長。

「…何所まで、話しましたかね？」

「……帰ってこない人達の事よ」

「ああ、その事でしたか」

「……貴方が、どこでその事を知ったのか教えて欲しいのだけど」

「それぐらい、ご自慢の情報網で調べたらどうですか？対暗部用暗部「更識家」の現当主、17代目更識 楯無さん？」

「…！」

「「更識 楯無」、IS学園の生徒でありながら自由国籍権を持

ち、ロシアの代表操縦者であると共に自機である専用機「ミステリアス・レイディ」をロシアが設計したIS「グストロイ・トゥマン・モスクヴェ」の機体データを元に一人で作り上げるほどの知識と技術力を持ち、IS学園の生徒としても明瞭快活で文武両道、他の生徒からの人気も高く生徒会長を務めるだけの能力をもつ」

「だが、同時に裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部「更識家」の現当主でありその当主としての力は歴代最年少で有りながらすでに歴代更識当主を越すと言われ、その力を買われIS学園での裏に対する警備を勤めている」

「……よく、知ってるわね。何所から調べたのかしら。お姉さんに教えて欲しいんだけど？」

余裕を持って接している振りをしているが、内心何所から調べたのか、どうやって調べてのかを考え余裕は無い状態だが、それを態度に出さないのはさすが、現当主といったところか

「お姉さん、ねえ……俺の方が年上なんですが」

「ま、まあいいじゃない。気分の問題よ」

「……まあ、いいですけど。帰ってきてない人達の事、でしたか」
姿勢を直し楯無会長と向き合うキノ。

「ええ、教えて欲しいの。彼らが何所に居るのか」

「……教えてもいいですが、条件があります」

「条件？何かしら」

「簡単な事ですよ。」此方から接触しない限り手出しをしない”
それだけです」

「……つまりお互いに”不干涉”でいたい、という事かしら」

「ええ、その通りです。俺としては「更識家」程度の組織とは言え、事を争うのは面倒なので」

「程度って……言ってくれるわね」

自分が当主である「更識家」を程度と言われ怒りを表すが

「……これを見ても、そう言えますかね？」

そう言いながら懷からUSBメモリを渡すキノ。

「これは……？」

「見れば分かります」

「虚、お願い」

「はい……これ、は！？」

「如何したの？虚」

「会長、いえ当主これを」

”会長”では無く”当主”と言う虚。つまり、IS学園の生徒では無く「更識家」の人間としての立場として、報告する虚。

「……どうやって、調べたのかしら。」

USBメモリに入っていたの「更識家」を調べつくしたデータだった。構成人員から始まり、個人個人の細かな情報に、「更識家」の上位の限られた人間しか知らないはずの事まで事細かに書かれていた。

「分かりますか？此処まで調べられている事に気づけない組織なんて、程度扱いで十分です。…ああ、それとその情報が入ったメモリはそれだけです。」

「そ、う」

冷や汗が止まらない楯無会長。

「……で、この条件受けて貰えますよね、会長さん？」

にこやかに笑うキノ

「……分かったわ。その条件、飲みましょう」

「よかった。受けてもらわなかったら此方も”いろいろ”しなくてはならなかったので」

「”いろいろ”ねえ……聞いても？」

「聞かないほうが身のため、ですよ？」

もういう事は無い、と言った感じで出て行くとするキノ。

「まって、まだ帰ってきてない人達の事を聞いてないわ」

「……ああ、その事ならもう済んでますよ。今頃、本家の方に帰っている所じゃないですか？」

「それは、ホントの事なの」

「ええ、直ぐに連絡が、来ると思いますよ。それでは失礼しました」

周りの「八卦球」を消して出て行くキノ。

「虚、本家の方に連絡を」

「今確認中です……確認取れました。帰ってこなかった全員が帰って来たとの事です」

「…そう、皆帰って来たのね」

そう言った時の顔は皆が帰ってきた事に安堵した顔だった。

「帰ってきた人達にはシツカリと休ませてあげて。その後には話を聞いておいて」

「分かりました……今回の事はいかがしますか？」

「分かってるでしょ、虚。お互いに不干渉でいる、と条件を飲ん

でしまったのよ。此方からはもう手は出せないのよ。……ハア、本家の方にどう言って説明しましょうか」

「……付き合います、当主」

「ありがとう、虚」

上手くいけば、何か有用な情報を得られるかと思い接触した結果が、此方の弱みを握られ一切の手出しが出来ないようにされてしまった。

「……頭が痛いわ。」

自分のした事による結果に頭を抑える楯無会長、それを心配そうに見つめる虚。二人はしばらくの間説明に後始末と、寝れない日が続きそうだ。

さて、あの子のセシリアの事を話しておこう。

あの子、医療施設に搬送されたセシリアだがその日の夜には意識は戻ったのだが、衝撃が強すぎたのか一時的な記憶喪失になってしまったらしい。記憶喪失と言っても今回の決闘の前後の記憶が、だ

ただ、体の方にはシツカリと今回の事が刻み込まれていたらしく、ISに対して恐怖感を感じているようでISに触れると全身が震え、恐怖感で動けなくなるらしい。

だが記憶喪失になったと言っても仕出かした事は無くなりはないので今回の事の責任を取り、深夜の内にIS学園を去っていったようだ。

イギリスに戻った、セシリアに待っていたのは専用機の取り上げ、代表候補生からの除外、オルコット家の財産、土地等の取り上げにお家の取り潰しだった。

イギリス政府はセシリアが今回仕出かした事に政府の人間は皆頭を抱えていた。セシリアの態度に問題はあったが織斑一夏を通して後ろの二人に接触が出来ないか、と考えていたが、その考えの結果が「世界電脳」に喧嘩を売る、と言う最悪の結果をもたらしたのである。

イギリスにとって「世界電脳」と言う企業はすでに無くてはならない企業となつてゐる。何せ国の半数近くの事業にその息が掛かつてゐるのである。そんな状態で企業から支援等を制限、最悪打ち切りなどされでもしたら国が潰れてしまふ。比喩表現ではなく真面目に潰れてしまふ。

その様な事を仕出かしたオルコット家当主のセシリアに対しての対処は迅速に行われた。

まず、専用機の取り上げだが、取り上げどころか機体はコアを除く殆どが大破、コアの方も大破一步前の状態で取り上げるよりも、一から作り直した方が早い状態だった。限られた数しかないISCコアの内の自国のISCコアが大破寸前になつて帰つてきた事に政府の人間はさらに頭を抱える事になつた。

代表候補生の除外は当たり前の事だった。各国の代表や候補生が集まる場所で他国の事、しかもISCコアを作つた篠ノ之束が生まれた国を貶す様な発言を初っ端から言い放ち、その後始末に駆け回つてやつと終つたと思つた時にこの出来事である。政府はこれを受け今現在、国内に居る候補生のモラル向上を第一として再検等を始めた。なにせ今回の事で他の国から自国の代表は他の国の事を平気で罵る、などという事を囁かれ世界での立場を下げてしまつたのである。

ゆえにこれほどの事を仕出かしたオルコット家の取り潰しは当たり前だった。

「世界電脳」に対する賠償金の殆どをオルコット家が持つ資金、土地、企業運営権利等売り払える物全てを売り払い支払いに当てることになつた。それでも、「世界電脳」に支払う金額の3分の1程

度しか集まらなかったが。

オルコット家に使えていた人材は殆どが解雇された。ただ、セシリアの専属メイドのチェルシー・ブランケットだけはセシリアに付いて行った用だが。

そして当主であるセシリア・オルコットはどうなったか、と言うと帰国から数週間後にメイドと一緒に行方不明となった。政府はこれだけの事を仕出かした本人を必死で探したが遂に見つける事は出来なかった。ただ行方不明となる数時間前に政府にかなりの金額がセシリア・オルコット名義で寄付された事に何か関係が有るとして調査を続けているようだ。

ある企業での会話

「失礼します。お呼びでしょうか、社長」

「来たか。貴様に言う事がある。イギリスの仕出かした事件は知っているな？」

「はい。イギリスの代表候補生が「世界電腦」に喧嘩を売って返り討ちになったとか」

「そうだ。なら「世界電腦」が作った「八卦龍」の事も分かっているな」

「はい。各国、企業が開発、研究している第3世代兵器の一つBT兵器を完成させ、尚且つBT兵器としての機能はおまけ扱いとしてる、と」

「……わが社としては、是非ともその稼動データが必要なのだ。後は分かるな」

「僕が自発的にIS学園に入学して自分の意思でデータを入手して来いという事ですか」

「そうだ。だが、わが社はイギリスの二の前になる事はしたくな

い
」

「……ばれた時は、僕個人が勝手にやったという事でいいんです
ね」

「そういう事だ」

「………分かりました」

「IS学園に入学する時の準備は此方しておく。用意をしてお
け」

「はい」

「言いたい事はこれだけだ」

「……では、失礼しました」

「……まで、一つ言っておく事が有った」

「何でしょうか」

「入学する時の名前は此方で変えておく、後で通知するから覚え
ておけ」

「っ………分かりました」

「もういう事は無い、さっさと行け」

「失礼、しました」

「……………僕の名前は母さんが付けてくれた名前だよ」

「……………」

「……………」

「あの人が付けた名前なんか名乗りたくないよう」

「……誰か、僕をたすけて」

会話と接触にその後（後書き）

セシリアの”再登場フラグ”が立ちました

やっちまったな、作者！

ども、作者のマーシーです。

今回も難産でした。セシリアの扱いに困り如何しようか、如何しようかと、考えて書いた結果がこれでした。

普通にログアウトさせた方がまだ幸せだっただろうに……セシリアエ……

自称最強の会長様は出だしからつまずき後がなくなってしまうした。

如何しよう、これじゃあキノとからませれない。

まあ、いいか（おい！

さて、最後の方で出てきた二人の会話。

やっと、やっとこの作品内の第一ヒロインが出せました。

感想で山田先生がヒロインでいいじゃないかとか、いつそのことG
Zがヒロインでいいんじゃないかとか言われましたが！！

この作品のヒロインは彼女なんです！！彼女こそが第一ヒロインな
んです！！！！

でも、作者の脳内ではもうISに関わらない感じになってますけどね。

三人の転入生（前書き）

ヒロイン登場！！ヒロイン登場！！ヒロインとうじょう！！！！

やっと、やっとの事で出せました

まさかヒロイン出すのにここまで掛かるとは……

さあ、これでヒロインとキノのいちゃいちゃ小説が書ける……

はず！！だったのになぜ、こうなる

三人の転入生

決闘から一週間

クラスの雰囲気最悪です

まあ、原因は俺とあの決闘のせいだが。あの決闘の時の戦い方に、最後の笑い声。そのせいで「冥府の悪魔」とか「戦闘狂」とかいろいろ付けられた。

今、クラスは一夏を中心としたグループとそれ以外のグループが複数、そして俺一人だけ、と言う感じで分かれている。まあ決闘の後の会話のせいでもいいようにには思われてないと分かっていたが、ここまでとは・・・まあ、雰囲気は最悪だが、突っかかってくる奴がいないだけマシか。

さて、休み明けの今日転入生がこの1年1組と1年2組に来るようだ。

昨日GZが報告してきた。なぜこの時期に転入してくるかと言うと2組の方は元から転入手続きやら何やらでこの時期に決まっていたのだが、1組つまり俺のクラスは違うらしい。

もともと俺のクラスにはもう少し後にドイツから転入生が来る事になっていたのだが今回の決闘騒ぎでイギリスの代表候補生が一人居なくなった事に各国の政府が飛びつき我が国の代表候補生を……と言う感じになり結局、フランスの代表候補生がイギリスの代わりとしてこのクラスに転入する事になったのだ。

で、フランス政府がかなり無茶をしてこの時期に代表候補生をねじ込んで来たのに対しドイツも負けじとこの時期に入学を切り上げたらしい。

ご苦労なこって。

GZの報告では、2組の方は中国からの転入生で名前は「凰 鈴音」中学2年生まで織斑 一夏と同じ中学にいたが親の都合で中国に帰国。その後ISの適合値の高さと自身の猛勉強によって短期間で中国の代表候補生にまで上り詰め、専用機を得る事になる。

専用機は中国が作った第三世代のIS名前を「甲龍」と言い、第三世代兵器の一つ、空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲、通称「龍砲」を装備し、近、中距離戦を重視したISである。

で、此方の1組には二人、転入生が来る。

一人目は「ラウラ・ボーデヴィツヒ」ドイツの代表候補生でありながらドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長で階級は少佐。まだ子供と言っている年齢ながら現役のドイツ軍人であり、ありとあらゆる兵器の操縦方法や戦略等を体得、体術等の生身での戦闘能力も極めて高く、軍内部で優秀な成績を収めてきた。その正体は遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビーであり生まれる前から軍人として生きる事が決められていたのである。

IS登場後にドイツが開発したIS補佐用ナノマシン「ヴォーダ・オージエ」の不適合によって能力を制御しきれず、以降のISを使用した訓練では全て基準以下の成績となってしまう、軍内部で出来損ない扱いされ、自身存在の意味を見失っていたが、ISの教官として赴任した織斑 千冬の特訓により部隊最強の座に再度上り詰める事が出来たようだ。

専用機として「シュヴァルツェア・レーゲン」を使用しており、このISにも第三世代兵器の一つAIC、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーを装備している。このAIC、対象を任意に停止させることができ、1対1では反則的な効果を発揮するも、使用には多量の集中力が必要であり、複数相手やエネルギー兵器には効果が薄いのである。他には右肩の大型レールカノンとワイヤーブレード、両腕のプラズマ手刀等があり、ラウラ本人の戦闘技能と合わさりかなり高い戦闘能力がある。

二人目は「シャルル・ベルレアン」驚く事に世界で三人目の”男性”適合者である。フランスの代表候補生でも有るが、広告塔のよ

うな扱いでなつたのではなく実力で代表候補生になつた実力者である。さらに彼のスポンサーとしてデュノア社がバックアップをしており専用機もデュノア社が用意している。

専用機は「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅠⅠ」ⅠⅠシエア第三位のデュノア社がシャルルの為に自社の「ラファール・リヴァイヴ」をシャルルの専用機として改造したⅠⅠである。他の専用機と比べるとこれと言つた特徴こそ無いものの、カスタム前のと比べると基本装備の一部を外し後付け装備用に拡張領域を原型機の2倍にまで追加しており、その搭載量は追加装備だけで20体になりシャルルの得意戦術と相まって距離を選ばない戦闘が可能となっている。

と、言う感じに昨日GZから報告があつたのだが、この三人の内の一人の「シャルル・ベルレアン」、追加報告としてさらに情報が載っていたのだが、それを見て頭が痛くなつた。

この「シャルル・ベルレアン」、本名を「シャルロット・デュノア」と言い”女性”なのである。

さらに”デュノア”の苗字の通りスポンサーになっているデュノア社の社長の実子である。ただし愛人との間に生まれたらしく、母親が病で倒れその治療をもらう代わりに、デュノア社に引き取られたようだが父親との間に親としての感情は無く、本妻の方とはかなり陰悪なようで、デュノア社に引き取られたのもⅠⅠの適合値

が高かったからと言う肉親としての感情は一切無かったようだ。

この様な扱いを受けているシャルル、いやシャルロットがこのIS学園に入学してくる理由なんて一つしかない。先日の決闘で見せた「世界電脳」が作った「八卦龍」のデータが目当てだろう。それ以外にも一夏の専用機である「白式」のデータを狙っていると思っただがGZいわく違うらしい。

デュノア社は今第三世代の兵器の開発に手こずっているらしく、そんな中で先日の決闘で見た「八卦龍」の「八卦球」の持つBT兵器としての機能の情報が欲しいらしく、「白式」は性能は確かに自社のISより上なのだが兵装は一つしかなく、さらにそれも単一仕様能力として機能しているのでデータを取れたとしても再現が出来ないので「白式」よりも「八卦龍」の「八卦球」のデータが欲しい、とのことだ。

先日、イギリスの代表候補生が馬鹿な真似をしたのに何を考えているのかと思えば、デュノア社の社長は表向きはあくまでもシャルロットのスポンサーでありフランスの代表候補生に専用機を貸しているだけ、と言う立場で裏でシャルロットを使いデータを入手し、シャルロットが失敗しても自社はあくまでスポンサーであり専用機を貸しているだけ、と言い張り最悪賠償金を得ようとしているのである。その為にシャルロットに、偽名であるシャルル・ベルレアンを名乗らせ、自分とは関係のない人物としているのである。

ベルレアン、と言うのはシャルの母親、つまり愛人の苗字であり父親は政府と取引をしたのか自分とは全く関係のない人物をでっち上げ、さらに故人として扱い、シャルロットが自分の実子という事を隠蔽したのである。

……そこまでして「八卦球」のデータが欲しいのか、このデユノア社の社長は。愛人の子供とは言え自分の子供だろうに、その子を捨て駒のように扱うとは虫唾が走る。

GZからの報告を思い出し、少し不機嫌になった所に山田先生と織斑先生が入ってきた。

「みなさ〜ん、席に着いてくださ〜い。HRを始めますよ」

「さつさと席に着け」

「席に着きましたね。では今日は皆さんにお知らせがあります。なんとこのクラスに転入生が来ます。しかも二人!!」

その言葉にざわめくクラスメイト

「転入生!! しかも二人!!」

「どんな子なんだろう?」

「……でも、このクラスには……」

「「「あ〜」」」

こつちを見るな! 前を向け、前を。

「静かにしないか、ばか者共」

一喝で静かになるクラス。

「コホン、では入って来い」

クラスのドアが開き入ってくる二人、そして。

「『『『きやあああああ！！！！』』』」

広がる悲鳴、その声に顔をしかめる俺

「金髪美少年！！……少年？」

「銀髪美少女！！来たああー」

「二人ともとってもイイ！！」

此処最近の鬱憤を晴らすかのごとく騒ぐクラスメイト達。

「静かにしろと言った筈だ！！グラウンドを走りたいか！！」

一喝ですぐ静かになるクラスメイト。

「フウ、では自己紹介をしろ。先にシャルルからだ」

「はい」

金髪の方が返事をして一歩前に出て自己紹介を始める。

「フランスから来たシャルル・ベルレアンです。日本の事はまだよく分かりませんがよろしくお願いします。あと僕、男ですから」

そう言って下がるシャルル。

「男って、え、三人目って事！？」

「このクラスでよか……た？」

「金髪僕っ子……いい」

またざわつくも

「静かにしろと言っているだろうそんなに走りたいのか!!」
すぐに静かになるクラス。

「全く……ではボーデヴィツヒ、自己紹介を」

「はい、教官」

「此处では先生だ」

「了解しました」

銀髪の方も一歩前に出て自己紹介を始めるも

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「「「……」」」

「あの、ラウラさん？それだけですか？」

「それだけだ」

「……」

そう言って一歩下がるラウラ。

「あー、まあいい。二人とも席に着け。後ろの開いている席の右がシャルル、左がラウラだ」

「はい。分かりました」

「はっ！ー！了解しました」

そして、一夏の方にラウラが、俺の方にシャルルが来る

「貴様が」

「何するん」

なにやら向こうが騒がしいが今はこっちの方が大事だ。

「え……っと、その僕シャルルって言うんだ、よろしくね」

俺の見た目に最初こそビビったもののその後は普通に笑顔で話しかけてくる。

その気力はすばらしい、すばらしいがGZからの報告で裏を知ってしまっている俺としてはこのシャルルが浮かべる”笑顔”がとても薄っぺらく見えた。

その後、普段より幾分か騒がしい授業が終わり帰ろうとした時シャルルに声を掛けられた。

「あの、鈴木君、ちょっといいかな」

その一言に驚愕するクラスメイト達。

「そんな！？彼に声を掛けてる！！」

「そっか、シャルル君まだ彼の事知らないんだ！！」

「ちょ、誰か止めた方が……」

声を掛けられただけで酷い言われようだ……まあしょうがないか。

「……なんかすごい言われようだけど」

「……いつもの事だ。気にするな」

「いつもの事なんだ、これ」

「……で、何のようだ？」

「あ、つとそのね？僕この学校の事、まだ詳しくないから紹介してくれないかなって」

「……俺に？」

「うん、鈴木君に」

「……」

「……?」

「…悪いが、他を当たってくれ」

そう言いながらシャルルから離れ、教室から出て行く俺。

後ろでなにやらシャルルにいろいろと教えているクラスメイトの声を聞きながら考える。

(……)

(…あの”笑顔”は駄目だ)

(俺の見た目に怯む事無く、向けられたのに)

(裏を知っている俺にはアレがどうしても薄っぺらく見えてしま
う)

(俺を見て笑顔でいた人なんて殆どいなかったのに)

(自分で望んでおきながら我侭な事だけど、怯えた顔より笑顔の
方がいい)

(…でも、彼女にしてあげられる事は無い)

(少なくとも彼女がISに関わっている限り)

(俺がそう決めたから……)

（そう、決めたんだ）

そう、俺はISの世界を壊すと決めたのだ。だからISに関わっている彼女を救う事は出来ない。

彼女がISから決別しない限り俺は彼女を救えない、救ってはいけないのだ。

その思いが通じたのか、それとも唯の偶然なのか、俺は彼女を救う事のできる機会を得る事ができた。

その時、彼女が取った行動で彼女と俺の進む道が決まったのだ。

キノが教室から出て行って少しして

「シャルルくん。いますか？」

「あ、はい。何でしょうか、山田先生」

「よかった、まだクラスに居たんですね。少しいいですか？」

「はい、大丈夫です」

「そうですね。ではクラスの皆さん、シャルル君を借りてきますね」

シャルルを連れて教室から出て行く山田先生。

「それで、何の用ですか山田先生？」

「ええつとですね、寮の力ギをまだ渡してなかったたので渡そうかと」

「ああ、そういえばまだ貰ってなかったですね」

「では、これが寮の力ギです。ルームメイトはラウラさんですから、仲良くしてくださいね？」

「はい。……そうだ、山田先生一つ聞いていいですか？」

「はい？なんでしょうか」

シャルルの質問に笑顔で聞き返す山田先生。

「鈴木キノ君の部屋の番号って何番なんですか？」

「キノ君の寮の番号ですか？無いですよ？」

「え？無い」

「はい、キノ君は寮ではなくて、一軒家に住んでいますから」

「……一軒家？寮じゃなくて？」

「はい。キノ君は寮じゃなくて一軒家に住んでいます」

にこやかに笑いながら言う山田先生と、啞然とした表情を浮かべるシャルル。

「そ、そうなんですか、一軒家に住んでるんだ、鈴木君って」

「そうですよ。防犯もバッチリです。何せ「世界電脳」が総力を挙げて考え作り出したんですから、下手な企業や、重要設備なんか目じゃないですよ」

「はは、そう、なんですか」

「ええ、そうなんですよ」

少し引きつった表情を浮かべ笑うシャルル、だが次の一言を聞いた時驚愕する事になる。

「だから、「八卦球」のデータ取りはあきらめた方がいいですよ？」

その一言を聞いた時、シャルルの行動が完全に止まる。

「な、何を」

「……シャルル・ベルレアン君」

「は、はい！」

そこで見たのは、さっきと同じようににこやかに笑う山田先生。

だが、彼女からは先ほどからは考えられない程の威圧感が出ていた。

「シャルル君はまだ知らなかったみたいですね」

「な、何を……」

「私はIS学園の教師をしています但正式には「世界電脳」から派遣としてこの学園に來ています」

「「世界電脳」……」

「代表候補生なら先日決闘騒ぎの内容も知っていますね？」

「は、い……」

「「世界電脳」としては先日の決闘騒ぎにとても迷惑したんですよ。相手側がすぐに賠償金と謝罪声明を出したおかげですぐ騒動は収まりましたが、もし賠償金と謝罪声明が遅れた場合経済制裁を掛ける事も提案されていたんです」

「一国とは言えその国は「世界電脳」内でそれなりの割合を占めていましたので経済制裁を掛けると結構な金額の赤字になってしまふ所だったんです」

「……」

「だから、シャルル君」

「は、はい」

「もし、シャルル君がキノさんに対して何らかの不適切な対応を取ったとしたら……」

「と、取ったとしたら……」

「『世界電脳』が全力で相手をします」

「っ……」

そういつて威圧感を全開にする山田先生。その姿はいつもの子供らしさは一切無くただ敵対する者には容赦はしない、ただそれだけを伝えている姿があった。

「……っと、少し脅かし過ぎちゃいましたね。ごめんなさい、シャルル君」

「え？」

先ほどの態度から一転、いつもの子供っぱさで謝る山田先生。

「先日の決闘騒ぎで上の方からいろいろと言われていて少し、イライラしてたからって八つ当たりみたいな事をしてしまっでごめんね」

「や、八つ当たりだったんですか、今の!!」

「八つ当たりっぽくなってしまったのは謝りますけど、言った事は本当ですよ」

「っ!」

「貴方がどの様な考えでこのIS学園に来たのかは大体予想がつきます。だからこそこのタイミングで注意したんです」

「貴方がこのままキノさんにちょっかいを出して迷惑を受けるのはいったい誰なのか?それを分かって貰いたかったので。これで分かりましたよね」

「……はい。分かりました」

「では、先生は此处で別れますね。気を付けて帰ってくださいね」

そういつて別れていく山田先生。

「……」

「……それでも」

「それでも、僕はしなくちゃならないんだ」

「そうしないと、そうしないと……」

「母さんを、守れないじゃないか」

三人の転入生（後書き）

じかんじくが みだれる

どうも、感想に一喜一憂する作者のマーシーです。

やっちまったぜよ、オリストリーになってしまった。

前回金髪ドリルさんが一時離脱した事によるキャラ補充した結果。

ラウラとシャルがロゲインする事に。

この作品のシャルさん、ヒロイン扱いだけあって結構いろいろと原作と違います。

名前とか、母親の事とか。

シャルさんはこれからいろいろと試練？災難？……まあいろいろと受けてもらいますが、まあいい扱いになるはずです。

ラウラは、如何しよう？あまり考えてはいなかったな

まあ、暴走してVTだがTVだか発動しても「八卦龍」の前では意味が無いですけど。

というかVT自体がかませ犬になる考えが浮かんできているのだが如何しよう。

……鈴？ああ居たっけそんなキャラ。

作品内では原作初登場シーンはシャル＆ラウラの紹介で潰れます。

食堂での会話はキノは食堂で食事を取らないのでその場に居ないので知りません。

一夏との喧嘩？キノにとっては興味が無いのでノータッチです。

クラス対抗戦の代表の事は次回の話で詳しく書きますのでお待ちください。

人生の転機（前書き）

勢いで書いて、考えず感じるままに作った結果がこれだよ

だが、退かぬ、媚びぬ、省みぬ！

作者とGZに自重の二文字はな（凛々しい山田先生にめい
れました
おーさ

人生の転機

シャルルが山田先生に八つ当たりをされていた頃

キノは、ラウラと会話していた

「……で、こんな所に呼び出して何か用か？」

そこは普段人があまり寄り付かない静かな所だった

「……一つ、頼み事が有る」

「頼み、事？」

「そうだ」

「……初対面のお前に頼まれる事なんて無い、と思うが」

「それは分かっている。だが、此方にも退けない事情が有るのでな。頼みとは、クラス対抗戦代表の織斑 一夏と私の戦いに手を出さないで貰いたい」

そう言い放つラウラ

「どういう事だ？」

「簡単な事だ、今後私が織斑　一夏と戦う事が有った時、手を出さないで貰いたい、という事だ」

「何故、それを俺に言う。俺には関係が無いだろう」

「それは分かっている。だが保険は必要だろう？」

「保険？」

「ああ。わがドイツ軍は貴様が持つ「八卦龍」の事を危険だと判断している。先日あったイギリス代表候補生との戦いの時の画像を見たが、ハッキリ言って私でも勝てる気がしない」

「そんな中で、私が織斑　一夏と戦う時、もし貴様が割り込んできたら余程の事がない限り勝つ事は出来ないだろう。私は織斑　一夏との戦いだけは誰にも邪魔はされたくないのだ」

「だから、貴様に邪魔をしないでくれ、と頼んでいるのだ」

そう言って頭を下げるラウラ

「・・・まあ、別にいいが」

「聞いてくれるか！」

「ああ。別に俺はお前とアイツが何所でどう戦おうと横槍を入れる気は無い」

「・・・そうか。フウ、これで心置きなく奴を叩き潰せる」

獰猛な顔つきで一夏に対して敵意をむき出して言い放つ

「・・・まあいい。話はそれだけか？」

「ああ、それだけだ。手間を掛けたな。すまない」

「別にいい」

そこで話は終わり帰ろうとしたラウラに

「・・・一つ聞いても良いか？」

「?・・・なんだ」

一つの質問を投げかけるキノ

「・・・お前にとって”IS”とは何だ？」

「私にとっての”IS”だと？」

「そうだ」

その質問にすぐ答えを出すラウラ

「私にとっての”IS”など決まっている。それは”力”だ」

「”力”だと？」

「そうだ。私はこの力が有るからこそ私で居られるのだ」

「・・・そう、か」

「そうだ。聞きたい事はそれだけか？」

「・・・ああ。手間を掛けたな」

「構わん。先に手間を掛けたのは此方だからな」

それだけ言つて別れる二人

「・・・力、か」

「”IS”という”力”が貴様を作り上げているならその”IS”が無くなつたら？そして”IS”を上回る”力”が現れたら？」

「その時、貴様は自分を保ってられるかな？」

ラウラと別れそのまま自分の住んでる一軒家に向かうキノ。だが
家に着く前に呼び止められる

「キノさん」

「山田先生？どうしました」

「えつとですね、一つ報告をしに来ました」

「報告？」

「はい。シャルル君の事で」

姿勢を正し報告をしてくる山田先生。それは教師としてでは無く「世界電腦」の人間としてだった

「今さっきシャルル君と話してたのですが、そこで一応忠告をしておきました」

「忠告、ですか」

「はい、貴方が誰を相手にしているかを確認させただけですけど、これではらくは下手な行動はして来ないと思うのですが・・・」

「そう、ですか。報告ありがとうございます」

「いえ、IS学園内での報告は私に一任されましたのでこれくらいは」

「そう、なんですか」

「はい。今後「世界電腦」関係の連絡等は私がする事になります。

ですのでこれからよろしくお願いしますね」

「はい、お願いします」

「では、また明日学校でお会いしましょう」

「ええ、また明日」

簡単な挨拶を交わし別れる二人

山田先生と別れ家に帰り、しばらくした時

<報告、シャルル・ベルレアン接近>

と「MIKU」が報告してきた。今IS学園内での報告は「MIKU」に任せている

なぜか？GZだと要らん事まで報告してくるからだ。誰が、何所で、何をしたか、事細かにしかもIS学園内に居るすべての人間の報告だ。要らんわそんな報告。かと言って報告するなって言うと報告しないで裏で何してるか分かんないし、その点「MIKU」の方はAI搭載とは言えあくまで戦闘用のAIだから戦闘以外だと必要な事だけ報告してくれるから、IS学園内だとこっちの方が正直助かる

<報告、玄関正面デ目標停止、迎撃殲滅シマスカ>

だが、戦闘用だからいう事は物騒だ

ピンポーン

チャイムが鳴る

「・・・まあ、出て見るか」

山田先生に忠告された当日、しかも殆ど時間を空けずに接触してくるとは。自分の行動がどんな結果を出すか分からないでも無い筈なのにどうという魂胆だ？

「・・・シャルル？」

「えへへ、来ちゃった」

悪戯が成功したような顔で言い放つシャルル

「その、ね？鈴木君の事クラスの皆にいろいろ聞いたんだけど、それが本当なのかどうなのか気になったから来て見ました」

「・・・」

思わず頭を抱えなくなった

「・・・俺の事を聞いてるなら普通、来ないだろ」

「そうだけど、僕そういう事は自分で確かめたい人だから。それで上がってもいいかな？」

「・・・ハア。勝手にしろ」

「うん、じゃあ勝手にするね。お邪魔します」

家の中に戻る俺について来るシャルル

「大きいんだね、鈴木君の家」

「まあ、無駄に広いだけだ」

「でも、広い家に一人きりって寂しくない？」

「・・・一人きりはなれてる」

「そ、そうなんだ。聞いちゃ不味かったかな」

「・・・気にするな」

「えっと、ごめん」

そんな会話をしながら客間に着きとりあえず飲み物を出す

「緑茶しかないがいいか？」

「うん、大丈夫だよ」

とりあえず一息つく二人

「・・・さて、シャルルが此処に来た理由だが」

「うん。鈴木君の事を・・・」

「「八卦球」のデータの事だろ？」

「・・・え？」

「転入初日に、しかも忠告を受けた直後に此処に来るとは、誰も予想は出来なかったな」

「い、いや僕はそんなつもりじゃ・・・」

「・・・そうだな。フランス代表候補生”シャルル・ベルレアン”としてなら此処にはまず来ない。なぜならイギリスの代表候補生が仕出かした事によつて各国の代表候補生に対して各政府から厳命として俺と敵対するような行動はとるな、と言われてるからな」

「・・・」

「なら、その厳命を無視してまで俺に接触する理由は？各国はイギリスが起こした出来事の結末を知らない訳が無い。なのにお前は俺に接触してくる。つまりフランス代表候補生としての立場以上の何かがお前には有り、それにより俺と接触する必要があるとしたら？」

「そうなんだろう？」シャルル・ベルレアン”いや”シャルロット・デュノア”」

「っ！！」

俺がシャルルの本当の名前を言った時、シャルルの顔は驚愕に染まった

「・・・何所で、知つたの？僕の本当の名前」

「お前が転入してくる前の日に」

「転入前からばれてたんだ・・・じゃあ僕の目的も？」

「ああ。全部知ってる」

「・・・そっか。全部ばれてるんだ」

顔を上に向けつづやくシャルル、いやシャルロット

「・・・全部知ってるなら、僕の性別も知ってるよね」

「・・・男性”では無く”女性”なんだろう」

「そう、だから僕ができる事はこれしか無いんだ」

立ち上がり、服を脱ぎだし始める

「な、何をしてる!!」

慌てて、止めに入る

「離して、もう僕にはこれしかないんだ!!」

「お、落ち着け」

「ぼ、僕が、僕がしないと母さんが死んじゃうんだ!!」

そう泣きながら言い放つシャルロット

「母さんが死ぬ？」

「そうだよ！僕が何とかしないと僕の、僕の母さんが死んじゃうんだよ！僕はどうなったっていい」

「でも母さんが死んじゃうのは嫌だ！！母さんが死ぬなんて、死ぬなんて・・・」

そこまで言うてから急に力が抜けたかの様に座り込み小さく呟く

「嫌だ・・・一人は嫌だよ・・・僕を、私を一人にしないでよう・・・」

泣きながらそう繰り返して呟く

「・・・ハア」

「・・・え？」

ため息をつきながら子供をあやす様に抱きしめるキノ

「・・・落ち着いたか？」

「・・・ごめん。もう少しこのままで居させて」

しばらくして

「・・・ありがと。もう大丈夫だよ」

「そうか」

顔を赤くしながら離れるシャルロット

「その、えっと・・・恥ずかしい所見せちゃったね」

「・・・別に、気にしてない」

そつぽを向きながら言うが

「フフ、顔が真っ赤だよ」

「・・・うるさい」

そんなやり取りをして場の雰囲気が軽くなった所で切り出す

「・・・それでデュノア「その名で僕を呼ばないで」・・・ならシャルロット」

「なにかな」

「母さんが死ぬ、とは」

「・・・それは」

「いや、言わなくていい。失言だった」

「ううん。鈴木君「キノでいい」ならキノ君には聞いて欲しい」

そしてそこからシャルロットの話が始まった

僕、ううん私はフランスの田舎町で生まれたて、物心ついたときから母さん一人に育てられてきた。子供の頃は私の父親はどうしたのって言って母さんを困らせてたっけ

子供一人とは言え女性である母さんだけでは育てるのは大変で私の家は貧乏だったけど、それでもあの頃は楽しかった。誕生日の日に母さんが小さいけどケーキを買って来てくれて二人で食べた時は嬉しかったなあ

でも、私が大きくなるにつれて母さんの負担も大きくなっていったんだ。だんだんとやつれて行く母さんを見ているのは辛かった。でも女性で子供の私が働けるわけも無くせいぜい家の家事をして少しでも母さんの負担を減らすくらいしかなかった

そんな時、”IS”が登場し、そして”アイツ”が現れたんだ

アイツって言うのは私の父親、つまりデュノア社社長の事でアイツはISが登場してから開始された適性検査で私がISの適正値が高い事を何所からか調べて近寄ってきたんだ

無論、母さんは私を守るために私をデュノア社に預けるのを断っていたけど、その頃母さんは体を壊して病気にかかっていたんだ。それを知っていた私は母さんの反対を押し切ってデュノア社に入っただ。母さんの治療を引き換えに

そこからは辛い毎日だった。アイツは私の事は肉親とも自分の子供とも思っただけで、あいつの妻には初対面でいきなり張り手をくらわされたよ。で、そこで私がアイツの愛人の子供だって知ったんだ。それなら母さんが私をデュノア社に入る事を反対するはずだよね

デュノア社に入ってから毎日、ISに乗って訓練に性能テスト、IS関係の専門知識の勉強三昧で碌に遊ぶ事も無く働かせられてた。それでも母さんの病気が治るなら、母さんが元気になってくれるならって思っただけになっただけでがんばっていたんだ

それでも母さんの病気はよくならなかった。私を育てるために無理をしすぎたって言われた。それで少し前に病気が悪化して手術をしないと助からないって聞かされた時は自分の立場も忘れてアイツに母さんを助けてって言ったんだ

そうしたらアイツなんて言ったと思う？

「母親を助けたければ「八卦球」のデータを奪って来い」

だって。アイツは私の事も母さんの事もどうでもよかったんだ。唯自分にとって都合のいい駒としか思っただけだったんだ。でも私はそれを聞くしか道は無かった。だってそうしないと母さんが死んじゃうんだから。母さんが死んでしまいうくらいだったら私は如何なってもいい。母さんが死んでしまうよりずっとましだから

「・・・これで、私の話はお終い。どう？何所にでも有りそうな話だったでしょ」

放し終わったシャルロットの顔は何所かスッキリとした顔だった

「・・・母親を人質にとられている、という訳か」

「そうだよ。でも、それでも母さんが助かるなら私は・・・」

「その、母親の事なんだが」

「母さんが？」

「・・・手術をしなければ死ぬ、と言うのは嘘だ」

「・・・う、そ？」

シャルロットの話を聞き始めた時からGZを使い母親の事を調べさせたのだが、母親が死ぬと言うのは完全に嘘のようだった。確かに病気にはかかってはいるがそれも治療を受け始めた時期を考えるとかなり前に治っていなくてはおかしかった

「シャルロット、お前をIS学園に転入させようとしても母親の事が心配で、シツカリと働くか分からなかったデュノア社は”母親の死”という嘘をつく事でお前が自分から必死で働くように仕向け

「ただ」

「な、え・・・」

「さらに、母親の病気は治療を受けた時期から考えるとかなり前に治っていないではおかしい」

「・・・じゃあ」

「シャルロット、お前は母親をダシにいい様に扱われていたって事だ」

「そ、んな・・・じゃあなんで私は・・・」

「・・・デュノア社にとってお前が自分のいう事を聞く、都合のいい手駒でそれを手放さないために母親という首輪を使っただろう」

「・・・」

事実を知ってしまったシャルロットの表情は言葉出来なかった

「・・・フフ」

「シャルロット？」

「フ、 フッフ、 アハハハハハハハハハハ！！」

急に大声で笑い出し立ち上がるシャルロット

「ど、どうしたんだ!?」

「フフ、だってキノ！笑うしかないよ！母さんを助けるために必死に、必死になって働いてきたのに結局私は都合のいい駒でしかなくて、いいように騙されて来たんだから！！」

「それで、今度は母さんが死ぬって騙されてデュノア社に捨て駒として此処に送られてきたんだ。ご丁寧に私の名前を奪って、デュノア社とは関係ないようにされて」

「もう、笑うしかないでしょ。こんな・・・こんな滑稽な話つて無いよ・・・」

そこまで言うてまた座り込む

「もう、嫌だよ。いいように扱われるのも、母さんと一緒に暮らせないのも」

⌈
•
•
•
⌋

「私は、ただ母さんと一緒に過ごせればよかったんだ。貧乏でも」

母さんと二人なら幸せだった」

「シャルロット・・・」

「ねえ、助けてよ・・・誰か、私と母さんを助けてよ・・・」

俯き大粒の涙を流し助けを呼ぶシャルロット

彼女もＩＳによって人生を狂わされた被害者の一人だった

だから、俺は・・・

「シャルロット・デュノア、助けて欲しいか？」

「え？」

「いいように扱われている自分と、その為に飼い殺しにされている母親を助けたいか？」

「・・・た、すけたい、助けたいに決まってる！！」

「その為に過去の自分と今の自分を犠牲に出来るか？」

「私なんか如何なってもいい！！それで母さんを助けられるなら」

「助けた事で起きるいかなる結果も受け入れるか？」

「いいよ、受け入れる。母さんを助ける事でどんな事が起きても私は全てを受け入れてみせる」

そう言い放った彼女の瞳には強い強い光があった

「ならば誓え、シャルロット・デュノアは過去と今の自分を冥府の王に捧げ助けを求めると」

「私、シャルロット・デュノアは私の過去と今を冥府の王に捧げ
助けを求めます」

あの契約の後を話そう

まずシャルロットだが、その所属をフランスから「世界電脳」に移した。

理由としては「世界電脳」の開発している新機軸の新型との適合値がもつとも高かったという事で、フランス政府から所属を移したのである

フランスもイギリスと同じく「世界電脳」の息の掛かった企業、重要設備等の援助を受けているので強くは出る事は出来ずさらにシャルロットが”男性”では無く”女性”という事実を突きつけられ断る事は出来なかった

所属を移動する際に一緒に母親も一緒に日本にある「世界電脳」系統の総合病院に移動させ最高クラスの治療を受けてもらった

母親が治療を受けている間はシャルロットは母親と一緒に居てもらった。今まで一緒に居られなかったんだからこれからは一緒に居てもらおう

さて、スポンサーであったデュノア社だがシャルロットを手放す事に対し徹底抗戦をしようとしたのだが、相手は世界トップの大企業でありとてもではないが徹底抗戦など不可能であり、ではシャル

ロットとの肉親関係を使い企業間の提供を、と考えたが表向きはデュノア社社長とシャルロットは赤の他人となっているのである

これに対してデュノア社社長はシャルロットと肉親関係であると、公表しようとしたがそれをフランス政府が阻止した

フランス政府としては自国の一企業が自国に深く関わっている大企業と争う事を回避する為に全力でデュノア社の公表しようとした事を無かった事にしようだ

それから、デュノア社は経営不振に陥り、IS関連の大企業だったもののその地位は転落し最終的に「世界電脳」の子会社として吸収合併されてしまった

デュノア社社長とその夫人は吸収合併されそうなる直前に会社の資金を持って他国に亡命しようとしたが一足遅くフランス政府に捕まり実刑判決を受けた

こうして、デュノア社社長は量産機ISのシェアを世界第3位の大企業までに育て上げたもののその企業経営に失敗し企業を「世界電脳」に吸収合併されフランス政府がさらに「世界電脳」に対してさらに頭が上がりなくなる原因を作ったとフランスの政治に関わるものから嫌悪目で見られその悪行を後世にまで語られる事となる

「世界電腦」系統の総合病院での会話

「母さん、母さん」

「あらあら、シャルどうしたの？そんなに慌てて」

「慌てて、じゃないよ！もう体の方は大丈夫なの？」

「ええ。此処のお医者様にシツカリと診てもらったからもう大丈夫よ」

「そっか、母さん病気が治ったんだね」

「ええ、もう大丈夫。だからシャル」

「え、か、母さん!？」

「こうやってシャルを抱きしめられるんだから」

「母さん・・・」

「だからシャル、泣いてもいいのよ」

「・・・え？」

「シャル、貴方には辛く大変なめに会わせてしまつてごめんなさいね」

「か、あさん」

「これからは二人一緒に暮らしましょう。だからもうそんな無理した笑顔なんてしないでいいのよ」

「・・・わた、し・・・もう無理しないでいいの?泣いて、いいの?」

「ええ」

「・・・う、うわああああああん」

「もう、大丈夫、大丈夫だからね」

「・・・わ、わたし辛かった。母さんと会えなくて、怖い人達に

困まれているのが恐かった!!」

「ごめんなさいね、そんなに辛い思いをさせてしまって」

「母さん、お母さ～～～ん」

「・・・母さん、もう大丈夫だから」
「あら、もういいのシャル」

「うん、もう大丈夫だよ」

「ふふ、私シャルのその笑顔が見たかったの」

「母さん・・・」

「で、シャル」

「何かな？母さん」

「貴方を助けてくれた恋人はどんな人かしら」

「こ！・・・恋人って、違うよキノはそんなんじゃない」

「あら、キノって言うのねその人は」

「か、母さん！」

「ふふ、冗談よ、冗談」

「も、もう。止めてよね。ビックリしたじゃない」

「でも、一度は挨拶に行かないとね。シャルを助けてくれたんだから」

「うん。キノは私と母さんを助けてくれたんだから」

「そうね、そんな人ならシャルをお嫁さんにあげてもいいかしら」

「つて、母さん!」

「ふふ、いいのよ。何も言わなくて。母さん分かってるから」

「分かってるって何言ってるの母さん」

「さあ、会いにいくと決まったらおめかししないとね」

「ちょっと母さん、何言ってるの、ちょっと母さん、かあさー」
「ーん」

人生の転機（後書き）

シャル母登場！！

どうも、最近腰が痛い作者のマーシーです

いやゝやっちまいましたよ。まさかのシャル母登場

最初は原作通り故人扱いだったんですけどなんか書いてる内に生き返ってしまったんですよ

これでシャル母&シャルのメイド化フラグが出てきてしまった

まあ、シャルはメイド的な感じとして今後も出てきますがシャル母はどうしようかなゝ

感想でレギュラー化が多かったら考えようかな（ボソ

今回のNGシーン

シャルが服を脱ぎ始めてそれを止めようと押さえつけた時

「キノさん！大変です、シャルル君がこちら、に・・・」

服が乱れ涙目でキノに押さえつけられているシャル

「キノさん、これはどういう事ですか」

「いや、これは・・・」

「助けて、山田先生犯されるー」

「ちょ、な」

「・・・キノさんがそういう趣味の持ち主だとは思いませんでした」

下を向き話しかける山田先生

そこから放たれる威圧感は圧倒的だった

「これは教師として、大人として教育が必要ですね」

そう言ってあげた顔はとてもイイ笑顔だった

「シャルル君は先に帰ってもらえますか？」

「は、はいー」

「では、キノさん逝きましようか」

「ま、まで、話せば分かる」

「大丈夫です。すぐ終わりますから」

「ちょ、まって」

ア
ア
――

閑話 シャルロット・デュノア改めシャルロット・ペルレアン(前書き)

閑話という名の時間稼ぎ

そして作者の捏造&妄想の塊

さらに一部が前話と被っている

こんな話で大丈夫か？

閑話 シャルロット・デュノア改めシャルロット・ベルレアン

始めまして、僕、ううん私の名前は「シャルロット・デュノア」
って言うんだ

と言ってももうこの名前を使う事、いや正確には苗字を使う事は
もう無いけどね

まず、何から話そうかな。そうだねまずは私の生まれから話そうか

私が生まれたのはフランスの田舎町でそこで10歳まで育ったんだ。私が物心ついた時から親は母さんしか居なくて父さんは居なかった。周りの子には居るのに私だけ父さんが居ない事を母さんによく聞いて困らせてしまった事をよく覚えてる

母さんはたった一人で私を10歳までシッカリと育ててくれた。女性という事であまりいい職場には恵まれなかったみたいで私の家は貧乏だった。だけど私はそんな事気にしなかった。近所の人たちは親切にしてくれたし、何より母さんが居たから。貧乏だったけど母さんと一緒なら何の苦勞も感じはしなかった

とは言え貧乏なのは変わらないから子供の頃から家の洗濯、掃除、料理など手伝える事は必ずして少しでも母さんの助けになるようにがんばっていた。幼いのに親の手伝いをしてるなんて立派だねと、

近所の大人の人たちは褒めてくれて、母さんも少し困った顔をしてたけど私の頭を撫でて褒めてくれた。だから大変だったけどがんばれたんだ

私は子供の頃からあまり我俣を言う様な子供ではなかったから母さんに「もう少し我俣を言ってもいいのよ」と言われる事もあったけど幼いながらに私の家が貧乏だった事は分かっていたから我俣なんて言わなかった。そんな私に母さんはこう言った。「シャルの誕生日ぐらいは我俣を言ってもいいのよ」って。だから私は「なら、誕生日にはおっきなケーキが食べたい」って言った事が有った。その年の誕生日の日母さんはどうやったのかは分からなかったけど、いつも誕生日の日に買ってきてくれる小さなケーキではなく大きな（とは言っても普段のにくらべると）ケーキを買ってきてくれた

そのケーキを母さんと一緒に食べて、一緒に私の誕生日を祝ってくれて、私の笑顔を見る母さんの顔が今でも忘れられない思い出となっている

そんな生活が続いてた頃、世間で”IS”と言う物が発表された

その時はまだ幼かった私はまるでテレビの中に出てくるヒーローが実際に出てきたのかと思いはしゃいでいたのを覚える。この時はまだ私がこの”IS”と深く関わるなんて思っても居なかった

世間にISが浸透し始めて数年した時政府がフランス国民を対象としたIS適正値を調べる調査で私は適正値がAと言う高い適正値を出した。とは言っても他にも子供である私ではなく大人の女性で適正値でA評価を受けた人はたくさん居たからそんなに目立つ事は無かった。せいぜい将来が楽しみ程度にしか思われなかったようだ

その適正試験からさらに数年がたった頃、母さんは病気にかかっていた。子供一人とは言え十年間一人で働いてきたツケが体に出てきたのだ。もともと母さんは体が丈夫な方ではないのに無理をして働いてきたのだ。

その頃の私はまだ学校に通っていて働く事すら出来なかった。その頃の私は、母さんが辛い思いをしているのに何の助けも出来ない私自身を呪っていた。そんな頃に私の家に何処かの企業の人が来るようになっていた。母さんはその人達を追い払っていて私には教えてくれなかった

だけど、追い払うのもそんなには続けられなかった。母さんの体調は日に日に悪くなる一方で母さんの看病で私も学校を休みがちになっていた。政府の保護に入ろうとしても順番待ちとかでなかなか保護を得る事はできなくどうしようもなくなっていった。

今思えばこの時から”アイツ”は手を回していたのかもしれない

そんな中で、私は家に来る企業の人が何しに来ているのかを知った。それは私をIS操縦者としてスカウトしに来ていたのだ。この時はまだ学校も卒業してない私に何故スカウトが来るのか、なぜ大人の女性では無く子供の私に来るのか、それを理解は出来なかったけどただ企業の人が出した条件に母さんの入院、治療の約束があったことでそんな事は考えもなかった

母さんに企業に入る事を言ったらものすごく反対された。どうしてこんなにも反対するのか分からなかったし聞いても教えてくれなかったけど、普段言わない我儘を言って母さんの反対を押し切って企業に入った。母さんの入院と治療を引き換えに

それから、私にとって苦痛の時間が始まった。

入った企業の名前はデュノア社。フランス内でIS関係の企業としては最大規模の会社だった。そこで私は”アイツ”と出会う事になる

”アイツ”とはデュノア社社長の事で、私の実の父親だったのだ。その事を知った切欠は初めて社長室に連れられて入った時、”アイツ”とその夫人の二人がいたのだが私はとりあえず挨拶をしようとしたら夫人が此方に来て、いきなり張り手をされた

何をされたのか分からずに呆然としていたら「この泥棒猫の娘が

「！！」と言われさらに暴行をされた。髪を捕まれ頬を叩かれ、床に叩きつけられて蹴られ踏みつけられた。何でこんな事をされるのか？何でこの人はこんなにも怒っているのか？様々な感情が入り乱れて抵抗する事は出来ずただ耐えるしかなかった

それからしばらくしてやっと怒りが収まったのか暴行は止まったが、私は傷だらけになっていた。其処までされているのに止めもしなかった”アイツ”はただこう言った

「お前はただ私の言う事を実行している。それ以外の事は考えるな。母親を助けたかったらな」

それだけ言った後、部下を呼んで私を社長室から連れ出した。そして簡単な治療を受けてからすぐにISの訓練が始まった。其処からの生活は地獄のようだった。朝早くからIS関係の勉強に、ISを使った訓練、開発途中の装備のテスト、ISの技術向上の特訓など殆ど訓練と勉強の日々だった。そして時間を見つけては、私のところに来ては暴言や暴力を振るってくる夫人

何で私の事を此処まで憎んでいるのか、暴言を聞く内に大体は理解できた。夫人と社長の間には子供が出来なかったのに、愛人である母さんとは子供ができた事に女として嫉妬をしていたらしい

だから自分には出来なかった子供を産むことが出来た母さんと、母さんの子供である私に嫉妬し、病人である母さんではなく都合の

いい手駒である私に暴行を加えていたのである

でも、私はその暴行に耐えた。もしここで私が耐えられなかったら母さんに危害が加えられるかもしれないかと思つたら、辛かったけど耐えることができた

そんな日々が数年続いた。私の心は傷つきボロボロになりかけてたけど母さんの事を思えばギリギリ耐えることができた。そんな時、世界で初めての”男性”のIS適合者が発見され、その数日後に二人目の”男性”適合者が発見された。一人目は世界最強の称号を持つ姉を持ち専用機はISの生みの親が作ったと噂され、二人目もイギリスの代表候補生との決闘で世界トップの大企業「世界電脳」が作り出した「八卦龍」を使用し第三世代のISを凌駕する性能を見せた

その頃、デュノア社は経営危機に直面していた。デュノア社が作り上げたISが第2世代止まりである事と第三世代の開発の難航、とIS関係の企業として後れを取り始めていた

そんな中で私は母さんの主治医から母さんの容態の事を聞かされていた

「・・・母さんが、し、ぬ？」

「今まで無理してきたツケが来たのでしょうか。ここ数年は容態は

安定していたのですが此処最近になって急に容態が悪化し今すぐにも手術をしなくては、命の保障は出来ません」

「そ、んな。だって母さんを治療してくれるって言ったのに何で！」

「落ち着いてください。何もすぐに死んでしまうとは言ってません。手術をすれば助かります」

「なら、すぐに手術を！！」

「ただ、問題がありまして・・・」

「問題？」

「この手術は特殊な機材や道具などを使いますのでかなりの金額がかかります。今、我が社が経営危機なのは分かりますね？今の状態では金銭的な問題ですぐには出来ないのです」

「・・・」

「まあ、今我が社が開発している第三世代の開発が成功すれば何とかなるとは思うのですがね・・・」

「・・・第三世代の開発に成功すれば母さんの手術が出来るの？」

「ええ、第三世代のISの開発の成功となれば国から援助金が出ますし、スポンサーも着きますからね」

「・・・そう、ですか。私急用を思い出しました。失礼します」

「そうですね」

「……」

「……」

主治医は社内電話を掛ける

「私です。……ええ、母親の事を出したらすぐに食いつきましたよ」

「……分かっています。彼女の母親は生かさず殺さずで……ええ。まだ彼女には働いてもらわないといけませんから」

「もうすぐそちらに着くと思いますので、私はこれで。失礼します」

それから私はIS学園に入学することになった。母さんの手術と引き換えに。母さんの傍を離れるのは辛かったけどでも私が成功しないと母さんが死んでしまう、そんな思いが私を突き動かしていた。

転入初日、私は1年1組に入る事となった。其処には目標である「八卦龍」の所持者である、鈴木キノが居るクラスであった。

運よく私は彼の席の隣に座る事ができ彼の顔を直で、見る事が出来たのであるが、正直恐かった。暗く濁った目つきと彼の巨体からの威圧感。どれをとってもかなりの恐怖感を感じる風貌だったけど、そんな感情は表に出す事は無く笑顔で話しかけた。

笑顔なのは、会社の中では常に笑顔でいると、”アイツ”が命令してきたからだ。私が辛い顔や苦悶の表情を浮かべていたら、私の事情を知らない一般の社員や外部の人間に怪しまれると言われたから、私はどんなに苦しく辛い事があっても笑うことしか許されなかったのだ。

その日の授業が終わり放課後になった時私は、彼にこの学園の事を案内して欲しい、と言う口上で彼に接触しようとしたのだが断られてしまった。露骨過ぎたのかもしれない。その後クラスの女子から彼の噂などを聞いたのだがすごかった。

「登校初日に学園教師を襲った」とか「裏の世界で過ごしてきた」

とか「人をいたぶるのが大好き」等など、彼の噂はとんでもない物ばかりだった。他にも先日有った決闘の事では「イギリスの代表候補生をボロボロになるまで追い詰めてからオーバーキルした」とか「特殊武装はB T兵器の完成系だった」と此方もいろいろと聞くことが出来た

そんな風に話しているとこのクラスの副担任である山田先生に呼ばれて教室から離れる事に。何の用かと思えば寮のカギの事だった。カギと言えば彼の部屋は何所だろうと聞いてみたら彼、寮生活ではなく学園の敷地内に一軒家がありそこで暮らしているらしい。寮ではなく一軒家。これには驚いた。が、そんな事が消し飛ぶような事をこの後言われたのである

「だから、「八卦球」のデータ取りはあきらめた方がいいですよ？」

この言葉を聞いた時、心臓が止まるかと思った。まだ初日なのにどうして私がデータを取りに来たことがばれているのが分からないかったが山田先生の話聞いてそれが分かった

山田先生は「世界電脳」の息が掛かった人間だったのだ

さすがは世界トップの企業の人間、私の、いやデュノア社が考えている事などお見通しのようなだった。でもたとえ忠告されたとしても私は止まる事は出来ない。私がやめてしまったら母さんを誰が守

るのか・・・

そして私は警告されたその日の内に彼の家に来ていた。相手も忠告したその日の内に彼の家にまで来るとは思いもよらなかっただろう。彼は私を見てなにやら思いつめたような顔をしたものの家に入ってくれた。私はそこで少しでもいいから何かデータを得る事は出来ないかと考えていたが彼も山田先生と同じでこんな考えが吹き飛ぶような事を言ってくれた

「……そうなんだろう？」 シャルル・ベルレアン”いや” シャルロット・デュノア”」

彼は私の偽名ではなく本名を言ったのである。しかもその後の会話で私がどのような目的で彼に接触してきたのかも全てお見通しのようにだった。そして私の性別の事も知っていたようだった

だから、私が取った行動は・・・

その後、事情が全てばれていた事と今まで溜まっていたストレスが表に出たのか取り乱してしまい泣いてしまったが彼はため息をつきながらも私が泣き止むまで優しく抱きしめてくれた

母さん以外で抱きしめた貰ったのは初めてで、さらにこの数年間やさしくしてもらった事ない私にとって彼がしたくれたこの行動はとても嬉しくて、とても暖かかった

しばらくして離して貰い御礼を言うと、彼はそっぽを向いて気にしていないなんて言っていたが顔が真っ赤だった。不謹慎だがそんな彼のしぐさがかわいいと思ってしまった

そんなやり取りをしたおかげか場の雰囲気明るくなったところ

で彼に私の言った「母さんが死んでしまう」と言った事を聞かれ、私は喋ってはいけないのだが彼に私の事情を話してしまった。何故かは分からない。彼がこの事を言い触らす様な人ではないと思ったからかもしれない

私の事情を話し終わった後、彼は私にとっても残酷な真実を教えてくださいました

「……シャルロット、お前は母親をダシにいい様に扱われていたって事だ」

その真実を知らされた時、私の心は折れてしまった。

今まで、辛く、苦しく、寂しい思いをしながらも母さんのため、母さんが元気になってくれるようにと必死に耐えてきたのに、デュノア社にとって、「アイツ」にとっては結局私なんて言いように扱える駒でしかなかったのである

そう思うと、もう笑うしかなかった。母さんを助けるためとデュノア社のために働いてきたのにデュノア社は、「アイツ」は私たちを助ける気なんて無かったんだ

だから、私は助けを求めた。もう辛いのも苦しいのも痛いのも嫌だと、母さんと一緒に過ごしたいと

その助けを求める言葉を言った事が私にとって人生の転機だったのかもしれない

助けを求める声は、聞き遂げられた

私の過去と今を引き換えに・・・

その後、私と母さんは「世界電脳」系列の病院に移った。母さんの病気を治すのと同時に私の体も治療する事となった。母さんとはともかく私は何故？と思ったがこの病院の女性の看護師さんに「女の子の体にこんな痣や傷があるなんて許せない」との事だった

私には顔を除く体中に痣や傷がたくさんあった。それは夫人の暴行で着いた物や実験や訓練で着いた物だった。私はこの痣や傷はもう消えない物だと思っていたが「世界電脳」の医療技術はすごく、一回の「注射」と軟膏を何日か塗り続けたら、体中に有った痣や傷が綺麗になくなっていった

綺麗になった体を見て、私は泣いてしまった。辛い事に耐える事は出来ても、私も女の子であり痣や傷がある体を見る事は辛かったからだ

綺麗になった体で母さんに会いに行ったら、母さんも病気はすで

に治っており前に見た時と比べると見違えるほどに元気になっていた

そして、母さんと話していたら、母さんに強く抱きしめられた。
そして泣いてもいいよと言われた。もう辛い事に我慢しなくてもいい、無理に笑わなくてもいいと

そうしたら、もう我慢する事は出来なくなり大声で母さんの胸の中で泣いてしまった

今まで溜め込んだ物全てを吐き出すように

そうしてしばらく母さんの胸の中で泣いた後、母さんから離れて
今までしてきた薄っぺらい笑顔ではなく本当の私の笑顔を母さんに見せてあげた

その後は母さんがキノに会いたいと言ってそれを止めるのが大変だった。まあ、いずれは二人で挨拶に行くけどね

ただ、母さんが何を思っているのかが恐い。キノに会ったらいきなり「娘をよろしくおねがいします」とか言いそうで・・・べ、べつにキノの事が嫌い、てわけじゃないけど、むしろ抱きしめてくれた時の感触が忘れられないとか・・・い、いや違うから、そうじゃないから／／／／

とにかく、キノには日を改めて挨拶に行くんだから。待っててね、キノ

かくして彼女の救いを求める声は届いた

彼女の過去と今を犠牲にして

されど彼女は後悔しない

なぜなら彼女には未来が残っているから

未来は自分自身の手で作りあげる物

ゆえに彼女は自分自身で未来を作る

それがいかなる結果を生むのか誰も分らない

閑話 シャルロット・デュノア改めシャルロット・ベルレアン（後書き）

作者は感想メタパニをうけた

作者は混乱している

ども。作者のマーシーです

前話の感想を読んでいるとこのまま突っ走れと言つ意見と

ヒロイン、鼻屑にしすぎじゃない？

と言つのが有りまして、前話を丸々書き換えてやろうかと思つたり
もしましたが

いろいろリアルでありまして吹っ切れました

もう、自重も鼻屑も何でもしてやる！との勢いで書いた今回のお話

シャルさんの話だったんですけども、あれゝおっかしいなゝ

歪んでるぞ、子のこの境遇

十歳当たりからISの勉強、特訓、訓練に夫人からの暴行、暴言とこれはヒドイ

最良のキャラだった筈なのに作品内では一時期体中に痣や傷跡などがあったという驚きの事実が！！

まあ、「世界電脳」の医療技術は世界一いいいいーで、どうとにもなるんですがね

さて、次回のお話でとりあえずクラス対抗戦の事を書けるはず、きつと

ただ、ここら辺から結構原作から離れていく気がするなゝ

すでに離れまくってるけどな！！

上空の戦い（前書き）

いよいよ、原作から離れていきますよ

まあ、すでにいろいろと離れていますかね

キノの性格を作者が把握できない

これは冥王の罠だ！！

いいえ、作者の頭が悪いせいです

上空の戦い

クラス対抗戦

各クラスから代表を選びISでのトーナメントで戦う学校行事である。俺のいる1年1組からは織斑一夏が代表として出場する事となっている

専用機持ちは一夏以外にもいるのだがシャルロットは、転入初日に一時休学し、ラウラは今回の行事には興味が無い様、と言うよりは一夏がどの程度の実力を持っているのか観察する為今回はおとなしくしているようだ。俺の場合、出ないのではなく出させてもらえない、と言う方が正しい

先の決闘で見た「八卦龍」の戦闘は現状の一年生では戦闘にもならないという事で学校側から今回の行事に参戦するのは控えてくれ、と頼まれた。まあ、俺もこういう行事には興味が無かったから別にいいのだが

クラス対抗戦が近づくにつれて一夏たちのグループはなにやら特訓をしているようだ。ご苦労な事だ。なにやら2組に転入してきた中国の代表候補生と揉めていた様だが俺には関係は無いからどうでもいい事だ

そういえば転入初日に休学したシャルロットの事だが近い内に復学する事となっている。その時に正式に名前を「シャルル・ベルレアン」から「シャルロット・ベルレアン」に変え、性別も”女性”として再入学という形で復学する事になっている

女性が男装して入学した、と言う事実はスポンサーであるデュノア社が母親を人質に取り強制しフランス政府の一部の役人と裏取引を行い男性適合者である俺と一夏のデータを盗ませようとした、という事にして世間の目が彼女から、彼女に悪事を強要させたデュノア社社長に向くように仕向けておいた

今の時代、女性に対する犯罪は被害者である女性より加害者である男性の方に向きやすい事を利用してもらった。まあ、どんな事件でも被害者より加害者に目が向くのは変わらないのだが…

で、復学する時の肩書きはフランス代表候補生ではなく、「世界電腦」が開発した新機軸の機体シリーズである通称「鉄神」のテストパイロットとして復学してもらう事になった

「鉄神」

「世界電腦」の科学者である木原マサキが考え出した機体であり、マサキいわく「宇宙開発を目的として開発されたのに、肌が見えるのはどうかと思う。いくらシールドエネルギーで守られているとは言え肌が見えるなんておかしいだろう」との事でこの「鉄神」シリーズは全身装甲が基準となっている

理由としては全身装甲にする事で宇宙空間で人体に有害な放射線等や強い太陽光を遮断し、高速で飛来するスペースデブリなどから体を守り、エネルギー消費を抑える役割も果たすためである（スペースデブリは静止軌道では秒速3Km/sというかなりの高速で飛

来している)

この事から、「鉄神」シリーズに使用されている金属は「八卦龍」に使用されている金属より多少強度が低い金属を使用されているがそれでも第三世代の兵装では殆ど傷を付ける事が出来ないほどの強度を持っている

さらにこの「鉄神」シリーズは完全な宇宙開発専用機として開発されたようで戦闘能力は基本無いのである。ただし基本性能は第三世代のISよりも高くパイロットと後付の装備しだいで第三世代をはるかに上回る性能を発揮する事が出来る

と、この説明ではISより優れているように聞こえはする物の実際にはまだ量産にはコストや資材、機動実験等の問題がまだたくさん残っているので今はシャルロット用の一機しか生産されてはいない

ちなみにこの「鉄神」シリーズ、一応ISコアを搭載しているが篠ノ之束作ではなく「世界電脳」作のISコアを搭載している。さらにISコアを作成できるという事を篠ノ之束にばれない様に「世界電脳」が所持しているISコアと全く同じ作りをして搭載し、オリジナルのISコアはコア・ネットワークを完全に遮断する特殊な設備を使用し篠ノ之束にばれないようにしている。ついでに「世界電脳」作のISコアには篠ノ之束の命令に対して反応拒否できるように仕上げられている

ISコアを解析した結果、どうやらISコアには絶対命令権と言う物が存在しそれを使用した場合、例え専用機持ちのISコアといえどその乗り手を乗れなくする事ができるようだ

ただこの絶対命令権はそうそう使える物ではなく使用条件があり

無理に使つと使われたISコアが破損する事があるようだ

だから「八卦龍」と「鉄神」シリーズのISコアにはその絶対命令権は存在しないので篠ノ之束がこの機体を使用不可能にする事は出来ないのである

あとシャルロット専用機として作られた「鉄神」の名前は「Xダイバー」と言う名前だった

しかも特殊システムとして「超次元システム」なるものが搭載されていた

マサキくううん！！！！やつぱりお前冥王じゃないだろうなあ
あああ！！！！

この「超次元システム」、GZに搭載されている「次元連結システム」の劣化システムのような物であり、「次元連結システム」のような反則的な性能こそ無いもののISコアに搭載されている武器の量子化を利用し相対性理論を応用したエネルギー変換機能を持っているらしい

つまり量子化した物質をエネルギーに変換し使用する事が出来る

という事である

これによりISにおけるエネルギー不足を補うどころか有り余る程のエネルギーを確保出来るようになり実質、エネルギー切れなどは起こさないと言う事である

だから「Xダイバー」の後付装備の殆どは高威力の装備が殆どである。さらに「八卦球」の空間制御システムを応用し常に全身を覆うようなバリアを任意で発生させる事ができその強度は第三世代の兵装では至近距離で集中砲火でもしない限り突破は不可能と言うぐらいの強度を誇る

無尽蔵とまではいかないが膨大な量のエネルギーを使用した高威力の攻撃を尽きる事無く使用し、機動力も第三世代をはるかに上回る性能で縦横無尽に行動し、360度全方位からの波状攻撃を可能としたこの「Xダイバー」、何処かで聞いたような気がしたと思ったらこの機体、GZが最初俺の専用機として作ろうとした機体とそっくりなのである

さすがに時間停止機能は無かったがそれ以外はほぼ同じなのである。此処まで似ているとなると偶然では済まされないような気がしてきた

まさか、木原マサキはGZが作り上げた生体端末とかじゃないだろうな……

そして、クラス対抗戦が明日になった日の夜、GZから緊急報告が来た

何事かと思い、報告を聞いてみるとあの天災が新たにISコアを作成しそれを使用して無人機を作り上げ明日のクラス対抗戦に乱入させる、との事だった

理由までは分からなかったが、俺がいて「世界電脳」が作り上げたこの学園のに容易く進入できると思ったら大間違いだ。ついでにあの天災には痛い目に会ってもらおう。世界が自分の思い通りに動かせるなどと思い上がっている愚者に思い知らせてやる

世界は、お前の思い通りには動かないという事を

クラ対抗戦当日、IS学園の上空の雲の中に俺はいた。この雲はGZのデットロフーンを応用して作り上げた特殊な雲で俺が解除しない限りずっと其処にあり続けるようにしている

今の俺は「八卦龍」では無くGZ、つまりグレートゼオライマー

を使用している。なぜ「八卦龍」では無くGZを使用しているかというと、彼女の思惑の邪魔をするためにはこの姿が一番効果的だからだ。かつて彼女が初めて作り上げたIS「白騎士」、それを完膚なきまでに叩き潰したこのGZの姿で今度は彼女が作りあげた無人機を今度は完全に破壊しつつくす

自分が作り上げた物が完膚なきまでに破壊され、自分はそれを見ているしか出来ない。彼女はISコアに対して何処か自分の子供の様に扱っているようだからこれからする事は自分の子供を殺され、それを見せつけられる、という事になる

彼女にも肉親を失った悲しみを思い知らせてやるよ

そしてクラス対抗戦が始まって少しして一夏の試合が始まった頃、無人機は来た。この雲に隠れて一気にアリーナ内に乱入しようとしているようだがそうはさせない。ここでお前は消えてもらう。彼女に悲しみを味わってもらうために

雲の中、アリーナの真上で止まり下にあるアリーナに向かって急降下しようとした無人機に真下から一気に近づき殴り上げてやった

その一撃で無人機のセンサーや装甲に痺が入ったが気にせず一気に畳み掛けた。無人機もセンサーを使いこちらを補足して攻撃しようとしたがこの雲の中視界は無いに等しく、雲自体がGZによって作られた特殊な雲でありたかだか無人機に搭載されたセンサー程

度ではGZは見つける事などではしない

其処からさらに何回も殴っていき、無人機がボロボロになってしまった時、不利を悟ったのか此処から離脱しようとしたようだがそんな事はさせない。離脱しようとした無人機の後ろから頭部を掴み持ち上げ、空いた手で四肢を？いでいった。最後に残った胴体を雲のさらに上空にまでもって行き周りに雲が無いところで次元連結砲で粉々に粉碎した。ISコアごと塵一つ残さず

最後に雲が無いところまで持っていたのはGZの姿をあえて見せる事により彼女の注意をGZに向ける事にある。「世界電脳」が作り上げた「八卦龍」その力を見て興味を持ってしまったようなので其処から興味をそらすために今回GZの姿を見せたのである

さて、これで無人機による襲撃は無くなった。アリーナの方も一夏の試合も終ったようだ。さっさと戻るか

とある秘密ラボ

「フフン、いつくんの試合はもうすぐかな」

大小様々なモニターを使い様々な数式を入力している女性が一人

「この子を使って、いつくんを、目立たせるのだ」

歌うように独り言を言う女性

「いい感じにアリーナの上に雲が出てるし、雲に隠れて一気に乱入だ」

そうして無人機に指令を出そうとした瞬間、全てのモニターにノイズが走る

「……え」

呆けるのも一瞬で何が起きたのかと調べるも

「な、何で私の指示が受け付けないの……!」

そう、ノイズが走った後彼女からの指示が一切届かなくなっていた

「なんで、なんで私が作ったこの子に指示が出来ないの!!!」

彼女が懸命に調べるも、どうやっても此方からの指示が届かない

そう、10年前のあの時と同じように

「……まさか」

彼女の顔から血の気が引いていく

「そ、そんな事になんかせせない!!!させてたまるか!!!」

さらに高速で指を動かし調べるも、何も変わらなかった

そうしているうちに、一つ、また一つとモニターの画像が消えていく

「……っこれは使いたくなかったけど」

そう言っただけが出たのは絶対命令権

ISコアである以上絶対に命令を聞かせることの出来る権利

これを使い何とか無人機を離脱させようとしたが

「ま、まって、やめて」

離脱させようとした無人機が後ろから捕まれ、四肢を？がれていく

「や、めて。やめて。それ以上は……」

四肢を？がれ、センサーも装甲もボロボロになった状態にされる無人機

その状態で一気に雲の上空まで連れて行かれ無人機が最後に写した画像には

あの時、白騎士を追い詰めたロボットが写っていた

それを最後に画像が消え、ISコアの反応も消える

反応が消えるという事は、”完全に破壊された”という事でありつまり

彼女が生み出した子が”死んだ”という事であった

それは彼女にとって何よりも受け入れがたい事実であつた

「う、そ。うそだよ。あの子が死んだ？」

「うそだ、うそだうそだうそだうそだああああああ」

「私の子供が死ぬなんてうそだあああああああああ」

そう叫びながら機械を弄り調べるも分かったのはISSコアが消滅したという事実だけだった

「そ、んな。いや、いやだ。あの子が死んだなんてそんな事……」

⋮
⋮
⋮
⋮

そう呟く彼女の目に映ったのは無人機が写した最後の画像

そう、かつて白騎士を追い詰め、彼女の親友を殺しかけたあのロボットの画像だった

「フフフフ」

「フフ、アハハハ」

「アハハハハハハハハハハ！！！」

その画像を見てから急に笑い出す彼女

「ふざけるなああああ！！！！！！」

「なんで、なんで私の邪魔をするの!!」

「皆、私の思うように動いていればいいのに、なんで邪魔をするのよおおおー!!」

笑ったかと思えば急に怒り、叫びだす彼女

「……………ごめん、ごめんなさい」

「許して、こんなママでごめんなさい」

怒り、叫びだした後床に座り込み謝りだす

「ごめんなさい、ごめんなさい、辛い思いをさせてごめんなさい」

かくして愚者は思い知る

世界が自分の思い通りになると過信したその思いは

自分の子供を殺す結果となって帰ってきた

だが、それですらまだ始まりにしか過ぎない

これから先に何が起こるのかはわからない

ただ分かるのは、彼女の世界は破壊されるといふ事だけである

上空の戦い（後書き）

クラス対抗戦で起きるはずだった無人機の乱入事件は削除されました

こんにちは、作者のマーシィーです

無人機、ログアウト～な今回のお話

いやねえ、GZ様が見守るIS学園に襲撃を掛けようなんて不可能ですよ

仮に進入できたとしても「世界電腦」産のコンピューターにハックかますなんてさらに不可能ですよ

そんなこんなで無人機君には消えてもらいました。ナムウ～

今回はアンケートであつた山田先生か書いて見たかつたキノの日常編になるかと思っています

いろいろ矛盾等ありますがこれからもよろしく願います

閑話 それぞれの過去 山田真耶（前書き）

アンケートで見事一位を取った山田先生のお話

なぜ此処まで凛々しくエリートになったのか？

それを書いてみます

作者も想像してなかったんだよね此処まで凛々しくなるとは……

閑話 それぞれの過去 山田真耶

えっと、はじめまして。私「山田 真耶」といいます。

職業はIS学園の教師をしています。教師をしているとは言っても正確には派遣ですけどね。

派遣元は今では世界中の人々が一度は聞いた事のある大企業「世界電脳」にある人材派遣組織通称「ACE」で、私は其処からIS学園に派遣されている、という事です。

ですが、より詳しく言いますとIS学園の設備運営、資材搬入、警備その他もろもろ殆どが「世界電脳」の息が掛かった組織、企業の人間が関わっているので派遣、と言っているのかちよつと悩みますね。

でわ、なぜ私が世界トップの大企業「世界電脳」の人材派遣組織「ACE」に所属しているのかお話ししましょう。

切欠は私が高校生の時でした。その頃世間では俗に言う「白騎士事件」の事で持ちきりでした。正確には「白騎士事件」で初めて扱われた兵器、ISの事で。

IS、正式名称はインフィニット・ストラトス、と言い宇宙開発を目的とされたマルチフォーム・スーツでありながら、皮肉にも「白騎士事件」のせいで、宇宙開発よりも軍事目的として使用される事となってしまいました。

そしてこのISは”女性”しか動かすことが出来なかったのです。

そのせいか世間は少しづつ女尊男卑の世界へと変わっていく事となったのです。そんな中、私は政府が行った適性検査で適正ランクAを出したのです。

その時は正直信じられませんでした。私は身体能力がこれと言って優れているわけではなく成績も優秀ではなかったなのでそんな私が評価ランクでAと言う高い評価を出すなんて思ってもいなかったからです。

でも信じられない反面、優越感を感じてしまった事も事実でした。適正試験を受けて見ても殆どの人がランクD、もしくはCの中私はAを出したのだから。

その中には同じ高校の中で私より運動が出来る人や、成績がいい人もいた事が拍車をかけたのです。

その頃の私は他の人達と比べ何かしら誇れるような物を持つてはなくて背も低く、童顔。胸も無くてよく、”お子様高校生”などと言われからかわれていました。

いじめ、とかではなく友達同士がじゃれあうように言っていた言葉でしたが私はその言葉を言われるたびに心の何所かで言いようも無い劣等感を感じていました。

だから、適正検査で高ランクを出した事に優越感を感じてしまいました。

でも、そんな優越感などすぐに打ちのめされました。所詮ランクAとは言ってもそれは適正の話であり、実際に動かして見る事とは別の話でした。私は政府が行った適正検査で見つけたランクが一定以上の人達で行った合同試験でランクAを出しておきながら総合順位では下から数えた方が早い順位でした。

そうですね、適正値が高いと言っても結局は動かすのは自分自身。部活動をしていたわけでもなく運動神経がいいわけでもない私

が、ISを上手く扱えるわけがなかったのです。

そうして私は合同試験で最下位に近かった私は政府のIS搭乗者を決める試験に落ち、自宅に戻る事となったのですが、その足取りは重く遅かったです。

学校で駄目な自分より何でも出来るような人達より高い適正値を出した事に浮かれ、優越感を得てしまった私は、実際にISを動かして見て結局ISに乗れたとしても私は駄目なままと言う事を実感させられたのです。

そして気が付いたら私は何処かの公園で一人ベンチで座っていました。体が無意識の内に休める所を探したせいかも知れません。ただ、その無意識の行動が私の人生を大きく変える事になるとは思っていませんでした。

しばらく、そのベンチで休んでいると複数の男性が声をかけて来ました。

「お譲ちゃん、どうしたんだ。こんな所で？」

「え？」

「こんな所で一人で居ないでさ、お兄さん達と遊ばない？楽しいよきつと」

「い、いえ。その結構です」

「まあ、そう硬い事言わないでさ」

そういつて男の人達は私の返事を無視して腕を掴み何処かに連れ

て行こうとしました。

その時の私は試験の事もあり恐怖で声が出せず碌な抵抗も出来ずに連れて行かれそうになりました。

その時です――

「その子から手を離しなさい!!」

――私の師匠に出会ったのは

「あん？なんだよ、何か文句でもあるのかよ」

「その子から手を離してもらえるかしら？嫌がつてるわよその子」

「あんたには関係のない事だろ」

「それでもないわ。嫌がる女の子を無理やり連れて行こうとする所を見てしまったら止めるのが大人の役目よ」

「ケツ、何が大人の役目だ。あんた一人でこの人数どうにかできるのかよ」

「群れないと何も出来ないお子様がよく言うわね」

「このクソアマ!!皆やつちまえ!!」

「…フウ、最近の子供は短気ね」

彼女は周りを囲まれているのに怯えることなく静かに佇んでいます。其処からは驚きの連続でした。

たった一人で、しかも私と同じ女性が複数の男性相手に一撃も貰わずに一方的に戦っていたのです。その姿は私にとってとてもまぶしく思えました。

私のようなお子様体系ではなくモデルのような体系に女優のような美人顔。さらに男性を複数相手に一歩も引かず逆に一方的に戦う姿に、私は嫉妬してしまつたのです。

見当違いもいい所なのは分かっていました。彼女と私は違う。そんな当たり前のことなのに私は嫉妬せずにはいられませんでした。

そうこうしている内に男性達を追い払つた彼女は私に声を掛けてくれました。

「大丈夫だった？怪我は無い」

「えっと、はい。大丈夫です」

「そう、よかったわ」

「その、えっと……」

「話したい事が有る様だけど、場所を変えましょうか。此処じゃあ落ち着いて話も出来そうに無いしね」

そう言い彼女に連れて来られたのは、とても落ち着いた雰囲気のある喫茶店でした。

「私はブレンドコーヒーを頼むけど、貴方は？」

「え！その私は……」

「遠慮しなくてもいいわよ。此処はお姉さんの驕りだから」

「その、じゃあ、オレンジジュースで」

注文が終わった後、少し無言の時間が有りましたが、先に彼女から話しかけて来ました。

「そういえばまだ自己紹介して無かったわね。私の名前はシ・タウ。貴方の名前は？」

「えっと、山田真耶っていいいます」

「真耶ね、いい名前ね」

そう言いながら微笑む彼女の顔は同姓である私でも見ほれそうでした

「？どうかしたかしら」

「い、いえ。別に、何でも無い、です」

「そう」

「あ、あの、さっきはありがとうございました。助けていただいて」

「いいのよ。子供を助けるのは大人の役目だから」

「……私高校生ですけど」

「え？そ、そうだったの。ごめんさい」

「いえ、慣れてますから」

少し気まずい雰囲気になったのを変える様に彼女、いいえタウさんは言いました。

「コホン、山田さんは「真耶でいいです」では真耶はどうしてあそこに？あそこはあまり人通りが少ない所だった筈だけど」

「その……」

「言いづらい事だったら無理に言わなくていいわよ」

「いえ、そんな事はないんです」

そして、私はタウさんに話しました。学校の事、適正検査での事、合同試験で落ちた事、そして劣等感と優越感の事も。

「……そう。いろいろあったのね」

「すみません。初対面のタウさんにこんな事話してしまって」

「ううん。いいのよ。私にもそんな事があったから」

「タウさんも、ですか」

私は信じられませんでした。私よりずっと優れていると思っていたタウさんが私と同じような事を体験しているなんて思えませんでした。

「私には一人姉がいるんだけどね、私と同じ顔なんだけどそれ以外がぜんぜん違ってね」

そう切り出しながらタウさんは話を始めました。

タウさんにはシ・アエンという姉がいるそうなのですが、タウさん曰く「姉さんは常に私の一歩先をいく人だった」との事でタウさんはその事に劣等感を抱いていたようです。

同じ事を同じ時間してもアエンさんはタウさんより上手に出来、さらにその事を鼻にかける事無く常にタウさんの事を心配していてその事がタウさんにとってはとても心苦しい事だったようです。

「あの頃の私は姉さんの全てに対して嫉妬していたからね」

と、笑いながら語るタウさん。では何故そんな風に笑って話せるのか、今度はそれを話してもらいました。

姉に対して一方的な嫉妬をしていたタウさん。そんな思いがある仕事でミスを引き起こしてしまったのです。

その仕事は本来アエンさんが請けるはずだったのをタウさんが無理やり引き受けて現場に行き仕事自体は成功に終わったのですが、その代償としてアエンさんが大怪我を負う事となったのです。

どうして、大怪我を負う事となったのは教えてもらえませんでしたか、タウさん曰くアエンさんが負う事となった大怪我は本来受ける事は無くタウさんが無理をしたせいで負う事となった、とだけ教えてくれました。

「あの時の私は姉さんに負けたくない、ただそれだけで行動して周りの事なんて気にもしてなかった。姉さんの事もね」

そういうタウさんの表情はとても悲しそうでした。その後アエんさんの意識が戻るまでタウさんは自負の念に襲われて酷い有様だったようです。そしてアエんさんの意識が戻った後タウさんはアエんさんにこういったそうです。

「どうして、私なんかを庇ったの！」

と、そういうタウさんにアエんさんは

「姉が妹を庇う理由が要るの？」

そう返したそうです。それからタウさんはアエんさんと口喧嘩を始めてしまったのです。

「その時の姉さんの言葉にまで、私は嫉妬してしまったのよ。」
「ああ、私のせいで大怪我をしたのにまだ私の心配が出来るなんて」
「って」

そう言いながら苦笑いをしていました。でもタウさんはそれが切欠だった、と言います。

「私のせいで姉さんが大怪我をして、その事で姉さんと初めてお互いの本音をぶつけ合う事が出来たのよ。不謹慎だけどね」

其処まで話して、お互いに注文した飲み物を一口。

「……フウ。それからね。お互いの蟠りが無くなっていったのは。少しづつだったけど」

「そんな事が、有ったんですか」

「ええ。でも今は姉さんが私を頼ってくれてるのよ」

「！そうなんですか」

「そうよ。ISって知ってるでしょ。姉さんより私の方が適正ランクも実働実験の出来も上だったからその事で姉さんにいろいろ聞かれるのよ。此処はどうすればいいか、どう動けばいいかって」

「タウさんもISを乗れるんですか」

「そうよ。こう見えても私が勤めている会社では一番の乗り手よ」

「……その、タウさん」

「何かしら？」

「今でも時折思います。この時、勇気出した事こそが私の人生を変える切欠だったと。」

「私に、私にISの操縦の仕方を教えてくれませんか！」

その後、私はタウさんに必死にお願いして何とか少しだけISの操縦を教えてもらえる事になって、後日また会う約束をして別れました。

そして、数日後に指定された場所に言ってみると、そこは今の時代誰もが一度は聞いた事のある大企業「世界電脳」のビルでした。

私はその場で呆けていると、タウさんがビジネススーツで現れ中に入れてもらいました。

そしてそのままどんどん奥のフロアに行くタウさんについていく私。此処まで来て私はとてもビビっていました。企業の人とは聞いていましたがまさか、「世界電脳」の人とは思いませんでした。そして着いた場所はとても大きなフロアでした。

「さあ、真耶さん。ここで貴方のISの操縦を見てあげる」

「……………」

「真耶さん？」

「はいっ！な、何でしょうか」

「どうかしたの？体調でも悪いのかしら」

「い、いえ。そうじゃなくて。タ、タウさんって「世界電脳」の

人だったんですか？」

「ええそうよ。正確には「世界電腦」所属対IS機動実験担当操縦者兼人材派遣組織「ACE」所属のシ・タウよ。改めてよろしくね。山田真耶さん」

「……………」

「だから、どうしたの？」

「いえ、タウさんってそんなにすごい人だったんだなって」

「フフ、おだててもやさしくはしないわよ」

「そんなつもりじゃ…」

「分かってるわよ。さ、無駄話はここまでにして早速始めましょう」

「はい。お願いします」

そして、タウさんに見てもらいながらISの機動訓練を始めました。タウさんの指示は的確で以前した合同試験での時とはまるで別人のような動きが来ました。

そんな風にタウさんの指示の元数時間、機動訓練をして時間になりISから降りてタウさんから言われた言葉は

「山田真耶さん、「世界電腦」に就職しないかしら」

「ふえ？」

「指示があつたとはいえたつた数時間でこれほど上達するとは思わなかつたわ。貴方のような人材をこのまま見捨てておくなんて出来ないのよ」

「あ、あのタウさん？」

「大丈夫、書類手続きは全部此方で引き受けるから、貴方は何も心配しないで私に身をゆだねればいいから」

「タ、タウさん！？」

「大丈夫よ、大丈夫。何も恐い事なんてしないから」

そういうタウさんの顔は恐かったです。でもそんな時

「何をしてるのよ、タウ」

「ね、姉さん！！」

タウさんとそっくりの顔をした人がタウさんを止めてくれました。

「貴方がなにやら一般人を連れてきた、って聞いて来てみれば何をしてるのよ貴方」

「違うのよ姉さん。私は彼女をスカウトしようとしただけよ」

「彼女を？」

「ええ。彼女のIS操縦技量は私と同格、もしくはそれ以上かも

知れないのよ」

「本当なのそれは？貴方と同格かそれ以上って」

「ええ。このデータを見てみて」

そう言いながら二人はなにやらモニターを見てあーだこーだと言っていました。そうしてしばらくして

「山田、真耶さんと言ったかしら」

「は、はい。そうですけど」

「はじめまして、私は彼女、シ・タウの姉のシ・アエンと言います」

「はじめまして、私は山田真耶と言います」

「私の妹のタウが言った通り真耶さん。」「世界電腦」に就職しませんか？」

アエンさんもタウさんと同じく私をスカウトしてきました。

「えっと、どうしてそんな話になるんですか？私にはちょっと分かりかねるんですが」

「そうね、まずは其処から話しましょう」

「知つての通り「世界電腦」は世界規模での事業を展開しています」

「でも、ISと言う分野はまだ世間に出て日が浅く、まだまだ様々な課題があり、それを無くすには優秀なIS乗りが必要となります」

「タウは今の所「世界電脳」で一番のIS乗りとなっていますが正確にはタウ以外のIS乗りでタウほどの操縦技能を持っている人材がいなからそういう風に言われているだけなの」

「そんな中、タウがつれて来た貴方。そう真耶さん。貴方はタウが認めるほどのIS操縦技量の持ち主なの」

「今現在、優秀なIS乗りがタウしかない現状では真耶さん。貴方は喉から手が出るほど此方としては欲しい人材なんです」

「無論、強制などはしません。「世界電脳」に所属するという事、それは生半端な覚悟や決意ではやっていく事は出来ない場所です。「世界電脳」に所属するという事は「世界電脳」と言う看板を背負っていくという事」

「貴方の一つのミスが会社に大きな損害を与える事だつて有りえる所です。もちろん私たちも」

其処まで言つてアエンさんは私の顔を正面から見つめ言いました。

「ですから、真耶さんこの話はよく考えたうえで返事をください。半端な覚悟では私たちもそして貴方にも迷惑な事ですから」

そう聞いた私でしたが、私の心はすでに決まっていました。

「あの、タウさん、アエンさん」

「なに？」

「なにかしら？」

「私、「世界電脳」に就職します！！」

私はそう言い放ちました。

「……真耶さん。私の話を聞いていましたか？」

「はい。聞いてうえで私は就職したいんです」

「理由を、聞かせてもらえるかしら」

「……私はこれまで私には何も出来ないと思い込んでいました。周りの人達のように成績がよかった訳でも無く、運動神経が良かったという事も有りませんでした」

「そんな中ISが登場して、その適正検査でランクAがでた時、私は優越感に浸ってしまいました。」私は周りの人達が出来ない事をできたんだ”って」

「でもそんな優越感はすぐに無くなってしまいました。政府の合同試験でISを動かして見た時、私はぜんぜん上手く動かす事ができなくて、試験に落ちてしまい、私は結局何も出来ない駄目な人間なんだって思いました」

「でも、そんな時にタウさんに出会ったんです。」

「私に？」

「はい、タウさんと初めて出会った時、私は思っただけです。」同じ女性なのにこんなすごい人が居るなんて”って”

「それから、話を聞いてもらって、こうしてISの機動訓練を見てもらってそれでタウさんに私の事を褒めてもらって、さらに「世界電脳」に入らないかって言われて、それで決めました」

「私が憧れたタウさんと一緒に仕事がしたい、タウさんみたいな女性になりたいって」

そこまで一気に話してから私は二人の顔を見ながら言いました。

「だから、私は「世界電脳」に就職したいんです」

其処まで言った後二人は顔を見合わせて、なにやら話し合いました。

（どうするの、タウ。あの子貴方にかなりの憧れを抱いてるようだけど）

（そう見たいね。私も驚きよ姉さん。あそこまで憧れるような事をした覚えは無いのだけど）

（でも、いい事じゃない。貴方に妹分が出来るんだから）

（妹分ってまだ彼女を入社させるなんて言ってないわよ）

（でも、タウ貴方が先に言ったのよ。この子を入社させましょ
うって言ったのは）

（そうだけど……）

（それに今言った事が本気かどうかは、これから確かめていけば
いいし最初は仮社員扱いでいいじゃない）

（そう、ね。いきなり正社員扱いするわけじゃないんだからこれ
から確かめればいいかしら）

（フフ、結局は乗り気なのねタウ）

（いいじゃない、別に）

（そう。じゃ、がんばって面倒を見てあげるのよ、タウ姉さん）

（ちょ、姉さん！！）

なにやら、揉めている様に見えましたがアエンさんが此方向き

「貴方の意思は分かりました。よって「世界電脳」は貴方を歓迎
します」

「じゃあ……」

「とは言っても最初は仮社員扱いですけどね」

「うっ、そうですよね」

「大丈夫よ、タウが貴方の事をシツカリと見たくれるから」

「タウさん、本当ですか!！」

「え、ええ。とりあえずはね」

「フフ、シツカリと面倒を見るのよ。タウ姉さん」

「もう、姉さんなに言って……」

「タ、タウ姉さん……そう呼んじゃ駄目ですか」

「真耶さん!？」

「駄目、でしょうか」

私は一人っ子だったので姉妹に憧れていて、タウさんのような姉さんが欲しかったのでそう言ってみたのですが

「まあ、いいわよ／＼」

どうやら私に姉さんが出来たようです。

「さてと、とりあえず今日の所はここまでにして詳しい事は後日シツカリと話しましょうか」

「はい!」

「では私はこれで失礼するわ」

「姉さん何処かに行くの？」

「ええ、仕事の報告と真耶さんの報告もね」

そう言いながらアエンさんは出て行っていました。

「さてと、今日の所はここまでにして来週から本格的に訓練を始めましょうか」

「来週から、ですか？」

「そうよ。だって貴方まだ高校生でしょう。学校も有るし、親御さんに説明も必要だからね」

「そうですね。まだ私高校生でしたね」

「まあ、覚悟しなさい。私の特訓は生半端な覚悟ではすぐに根を上げるからね」

「大丈夫です。私負けません！！」

「フフ、期待してるわ」

「はい！」

そしてその時から私とタウ姉さんとの特訓の日々が始まったのです。

それはとても厳しく辛く大変な日々でした。ISの操縦訓練に基本知識に整備調整の仕方、さらにIS以外の基本的なマナーなども叩き込まれました。なぜか？それは私が「世界電脳」の社員になる

からです。

「世界電脳」の正社員になったのなら、基本マナーはもちろんの事様々な知識、常識など世界トップの大企業の社員に相応しい知識が求められるからです。

さらに、基本的な体力、運動神経を鍛えるためと言つて、格闘術も叩き込まれました。この頃は常に打ち身や擦り傷、打撲などが絶えなかったです。

でも、私は最後までやり遂げて見せました。ここで逃げてしまつたら私は駄目なままで終つてしまつたでしょうし、何より私をスカウトして、面倒を見てくれたタウさんに顔が向けれなくなつてしまいます。

そして、高校を卒業と同時に私は正式に「世界電脳」の社員として就職しました。

職名は「世界電脳」所属対IS機動実験正式操縦者兼人材派遣組織「ACE」所属、との事でした。

ISの機動実験だけだと思つていたのですがタウさん曰く「真耶はIS関係以外の職種でも十分に働けるだけの技能を持っているから「ACE」の方にも登録しておいたわ」との事です。

そうして「世界電脳」の社員として何年かした時、IS学園への長期出張を言い渡されました。

IS学園、私にとつては別段思ふ事は無かつたのですが、世界初の男性IS適合者が現れ、二人目の男性適合者が現れた時、私の人生は新たな転機を迎えたようです。

閑話 それぞれの過去 山田真耶（後書き）

まずはこの言葉を言おう

すみませんでした――

やっちゃまった作者のマーシーです

山田先生の師匠はまさかのシ姉妹

うん、考えも無く書いたら出てきてしまったんだよ

ただ、これだけは言わせて欲しい

ロリボディの山田先生が上目遣いで「お姉さん」と言う姿を想像して欲しい

イイねー！すくイイよー！

会話と謎（前書き）

更新が遅れてすみません。

なかなかネタが浮かんでこないんですね。スランプ？

いや、スランプにはまだ早い。まだいける！

会話と謎

俺がアリーナ上空で無人機を粉碎した頃、アリーナでは一組代表の一夏と二組代表の鈴音との試合が終っていた。

結果は二組代表の鈴音が勝った。まあ、妥当なところか。鈴音は仮にも国家の代表候補生で専用機持ち。いくら一夏が専用機を持っていたとしても相手が悪すぎた。ISに乗り始めてまだ数ヶ月と立っていない素人が国の代表候補生に勝てるわけが無い。

一夏の専用機には零落白夜と言う単一機能がついているのだが、これは一夏の専用機である白式の専用武器雪片式型が変形し、エネルギーの刃を形成し切った相手のエネルギー全てを消滅させるという、エネルギーを多用するISにとっては一撃必殺となる能力なのだが、それだけである。

距離を取ってしまったえばそれだけで、能力は無意味な物となるし百式には遠距離攻撃用の武器は無くつまり接近しないといけないのだが、たかだか一ヶ月ほどISに乗っただけの素人の軌道など国家代表候補生には通用しなかったようだ。

試合の後、一夏と鈴音がなにやら揉めていたようだが関係ない事だ。俺はクラス対抗戦に興味は無いしどの道学校側から出場を控えるように頼まれてたから、どうでもいいのだ。

この後は特に何も無かったはずだから、家に帰って寝よう。

クラス対抗戦があった週の休日。特にする事もなくゆっくり過ごすと考えていたら、シャルロットから電話が来た。

「……はい、鈴木です」

「えっと、キノかな。シャルロットだけど」

「シャルロットか。どうした？」

「そのね、私の母さんの事なんだけど」

「母親がどうした？」

「その、キノに会いたいって言ってるんだ。治療の事とかのお礼が言いたいって」

「治療の事か……別に気になくていいのに」

「そうはいかないよ！私達にとっては大事な事だったんだから」

「まあ、そうか。で何時行けばいい？」

「出来れば早い内がいいかな。私ももう、「世界電脳」のIS乗りだからね」

「そういえばそうだったな。確か「Xダイバー」だったか」

「うん。とは言ってもまだ一次移行をしたただけだね」

「そうか。まだ一次移行だけか」

「そう。何でも一次移行の後に特殊な操作がいるとか何とかで、まだ一回しか乗ってないんだ」

「……まあ、積もる話は後でしょうか。とりあえず今日明日はあいているが」

「そうだね。話はまたしょうか。じゃあ明日の十時頃に母さんがいる病院の前で待ち合わせしょうか？それでいいかな」

「分かった。明日の十時に病院前だな」

「うん」

「じゃあ、明日また」

「じゃあ、また明日うね」

そういつて電話を切る。

「明日か……何着てこう」

次の日になり十時十分前に待ち合わせ場所の病院前に着いた。

なにやら目線を感じるがいつもの事と気にせず待っている

「キノ」

と俺を呼ぶ声がしたから振り向いて見るとシャルロットがいた。

「待たせちゃったかな？」

「……いや、少し前に来たから気にしてない」

「そっか。じゃあ早速行こうか」

「そうだな」

二人でシャルロットの母親が居る病室まで歩いていく。

「シャルロットの母親はどんな人なんだ？」

そんな事を聞いてみた。

「母さん？母さんはそうだね、少しお茶目だけどシッカリとした人だよ」

「そうなのか？」

「うん。一人で私を育ててくれた大事な母さんだよ」

「そう、か。……母親が大好きなんだな」

「大好きだよ。キノのご両親はどんな人なの？」

「俺の両親か……秘密だ」

「え、教えてくれないの」

少し拗ねた様に言うシャルロットに対して

「今は、な」

少し寂しそうな顔をして応えるキノ

「そっか。じゃあいつか教えてね？」

その顔に何か気づいたシャルロットはそれだけ言ってこの話を終わりにした。

「……あ！此処が母さんの病室だよ」

そんな話をしていたら、どうやらついたようだ。

「母さん、キノを連れてきたよ」

そう言いながら病室に入っていくシャルロット。

「……失礼します」

病室に入って会ったシャルロットの母親は

「あらあら。貴方がキノさん？ワイルドな目つきね」

……母親？

「キノ、どうかしたの？」

「…………シャルロット。彼女は？」

「母さんだよ？何言ってるの」

「そう、か。母親か……」

病室に居たのはシャルロットとその母親。母親なのだが、どう見ても子供が居ると思えない。よくて年の離れた姉妹にしか見えない。30は過ぎているだろうにシャルロットが少し大きくなっただくらいしか見えない。

本当に子供一人生んだのだろうか？姉です、と言われたほうが信じられるのだが……

「？どうかしたのかしら。そんな所で止まってないでこっちへ来てお話ししましょうか」

「え、ええ。そうですね」

それからは俺とシャルロットとシャルロットの母親の三人でいろいろと話をした。

「〜でシャルたっらそれでね〜」

「か、母さん！や、止めてよ／＼恥ずかしい／＼」

「ハハ、そんな事があつたのか」

「もう、キノまで」

しばらく話をしていたら

「いろいろ話をしてたら喉が渴いちゃったわね。シャル何か飲み物を買って来て貰えるかしら」

「分かったよ。母さんは何がいいの？」

「母さんは紅茶でいいわ」

「キノは？」

「俺は、そうだな炭酸系で何か適当にお願いする」

「分かった。じゃあちよつと行って来るね」

そう言いながら出て行くシャルロット。

「……キノさん」

「はい？」

「あの子を、シャルロットを助けていただきありがとうございます
しました」

「……助けた、とは」

「シャルが私のためにあの人の会社に入ってからシャルは笑わなくなりまして。いいえ、笑いはするもののそれは無理をして笑っている顔でした」

「……」

「そんなシャルを私は見ているだけしか出来ませんでした。それがとても辛くて悲しかった」

そう言いながら目頭に出た涙を拭く

「でもそれも貴方のおかげでなくなりました。貴方に会って、助けてもらってからシャルは本当の笑顔を取り戻せたんです。だからシャルの母親としてキノさん。貴方には心から感謝しています」

深く、深く頭を下げて感謝の言葉を言うシャルロットの母親に対して俺は

「頭を上げてください。俺がシャルロットを助けたのは貴方が居たからですよ」

「私が？」

「ええ。シャルロットは貴方を助けるためなら自分はどうなってもいい、と言い放てるほど貴方の事を助けたかったのです」

「シャル……」

「俺はそんなシャルロットだから手を貸したんです。だから感謝するなら母親思いのシャルロットにいつってください。俺はただ手を貸しただけですから」

「……ええ、そうさせてもらっわ」

目頭に浮かんだ涙を拭きながらそう言った時

「キノ、母さん買って来たよって、どうしたの母さん！涙なんて拭いて！」

「ちょっと目にゴミが入っただけよ。」

「そう、なの。キノ母さんに何かした」

「いや、何も」

「駄目よ、シャル。そんな事言っちゃ」

「うう、そうだね。ごめんキノ」

「気にしないから気にするな」

「シャルは私の事と成るとすぐ慌てちゃうんだから」

「だって、母さんの事が心配なんだもん」

顔を赤くしながらそっぽを向きながら言うシャルロット。

「あゝもう、シャルは可愛いわね」

「ちょっと母さん、キノが見てるから」

「あらあら、恥ずかしがっちゃって。可愛いわ」

「母ちゃん」

シャルロットに抱きつき頬ずりをし始めるシャル母。

「……さて、俺はそろそろ行かせてもらっ

「あら、もう行っちゃうの？」

「キノ、何処に行くの？」

「ああ、ちょっと野暮用があつてな。ではすみませんが俺はここら辺で失礼します」

「今日は楽しかったわ。また会いましょう」

「キノ今日はありがとう。また今度会おうね」

「ああ。では失礼しました」

そう言つて病室から出て行く俺。

「行っちゃったわね、彼」

「うん。行っちゃったね」

「あら、寂しいの」

「ち、違うよ／＼そんなんじゃない……」

「ふふ、冗談よ、冗談」

「もう、母さんからかうのはよしてよ」

「そうよね、これから毎日会えるんだから寂しくなんかないもんね」

「母さん!..!」

「……で、それは本当か？」

「……そう、か。本当なんだな」

「分かった。それは任せてもらおう」

「貴様の方は大丈夫なんだな？……そうか分かった」

「分かってる。ミスなどしない」

「……プロジェクト真冥王計画成功させる、必ずな」

会話と謎（後書き）

やっとこさ更新できました。

おはようございました。作者のマーシーです。

いやはや更新が遅れて申し訳ない。

理由としてはネタが纏らない、短編を纏めていたなどありますがまあ言い訳はよくないですね。

ああ、いろいろネタが浮いてきて纏められないお。

次回予告

つかの間の平和を過ごすキノ

だが魔の手はすぐ其処まで迫っていた

狂気に狂った束

居るはずのない八卦口ボ

プロジェクト
真冥王計画とは

次回

「繋がる世界、二人の冥王」

君は冥王の力を見る

だから予定と書いて未定と読むって言ってるじゃない!!

再入学と新生活（前書き）

シャルさん復帰

そして作者の暴走

言い訳は後だ！！

再入学と新生活

シャルロットの母親と会った次の週。

シャルロットが復学するようだ。復学と言うか再入学と言うか転入と言うか……

デュノア姓からベルレアン姓に変え性別も女性になって来るのでまあ別人扱いで来るので転入生と言うのが正しいのかな？

立場としては「世界電脳」が作り出した「鉄神」シリーズのプロトタイプ扱いである「Xダイバー」のパイロットとして来る事となっている。

つまり「世界電脳」に所属して来る、という事だ。

これでシャルロットにちよっかいを出す馬鹿はいないだろう。セシリアと言う前例が有る以上そうそう馬鹿な真似をする奴はいないだろう。

そして、今日シャルロットが来るらしい。

「皆さん、席に着いてください」

ドアを開け、入ってくる山田先生。

「今日は、皆さんに連絡があります。先日まで休学していたシャルル・ベルレアンもといシャルロット・ベルレアンさんが今日から復学する事となりました。皆さんも知つてのと通りシャルロットさんは複雑な事情で名前と性別を偽ってこのIS学園に入学して来ましたが、その事に対していろいろと言わないようお願いします。では入ってきてください」

その声と共に教室に入ってくる、女性。

「この姿では始めまして、かな。シャルロット・ベルレアンです。いろいろと有りまして休学していましたが今日から復学する事となりました。改めてよろしくお願いします」

「では、席は以前と同じキノさんの隣でお願いしますね」

「はい。分かりました」

そのままこっちに来て席に座る。

「フフ、今日からまたお願いね、キノ」

「……まあ、よろしく」

そんな風に話したら

「シャルロットさん普通に鈴木君と話してる」

「なんで恐くないんだらう……」

「と言つか親しそうなのはなんで？」

とか聞こえてきたが気にしない。

時間が過ぎてお昼になった。いつも通りに外で一人で食べようと
思い出で行こうとしたら、声を掛けられた。

「キノ、何所行くの？」

「食事に、だが？」

「一人で？」

「ああ」

「なら、一緒に食べないかな。お弁当作って見たんだけど」

何故かざわめく教室内。

「シャルロットさんのお弁当！！」

「私も食べて見たい！！」

「私も！！」

周りからそんな声が聞こえる。

「……俺は構わないが、何所で食べるんだ？」

「うん。教室か、屋上とかかな？」

「じゃあ、屋上でいいか」

「うん。いいよ」

「なら行くぞ」

「うん。すぐ準備していくね」

着いた屋上で弁当を広げるシャルロット。

「母さんと一緒に作ったんだけど、どうかな？」

「いいじゃないかな、おいしそうだが」

「よかった。頑張った甲斐があるよ。じゃあ、これがキノの分だよ」

「俺の分？」

そう言って渡されたのは大きな弁当箱だった。

「うん。キノと私の分だよ。キノがどれだけ食べるか分からなかったから私のより多めに作ったんだけど、迷惑だったかな」

「いや、大丈夫だ。食べきれない量じゃない」

「それならよかった。何も連絡なしに急に言ったから駄目だったらどうしようかと……」

「まあ、次からは気をつけてくれればいい」

「うん。分かった。じゃあ食べようか。そういえばキノのお昼はどうしたの？」

不思議そうに此方を見るシャルロット。

「俺はいつも弁当だが？」

「そうなんだ。……弁当？キノが作ってるの？」

驚いた表情をして此方を向く。

「他に誰がいるんだ」

「いや、キノがお弁当作ってるのってなんか想像できなくて」

「……いいだろう、別に」

「ごめん、ごめん」

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

「どうかな、私のお弁当」

「なかなかだな。ただ、少し味が薄いがまあ弁当ならこれぐらいかな」

「なかなかね。もっと頑張らないと」

「まあ、頑張れ」

「キノのおかず少し貰ってもいいかな」

「構わんが」

「じゃあ、卵焼き貰うね」

キノの弁当から卵焼きを一切れ貰い食べたのだが

「……これキノが作ったんだよね」

「そう言ったが、どうした？」

「ううん、なんでもないよ。ちょっと目にゴミが入っただけだよ」

（女性である私よりも何倍もおいしい料理が作れるってどういう事）

なにやらへこんでいた。

お昼を食べ終え、午後の授業が終わりいつも通りに帰宅するキノ。

「……1/100サイズの「八卦龍」のガチャポン販売って、何考えてるんだ」

そんな事を言いながら家に入ったら

「あ、キノお帰りなさい」

シャルロットがいた。

「……何故いる？」

「あれ、聞いてないの？私今日からここで生活する事になってるんだけど」

「……」

「おつかしいな。山田先生から聞いてないの？」

「何も聞いてない」

「そうなんだ。まあいいか。今日からよろしくねキノ」

「……まあ、部屋は余ってるからいい？のか」

そう思い込む事にして、家に入る。

「私の部屋はキノの隣にしたから。後一応お風呂の時間とか食事の用意の順番とか決めておこうか」

「ああ」

それから、二人で生活するにいたっていろいろと決めておいた。

「……えっと、これぐらいかな。決めておく事は」

「そう、だな。これぐらいだな」

「いろいろ話したら、結構時間がたっちゃったね。じゃあ夕食作ろうか」

「分かった。とりあえず有る物で適当に作るがいいよな」

「うん。大丈夫だよ」

そして二人で夕食を作る事に。

「これとこれにこれを入れて、あ、キノそれとって」

「これでいいか」

「うん。ありがとう」

夕食が出来上がり二人で食べる。

「キノ、なんであんなに手際がいいの」

「なれ」

「なれ、なんだ……」

食事が終わり、リビングでゆったりしていたら

「そういえばキノって私の事シャルロットって言うよね」

「ああ、それが？」

「キノには、その、シャルって言ってほしいんだけど駄目、かな」

少し不安そうな顔で言ってくるシャルロット

「別に、構わんが」

「そっか。ありがとうキノ」

そう言うシャルの顔は明るい笑顔だった。

「じゃあそろそろ私は寝るから、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

「これからはキノと一緒に生活か」

「フフ、今までの生活とは大違いだな」

「……キノ」

「私を助けてくれた人」

「そして私を捧げた人」

「だから私はキノのためなら何だってしてあげる」

「だから見ててねキノ」

「フッフ、アハハ」

[illegible]

「いぬねえー!」

「い、いぬねえー!」

てしまいなかなか書けませんでした。

まだこの作品が終ってもないのになんか新しい作品のネタとか出てくるし。

今回の話も無理やり感がするし。どうしようか、これから。

さて、作者の愚痴は置いて、シャルさん。

どうしてこうなった

おっかしいな、普通にヒロインしているはずだったんだけどな

学年別トーナメントに向けて（前書き）

原作だとクラス対抗戦のアクシデントを考慮して二人一組になりましたが作品内だとアクシデントが無いので二人一組になりません。

と考えてただけだな

学年別トーナメントに向けて

週の初め日

俺はクラス代表戦の次の学校行事である学年別トーナメントの事を考えていた。

学年別トーナメント

以前したクラス対抗戦とは違い、クラス全員が出場する大規模な学校行事である。

内容は複数のブロックに別れ、勝ち抜けで戦い、優勝者を決めると言う物である。一年生は今までの実習の成果を、二年、三年生は実習の成果を含め観戦に来た各国の政府の人や研究所の人からのスカウトなどを考えて戦うらしい。

学年別トーナメントは本来一対一で戦う物だったのだが今年から二対二で戦う事になった。理由としては複数での戦いを考慮し戦いの幅を広げるため、と言うものの本当の所は俺の専用機である「八卦龍」へのあてつけのような物である。

実際、「八卦龍」の戦闘能力はIS学園に在学しているどの専用機よりも上なのである。そんな「八卦龍」と量産機が戦ったところで結果は目に見えている、と言うか第三世代の兵装でもそうそうダメーシを与えられないのに量産機の兵装では装甲に傷すら与えられない。

そんな状態では学年別トーナメントの意味がなくなってしまうので俺だけ特別処置として八卦球の使用禁止、シールドエネルギーの半減、当たり判定の強化、機体性能の制限とかなり厳しくなってい

る。

が、其処までしても量産機相手なら余裕なのでさらに俺だけ一人
で出場して二対一の状態にしてやっとか戦える状態になった。

これは「八卦龍」の性能が高すぎるせいなのか？でも「八卦龍」
の性能をフルで使っても「グレートゼオライマー」には届かないの
は悲しいところだ。

俺だけこんな扱いで不公平だ、と思う事はなかった。それだけ「
八卦龍」の性能が他のISと比べると高いからだ。

むしろこの位のハンデが無いと試合にならないのだ。

後、今回の学年別トーナメントで学校側が、一つ忘れていた事がある。

それはシャルの専用機「Xダイバー」の事である。

「Xダイバー」は「八卦龍」に続く「世界電脳」が作り出した専用機である。いかに量産を頭に入れた機体とはいえ「Xダイバー」はプロタイプであり、様々な兵装や特殊システムが積み込まれた機体であるから戦闘能力は「八卦龍」に届かない物の第三世代とは比べ物のにならない程の性能を持っている。

以前俺が見せた戦闘の事で俺の専用機にばかり目が向いてしまっているようだが、まあいい。どうなるうが忘れた奴が悪い、という事で。

そういえばこの前「世界電脳」が販売したガチャポン、通称「八卦龍ガチャ」なのだが販売始めてから一週間と立たずに完売状態が

続いているらしい。

一回500円という高額にも関わらず常に品薄状態でネットオークションでは物によっては数十万以上の高値が付いている様だ。

何故、こんなにも売れているかと言うと、これを買っているのは政府関係者、研究所関係者が8割以上を占めていると言う結果があった。

「八卦龍」は「世界電腦」が作り出した専用機でありその性能は各国の軍事関係者や研究所の科学者にとっては喉から手が出るほど欲しい物である。

よって、例えば玩具とはいえ精密な稼働が出来るこのガチャポンは願っても無いものだったようだ。

だが、そうそう「世界電腦」が、いやGZが情報を広めるわけも無くこの八卦龍ガチャ、骨組みのところに金属を使用して有るのだがその金属、GZが以前作り出したナノマシンが含まれておりガチャポン自体が盗聴器兼発信機になっているのだ。

これにより「世界電腦」製の機器を使って居ない研究所などの情報が入るようになった。

まさか玩具が高性能な盗聴器兼発信機になっているとは思えないだろう。俺も思いもしなかった。

そんな事を考えながら自室から出て朝食の準備を始める事に。

ちなみに今の時間は朝の6時である。IS学園に入学する前と比べると比較的遅い起床である。入学前は4時に起きて6時までトレーニングをしていたからな。今でもトレーニングは続けているが時

間を減らして他の事に費やしている。

そんな感じで準備が出来たのでシャルを起こしに行く。昨日いざ寝ようとしたら急に高笑いが聞こえてきたが何か有ったのか？

ドアをノックして声を掛ける。

「シャル、起きてるか？」

「ふえ、キ、キノ！？なにかな」

「朝食の準備が出来たから呼びに来た」

「朝食つて、キノが作ったの」

「俺以外にいないだろ」

其処まで言ったらドアが開き私服姿のシャルが出てきた。

「言ってくれば手伝ったのに」

「すまん。まだ寝てると思ってな」

「まあ、確かに寝てたけど……」

ちよつと頬を赤くして言うシャル。

「じゃあ、顔と歯を洗って来い。それから朝食にするぞ」

「分かった。じゃあ先に待ってて」

そこでシャルと別れ、リビングで少し待っているとシャルが来た。

「おはようキノ」

「おはようシャル」

遅れたが朝の挨拶を交わす。

「なんだか新婚さんみたいだね／＼」

「……ん？何か言ったか」

「何でも無いよ。じゃあ朝ご飯にしようよ」

「そうだな。ではいただきます」

「いただきます」

朝食を食べ始め、しばらくして

「そういえば昨日の高笑い、なんだったんだ」

と聞いてみたら

「ごほっごほっ」

急に咽始めた。

「な、何のことかな」

「いや、昨日の高笑いの事……」

「そ、そう言えば私朝から用事が有ったんだ。だから先に学校に行ってるね。ごちそうさま」

なにやら慌ててご飯を食べて先に行ってしまったシャル。

「何だっ たんだ？」

その後、朝食の後片付けをしてから登校。今学校は学年別トーナメントの事で持ち切りだった。

「ねえ、あの噂聞いた」

「聞いた聞いた！あれって本当なのかな？」

「どうだろうね。本当だったらいいな」

教室に行くまでにそんな話し声を聞いたが、何の事だ？

「キノー！！」

「な、なんだ」

教室に入ったらいきなりシャルに大声で呼ばれた。

「キノ、あの噂って本当なの！！」

「噂？」

「今度の学年別トーナメントで優勝した生徒は”男子生徒”と付き合えるって噂」

「はあ？」

なんだそれは。と言うかこのIS学園で”男子生徒”って二人しか居ないじゃないか。

「どうなの！！キノ！！」

「いや、俺は知らん」

「……本当？」

「ああ」

「そっか。そうだよな。そんな事ある分けないよね」
なにやら安心した表情でそういうシャル。

「じゃあ、席に行こうか」

「ああ」

席に着きいつも通りに授業が始まる。

だが、この噂が後にとんでもない出来事を引き起こすとは思
いも
し
な
か
っ
た。

学年別トーナメントに向けて（後書き）

どうも、本編より短編の方のネタが浮かんでくる作者のマーシーです。

いやはや、思い付きつて恐いですね。

今まで考えてた事が全て吹っ飛んでしまうんですから。少なくとも作者は。

さて今回の話で学年別トーナメントの話が出てきましたが、いろいろ無茶な事が書かれていましたがまあ、そういう物なんだ、と思っ
て見てください。

今回のNGシーン

ドアをノックせずにいきなり部屋に入ったら

「シャル、起きて……」

「キノキノキノキノキノキノキノキノキノキノキノ……」

俺の写真を見つめながら俺の名前を繰り返すシャルの姿が

「……………」

「フッフ、私のキノ、誰にも渡さないよ」

「……………」

「そう、あんな子供先生なんかに渡さ、な……………」

部屋のドアが開いていることに気が付き振り向き俺の顔を見て固まるシャル。

「キ、キノ…………い、何時からそこに」

「…………すまん。俺は何も見っていない」

ドアを閉め、駆け足でリビングに逃げる。

「まって、違っのこれは違っんだよ……………!!!!」

噂の恐怖（前書き）

噂が一人歩きして恐ろしい事になってしまったようです。

この作品が何所え向かっていくのか不安でしょうがないです。

噂の恐怖

学年別トーナメントが近づくにしたがってなにやら学園中がピリピリし始めた。

それと同時に俺を睨む視線が増えた気がする。どういう事だ？学年別トーナメントで俺は別に何かする気はないし、何かした事も無いはずなんだが。

「キ、キノ！！あの噂って本当なの！！」

そう言いながらシャルが近寄ってきた。

「噂？あの”優勝した生徒は”男子生徒”と付き合える”って言う奴か？あれは知らないって……」

「違うよ、それとは別の噂だよ」

「別？」

「”学年別トーナメントで優勝した生徒は鈴木 キノのパートナーにされる”って噂！！」

「……は？」

な、何だその馬鹿げた噂は。

「これ、本当なのかな？」

何故か目のハイライトが消え薄笑いの表情で確認を取るシャル。

「いや、知らん。聞いた事もない」

「本当？」

「本当だ。というかこんな話が本当であってたまるか」

「……」

「……」

ものすごく気まずい雰囲気になる。

「そ、うだよね。うん。キノがこんな事認める分けないよね」

何度も頷きながらそう自分に言い聞かせるように言うシャル。

（私を差し置いてキノのパートナーになる、なんて許せないよね）

「ど、どうしたんだシャル」

「ううん。なんでもないよキノ」

そう言ったシャルの顔はとてもいい笑顔だった。

だが、学年別トーナメントがさらに近づくとつれて噂はどんどん酷くなっていった。

「トーナメント優勝生徒は鈴木キノの恋人にされる」
「トーナメント優勝生徒は鈴木キノの婚約者にされる」
「トーナメント優勝生徒は鈴木キノの子供を作らなければいけない」

と、どんどん過激な事になっていった。そしてそのつどシャルがハイライトの無い目つきで事の真相を聞きに来るのだが、だんだんとハイライトが無い時間の方が多くなっている気がする。

山田先生に相談してこの様な噂はありえないと教師陣のほうから否定してもらっても何故か消える事は無かった。
終いにはラウラでさえ

「その、なんだ、この」トーナメント優勝生徒は鈴木キノの子供を作らなければいけない」という噂はほ、本当なのか」

と聞きに来る始末。

流石にこれはおかしいと「MIKU」に調べさせた所、この噂、誰かが意図的に流しているのではなくどうやら俺とシャルの関係のせいらしい。

シャルは転入初日に休学し、次に来たときには「世界電脳」の専用機乗りとしてこの学園に来た。しかも女性になって。

さらに、復学した後周りからあれほど恐れられているキノに対して一人笑顔で話しかけている事に、周りの生徒達はこう考えたらしい。

「シャルロットさんがあんな風に話しかけているのは何か弱みを握られているせいじゃないか」

追い討ちを掛けるように寮生活ではなく俺が生活している一軒家に移動した事も原因の一つらしい。

不自然な休学に復学後の態度、同じ一軒家に過ごす事に何の文句も言わない事、そして同じ「世界電腦」の専用機乗り、という事。

これらの事からシャルは「世界電腦」に洗脳され、キノに良い様にされるためにフランス政府から引き取られた、などというトンでも発想が出来たらしい。

……ねーよ。これはねーよ。

この発想はなかった。というかGZがヤバイ事になってる。なんと言っかつん、後もう少し過激な噂が出てきていたらGZがあのだノマシンを強制散布して全生徒を強制的に服従させようとしてたかな。無論止めたが。

そんな風に噂の真相が分かった頃にシャルに屋上に呼び出された。

「……なんだ、話って」

「……その、今年年別トーナメントの事でいろんな噂が飛び回ってるじゃない？」

「ああ、どれもこれも信憑性の無い噂だな」

「どの噂も結局は噂で真実じゃないって言うのに皆意外と信じちゃってるんだよね」

「そう、なのか」

「うん。優勝できればキノ、というか「世界電脳」と繋がりが持てるって言う方に皆興味があるようだけどね」

そう言いながら苦笑するシャル。

「それに、さ。噂のせいで私がキノと一緒にいるのは何かキノに弱みを握られているから、とか「世界電脳」がフランス政府と違法な取引をしたんじゃないかって皆言ってるんだよ」

「それは……」

「だから私決めたの」

キノの顔を正面から見つめるシャル。

「今度の学年別トーナメント、私が優勝してそこで皆の前でキノとの関係をハッキリさせるって」

「関係を？」

「そう、キノに弱みを握られてる訳でも、「世界電脳」が違法取引したのでもなくて、私自身が自分の意思でキノと一緒に居るんだって事を」

「シャル……」

「だから見ててねキノ。私の勇姿をね」

「ああ、分かった」

「フフ、学年別トーナメントでキノと当たっても手加減何かしないんだからね」

「こっちもだ」

その後他愛も無い事を話してから俺はシャルと分かれ先に家に帰ることに。

「シャルはこの後はどうするんだ？」

「私？ちょっと用事が有るから先に帰っててよ」

「そうか、じゃあ先に帰ってるぞ」

「うん。また後でね」

屋上から出て行くキノ。

誰も居なくなり一人になったシャル。

「フフ、フフフ」

何がおかしいのか口を押さえて笑い出すシャル。

「おかしいな、ああおかしいな」

「私以外の人間がキノと一緒にになれるなんて本気で思ってるのかな」

「そんな事許せるわけ無いじゃない。キノの隣にいるのは私だけなんだから」

「そう、キノと一緒に居れるのは私だけなんだから」

夕焼けに染まるシャルの顔に浮かぶ笑みは誰をも魅了するような笑顔だったが、その瞳は何所を見ているのか分からなかった。

「キノ私がずっと、ずっつと一緒に居てあげるからね」

噂の恐怖（後書き）

作者が書くキャラはどうしてこうなるのだろうか。

シャルさん病み病み。

閑話 二人の休日（前書き）

病みシャルさんではなくデレシャルさんが見たいとの事で書いてみました。

やっつけだけだな！！

閑話 二人の休日

キノとシャルと一緒に生活を始めて最初の週末。

「ご馳走さまでした」

「ご馳走さまでした」

夕食をいつもの様に二人で作り食べ終わってからのもんびりしていると

「そういえばシャンプーとか無くなってきたな」

とシャルが思い出したように言う。

「……洗剤とかも無くなって来ただろ」

「そうだね。今度買って置かないと」

「なら、明日一緒に買いに行くか？」

「明日？……うん特に予定とか無いからいいよ」

「そうか。じゃあ明日10時ぐらいに駅前に集合でいいか？」

「？一緒に行かないの」

「少しやりたい所があるんでな」

「そう。分かった明日１０時に駅前に集合だね」

「ああ」

「じゃあ、私は先に部屋に戻ってるね。お休みキノ」

「お休みシャル」

寝る前の挨拶を交わし部屋に戻るシャル。

「明日１０時に駅前に集合か」

ベットに横になりながら考えるシャル。

「何着て行こうかな。二人で買い物だが、ら？二人で買い物……」

自分で言った言葉を理解する。

「二人で買い物って、これってもしかしてデート!？」

顔を赤くして照れだしベットの上でごろごろしだす。

「うわ〜うわ〜どうしよう、キノとデ、デートなんて」

軽く混乱し始めるシャル。

「ううん。落ち着いて私。これはデートじゃなくてただ一緒に買い物に行くだけなんだから深呼吸、深呼吸……」

「シャルまだ起きてるか」

「ごほっごほっ」

息を大きく吸った時にドアがノックされ咳き込むシャル。

「だ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だから、そ、それでなにかなキノ」

「明日の事だが買うものなんてそんなに無いから午後は一緒に遊びに行かないか？」

「うん、分かった。私は大丈夫だよ」

「そうか、言いたい事はそれだけだから、お休み」

「う、うん。お休み」

ドアからキノが完全に離れた事を確認してからシャルはまたベツトの上でごろごろし始めた。

「うわーうわーど、どうしようもうこれって完全にデートじゃない。どうしよう、どうしよう」

さっきよりさらに混乱し始めるシャル。

「な、何着ていけば……って私まだ私服とか殆ど持っていないんだっ
った」

そう、シャルの私服はまだ此方に移ったばかりで数着しかなかった

たのだ。

「ど、どうしよう。今ある私服はそんなにいい服じゃないのに……」

少し涙目になって慌てるシャル。

「ど、どうし「ラララーララーラー」っこんな時に誰から」

携帯電話が鳴り取り出し電話に出る。

「はい、シャルロットです」

「シャルまだ起きてるかしら」

「って、母さん、どうしたのこんな時間に」

「シャルが悩んでるって感じたから電話したのよ」

「感じたって……」

「まあ良いじゃない、それより何か困った事とかある？」

「そ、そうだ、母さん助けて」

「あらあら、どうしたの？」

シャル説明中……

「あらあら、シャルったら初デートね」

「か、母さん!!」

「なら母さんに任せておきなさい。明日までにシャルに合う服を準備してあげるから」

「ホントに!!」

「ええ、可愛いシャルに合う服をシツカリと準備してあげる。だから8時ぐらいに後でメールした場所に来てね」

「あ、ありがとー母さん、大好き」

「あらあら」

かくして当日着ていく服の都合が着いたシャル。

次の日

「キノ私先に出てるね」

「早いな、何処に行くのか？」

「うん、母さんと会う約束が出来たから」

「そうなのか、じゃあ今日の買い物は……」

「それは大丈夫。会うつて言っても待ち合わせの時間には終るから」

「そうなのか。じゃあ10時に駅前で待つてるぞ」

「うん。じゃあまた後で」

キノと別れメールに書いてあつた場所に向かう。

「えつと、此処かな？」

着いた場所は巨大な総合デパートの一角にある美容室だった。

「美容室？服の事なのに……」

「シャル、こっちよ」

「あ、母さん」

「さ、急ぎましょう。あまり時間は無いんでしょう」

「分かったけど、ここつて美容室でしょ。」

「大丈夫よ、此処の美容師さん髪だけじゃなくて服装も一緒に見繕ってくれるから」

「其処までしてくれるんだ。でもよく知つてたね、こんな所」

「此処の美容師さんと病院で知り合つてね、その伝でお願いしたのよ」

「ふん。そうなんだ」

「ええ。……それとシャル」

「何、母さん」

「母さん、今度此処の美容室でモデルのお仕事始めるから」

「そうなんだ、モデルの仕事ね……モデル？」

「そう、服を着て写真を取られるモデルさんよ」

「いやいやいや、モデルって母さん何考えてるの!？」

「そんなに驚く事かしら？」

「驚く事かしらって、驚くよいきなりそんな事言われたら」

「良いじゃない。服を着てポーズをとって写真を取られるだけのお仕事よ？」

「だからって……」

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。此処は「世界電脳」が親会社だから」

「そうなんだ。じゃあ大丈夫かな」

そこまで話したところで声を掛けられる。

「失礼、その子が娘さんで？」

声のした方を向くと、其処には高身長に美しい顔の人が居た。

「ええ、この子が私の自慢の娘のシャルロットよ」

「えっと、母さんこの人は？」

「おっと、これは失礼を。私はこの美容室のチーフをしている律と申します」

「シャ、シャルロットといいます。今日はよろしくお願いします」

「親御さんに似て綺麗な人だ。これは腕によりを掛けないといけませんね」

「お願いね、りっちゃん。この子今日彼氏と初デートなのよ」

「それはそれは。腕が鳴りますね。では此方に。時間も限られますからね」

「お、お願いします」

美容室の中につれられてそこで始まる髪形と服装のセット。

「うん、親御さんと同じで綺麗な髪に肌だね」

「あ、ありがとうございます」

「大丈夫、緊張しないで、すぐ終わりますから」

その言葉に偽り無く、どんどん決まっていくな髪形と服装。

「うん、髪型はコレでよし。後は服装だけか……よし、少しお待ちを」

「すごい、こんな風に来るんだ……」

「お待たせしました。では此方の服に着替えてもらえますか？」

「あ、はい」

髪型を整え、服を着替えたシャル。その姿は

「綺麗よシャル」

「私の目に狂いは無かったようですね」

「これ、が私？」

誰もが目を留める程の美少女だった。

「コレならキノ君もイチコロね」

「母さん!!」

「照れない、照れない」

「も、もうからかわないでよね」

「分かったわよ。そろそろ時間じゃないのかしら」

「わ、もうこんな時間。えっと、穂さん今日はありがとうございました」

「いえいえ、此方こそいい仕事をさせていただきました。今日の事お祈りしています」

「ありがとうございます。じゃあ、母さん行って来ます」

「気よつけてねシャル」

そう言い、待ち合わせの場所に向かうシャル。

駅前で待つキノ。

「そろそろ時間か」

携帯の時計を確認して呟く。今のキノの服装は以前着ていたような黒いスーツのような威圧感が出るような服装ではなく、目つきをサングラスで隠し、髪形を整え、服も今時の若者が着るような服装であり威圧感よりもワイルドなかつこよさが目立っていた。

「ねえ君、今暇じゃない？」

そのせいなのか逆ナンが多く起きていた。

「…いや、待ち合わせしているので」

「いいじゃない、そんな子より私と一緒に遊ばない」

「フウ、断る」

で、誘いを断ると

「な、何よ男性の癖に女性である私のいう事が聞けないっての！
」！」

逆切れする。なので

「……断る、といったが」

サングラスを外し少し睨みを効かせてそう言う

「ヒイ、ご、ごめんなさい」

慌てて、離れていく。その様なやり取りがすでに10回以上起きていた。

「……早く、来ないかなシャル」

少し疲れたように呟くキノ。

「キノ、ごめん、待たせちゃったかな」

「遅いぞ、シャル……」

シャルの姿を見て言葉が止まるキノ

「えへへ、どうかな似合う?」

「……ああ、とても綺麗だよシャル」

「そ、そうノノありがと。キノもとってもカッコいいよ」

「そうか、じゃあ早速買い物に行こうか」

「うん」

早速買い物に向かう二人。

「うん、こっちとこっち、どっちがお得かな」

「こっちじゃないか?」

生活用品を見繕ったり

「えっと、コップにお皿に……」

「鍋は有るし、フライパンも有る……」

台所用品を揃え

「あ、この写真立て可愛い」

「……こんな所にも有るのか、八卦龍ガチャ」

小物等を見て回る。

「結構買ったね」

「そうだな……そろそろ昼にしようか」

「うん。お腹空いちゃった」

「あの店で良いか」

そういつて指差したのは洋風喫茶店だった。

「私は大丈夫だよ」

「なら、行こうか」

二人で入っていく。

「いらっしやいませ。お二人で？」

「ああ」

「では此方の席へどうぞ」

通された席でメニューを見る。

「キノはどうするの？」

「そうだな、この日替わりランチセットにブレンドコーヒーかな」

「なら私はこのふんわり卵のデミグラスソースかけオムレツと、」

オレンジジュースで」

注文が決まったので店員さん呼び注文する。

「ご注文は以上で」

「お願いします」

「ではお待ちください」

「今日買うものはもう全部買ったよね。午後はどうするの？」

「そうだな、昨日言った通り二人で何処かで遊ぼうか」

「そうだね。何所で遊ぶの？」

「近くに確かゲームセンターが有ったから其処に行ってみようと思うんだが」

「良いよ。私、ゲームセンターって始めてだからいろいろ教えてね」

「ああ、分かった」

そんな風に話していると頼んだ料理が来た。

「此方が日替わりランチセットと、ブレンドコーヒー、ふんわり卵のデミグラスソースかけオムレットと、オレンジジュースになります」

「わ、おいしそう」

「ありがとうございます。ではゆっくりと」

店員が去った後食べ始める。

「なかなかいけるな、このランチセット」

「このオムレツもおいしいよ」

料理に満足して店を出る。

「じゃあ、そのゲームセンターに連れてってよキノ」

「ああ。こっちだ」

そして着いたのが朝方シャルが来た総合デパートだった。

「此処なの？キノ」

「此処の地下一階が全て遊戯施設になってるんだ」

「そうなんだ」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

そして入っていく二人、そして

「うわゝ、これがゲームセンターなんだ!!」

目の前に広がるのはかなりの広さが有る遊戯施設だった。

「はしゃぎすぎてはぐれるなよ」

「もう、子供じゃないんだから……」

「ハハ、ほらシャル」

そういつてシャルの手を取るキノ。

「キノ!?」

「コレなら、はぐれないよな」

「う、うん／＼」

それから二人はいろいろなゲームをして楽しんだ。

「もうちょっと右!」

「ここか!」

クレーンゲームをしたり

「ちょっと、手加減してよ」

「16連鎖だ」

二人で対戦したり

「よ、と、は」

「おお、凄いな」

音ゲーで踊ったりして楽しんだ。

「アハハ、楽しいねキノ!!」

「ああ、楽しいな」

「あ、キノ有れって何？」

「あれ？ああプリクラか」

「プリクラ？」

「まあ、やって見ればわかる」

そういつて入る二人。

「フレームを選ぶの？」

「文字も書けるぞ」

そして出来る上がるプリクラ。

「……」

「ん？どうした」

「え！べ、別に何でも無いよ」

「？」

夕方になり帰る二人。

「今日は楽しかったよキノ」

「それはよかったな」

「……」

「シャル？」

「ねえキノ」

急に真面目な顔になって話し始めるシャル。

「なんだシャル」

「……私、思うの。コレは夢なんじゃないかって」

「夢？」

「今まででこんなに楽しかったのは初めてなの、だからコレは私が辛い現実から目を背けるためにみている夢なんじゃないかって……」

……」

「……」

「キノと出会ってからいい事ばかりでそんな事を思っちゃうんだ」

何処か不安げな表情で話すシャル。

「母さんが笑ってくれて、辛い実験もしなくて、毎日が楽しいなんて本当に夢みたいで……」

「シャル」

「え」

シャルを抱きしめるキノ。

「え、ちょ、キノ何を……」

「コレでも夢だと思うか？」

「！」

「こうして俺に抱きしめられている事は夢なのか？」

「違う！夢なんかじゃ……」

「そうだ、これはシャルが見ている夢なんかじゃない、現実なんだ」

「キノ……」

「それに、シャル。お前の人生は俺に捧げたんだろう？なのに夢だつて言うのか」

「！！そう、だったね。私の人生はキノに捧げたんだけ、それは夢なんかじゃない」

抱き合い、見つめ合う二人。

「コレは夢じゃない。だからもう一度誓うんだシャル」

「はい。私、シャルロット・デュノアは私の過去と今を冥府の王に捧げます。」

その言葉と共に二人の顔が近づきそして……

「……ル、……ヤル、シャル!!」

「な、なに!!」

「どうしたんだ、ボーっとして」

「ちょっと昔の事を思い出してたの」

「昔?」

「そう、私が貴方と二回目の誓いをした時の事」

「ああ、あの時か」

「フフ、懐かしいね」

「そうだな……」

「お二人様、準備が出来ましたので会場の方へお越しください」

「分かりました。シャル行こうか」

「ええ、貴方」

「……そうだ、シャル」

「なに？」

「そのドレス、とても綺麗だよ」

「フフ、ありがとう貴方」

いつか来るかもしれない未来より

閑話 二人の休日（後書き）

カリスマ美容師、律

三人目は宝塚的美男子律さんでした。

感想にキノとシャルの普通の話が見たい、との事で生き抜き&時間稼ぎで書いたこのデート。

作者なりに甘い話を考えて見たのだが上手くできたか分らん。

皆様いかかでしたか？

NGという名のネタ

二人が遊びに行った場所が遊園地だった場合

休日明けの月曜日。其処にはいろんな意味で目立つ光景が。

「キ、キノ恥ずかしいよう」

「しょうがないだろう。一人で歩けないんだろう」

そんな会話するのはキノとシャル。

ただしキノがシャルをお姫様だっこして歩いているが。

「うう」

涙目と少し顔を赤くして上目使いで睨むシャル。

「そんな顔しても駄目だ」

だが、そんな顔を見ても怯まないキノ。

教室に入ると同時に静かになる教室内。違う意味で。

「お姫様抱っこ!!」

「涙目、赤い顔、来たコレ!!」

なにやら小声で喋っているクラスメイト。

「ほら、席に着いたぞ」

「うん」

「どうだ、まだ歩けないか？」

「うん。まだちょっと一人じゃ歩けないかな」

「全く、シャルが無茶するからだぞ」

「無茶って、酷いな。私をこんな風にしたのキノじゃない」

「「「!」」」

「仕方が無いだろう、シャルが暴れるんだから」

「だって、初めてだったんだもん」

「初めてのわりには興奮してたが？」

「し、しょうがないじゃない。あ、あんな所で知らない人に見られながら縛られたらだれだってそうなるよ／＼」

その言葉に反応するクラスメイト。

「初めてが人に見られながらって／＼」

「しかも拘束するって／＼」

そんな言葉が聞こえてきた。

「？何か話でもあるのかな」

「ううん。なんでもないから、どうぞそのまま」

「？変なの」

またキノと話し始めるシャル。

「でもキノだつて酷いよね、私が嫌だつて言ってるのに10回以上もするんだもん」

「い、良いじゃないか、シャルだつて気持ちよかつただろう」

その言葉にさらに反応するクラスの女子達。

「じゅ、10回以上つて……」

「み、皆落ち着くのをまだ慌てるような時ではないわ」
「鼻血、鼻血」

なにやら、騒がしくなってきた教室内。

「キノったら嫌がる私の足を知らない人が見ている中縛るんだから」

「そうしないと、危ないだろう」

「そうだけど……」

「そうしないと出来ないだろう」

バンジージャンプ」

「バンジージャンプ!?!」

元ネタはホットショット2のワンシーンから

本戦開始 前編（前書き）

いよいよ、学年別トーナメントの開始。

シャルさんの勇姿が見れるはず……かな？

本戦開始 前編

学年別トーナメント当日。

シャルはこの日のためにパートナーと一緒に訓練をしてきたように張り切っていた。俺は、まあぼちぼちといった所か。

シャルのパートナーはラウラだった。意外である。何でもラウラの方からシャルにパートナーになって欲しいと言ってきたそうで、何でも「私は織斑一夏と戦うまで負けることは出来ない。だからもつとも確実に勝ち抜けるだけの實力を持ったパートナーが欲しい。で、同じクラスではシャルロット、貴様がもつとも確実性が高いから、私とパートナーになってくれないか」との事でシャルも以前、俺に優勝する、と言った手前、確実性が欲しかったようでその提案を受けたようだ。

ラウラとシャルは二人ともトーナメント前日までかなりの時間を訓練に費やしていた。シャルがラウラの部屋に行っているいる戦闘時の動き方やコンビネーションの仕方について話し合っていたり、逆にラウラがシャルの部屋、用はこの一軒家に来て話し合うなどしていた。

ちなみに初めてラウラがこの一軒家に来た時

「し、失礼する。シャルロット・ベルレアンのパートナーをさせてもらっている、ラウラ・ボーデヴィツヒと言う。今日はシャルロットに呼ばれてきさせて貰った……えっと、コレはつまらない物だが」

と、何か緊張しながら差し出されたのは、ドイツ産のバームクーヘンだった。なかなかおいしかった。

シャルも学園で友達、と言つか他の女子を家に呼べるぐらいの友人関係が出来ているようでよかった。

俺？……呼べる様な人は居ないよ。

さて、そんなこんなで学年別トーナメント当日を迎え各学年が何処か緊張した感じにいる中俺は、山田先生と話していた。

「……では、コレで「八卦龍」の機能制限の最終確認が終了しました。制限の解除は此方から解除する以外の方法では解除できませんので注意してくださいね」

「分かりました」

「……すみません。本当はこんな風に機能制限をする様な事無く試合に出て欲しかったんですが……」

「それは、先生が謝る事では有りませんよ」

「いえ、それでも私は教師で有る前に「世界電脳」の一員ですの
で「世界電脳」で二人だけの専用機持ちであるキノさんに不便な思
いをさせていると思うと……」

そう言い暗い表情になる山田先生。

「大丈夫です。その分シャルががんばりますから」

「……そう言って頂けると助かります」

「それにコレぐらいのハンデが無いと他の生徒では厳しいでしょう？」

と、その場を和ませようとそんな事を言っただけなら

「……キノさん。その言い方は駄目ですよ。確かに「八卦龍」の性能は他のISの性能を大きく上回っており今回のように機能制限をしなければ量産型のISでは太刀打ちできません。だからといって勝てないわけでは有りません。今のキノさんのように相手を侮った態度で居たら勝てる試合も負けてしまうかも知れません。それに他の生徒の皆さんはこの学年別トーナメントに向けてがんばって訓練してきたんです。それなのにキノさんがその様な態度では他の生徒が可哀想です」

其処まで言ってから一息いれ

「ですからキノさん。貴方は「世界電脳」の専用機持ちとして、そしてIS学園の生徒として恥ずかしくない態度で試合をしてください」

説教された。でも、山田先生が言っている事はもつともだ。機能制限をされていても他のISを圧倒できるといっても操っている俺がこの様な程度では負けるかもしれない。

それに今日まで一生懸命がんばってきた他の生徒に対して失礼だ。

「……目が覚めました。確かに今の発言は駄目でした」

「分かってくれたならそれで構いません。私は「世界電腦」の一人員であると同時にキノさんの教師でもあるんです。間違った事をしていたら怒るのが教師のお仕事です」

得意げに胸を張って言う山田先生。

「そうしていると、ホントに教師みたいですね」

「教師みたいってどういうことですかー!!」

そんな風なやり取りをしていたらシャルとラウラがやって来た。

「おい、キノ」

「シャルに、ラウラか。どうしたんだ」

「試合が始まる前にキノに会っておきたくてね」

「そうか」

其処まで話したら山田先生が

「ではキノさん。私は仕事に戻ります。試合がんばってくださいね」

そういつて教師の仕事に戻っていく山田先生。

「……キノ、山田先生と何を話してたの」

「今日の試合で使う「八卦龍」の事で最終確認の話をしてただけ

だが」

「そう、なんだ。そうだよ。そんなはず無いもんね」

なにやら繰り返すように呟くシャル。

「む、ベルレアンどうしたのだ？何か気になる事でもあるのか」

「え？うん。なんでも無いよボーデヴィツヒさん」

「ならいいのだが……そうだ以前の約束、頼んだぞ」

そういつてくるラウラ。

「ああ。分かっている。織斑との戦いに手を出さない、だろ。まあラウラが戦う前に俺と当たったらしょうがないがな」

「む、それは困るな（まさか負けるなどといえるわけが無いしな）」

「

「その時はその時で次回にでも期待してくれ」

「……仕方が無い。そうしよう」

とそんな風に話していたら

「何の話をしてるのかなキノ？」

シャルが何所と無く不機嫌な表情で聞いてきた。

「いや、以前約束をしてな。織斑と戦う時に邪魔をしない、って言う約束をな」

「そうだ。私はどうしてもこの手で織斑一夏を倒さなければいけないのだ。だから織斑と当たった時はベルレアン、手出しは無用でお願いするぞ」

「ふーん、そんな約束してたんだ。まあ良いよ私からは特にいう事もないから」

何か不機嫌なままそういうシャル。

「そうか。ありがとう……そろそろ時間が迫ってきたようだな。でわ我々はコレで失礼する」

「キノ、私達と当たっても手加減は無用だよ？」

「ああ。分かってる」

シャル達と別れ遂に始まる学年別トーナメント。

俺は機能制限された「八卦龍」で出場したがやはり量産型のISでは機能制限されたとは言え「八卦龍」相手ではかなりきつい様で俺が圧勝していた。

シャル達のペアモラウラの第三世代のISとシャルの「Xダイバー」の性能差が圧倒的であちらも圧勝していた。

ちなみに織斑一夏はどうやら篠ノ之箒とペアになったらしい。どちらも接近戦が得意なので開始早々二人ががりで片方を倒し、その後もう片方を挟み撃ちにして倒す、と言う戦法で戦っているようだ。

まあ、流石にその戦法が通じるのは2回戦位までだろう、と思っていたら一回戦でどうやらシャル達と戦う事になったようだ。

「織斑、一夏あああ！！貴様が貴様が、居なければあああ！！！」

「クソッ、何だっていうんだよ」

一夏とラウラが激しくぶつかり合い戦っている。だが、流石にラウラの方が有利に進んでいるようで一夏が押されている。

白式の零落白夜を当てようとしてもラウラは接近を許さず、シュヴァルツェア・レーゲンのAICを巧みに使い行動を制限し、一夏を追い詰めていく。

その戦いに参戦しようと幕が向かおうとするもシャルが行く手を阻む。

「くっ其処を退け、ベルレアン！！」

「この先に行きたかったら、私を倒してからいく事だね……まあ無理だと思うけど」

シャルの挑発に簡単に引っかかる幕。

「ならば、貴様を倒して行かせて貰う！！ハアアア！！」

近接用ブレードを掲げシャルに向かうも

「ダメだよ、こんな簡単な挑発に乗っちゃ」

逆に攻撃をかわされカウンターを喰らい吹き飛ばされる筈。

「……もう、向こうも終るみたいだね」

「な、に」

二人が見たのはラウラのシュヴァルツェア・レーゲンが一夏の白式をA I Cを使い空中に固定し近距離で右肩に装備された大型レールカノンを打ち込む所だった。

「……やはり貴様のような奴は教官の汚点でしかないのだ」

「くっ……」

「貴様は此处で朽ち果てろ」

そう言い、レールガンを連続で打ち込むラウラ。

「ぐ、ああああああ」

「いちかああああああ」

至近距離で打ち込まれたレールガンの弾丸が白式の装甲とシールドエネルギーを削り取り絶対防御を発動させ白式のシールドエネルギーがゼロになり一夏は負けた。

「フン、所詮はこの程度か」

吐き捨てるように倒れた一夏に言うラウラ。

「き、さまああああ!!」

一夏が倒されたことに怒り、ラウラに向かおうとする筈。だが

「篠ノ之さん。ごめんね」

後ろからシャルの「Xダイバー」の兵装である「Dブレード」の斬撃を喰らい打鉄のシールドエネルギーがゼロになり筈も負け、この戦いはシャル達が勝った。

まあ、当然といえる結果だった。専用機持ちの現役軍人と元代表候補生の二人に対し専用機持ちとは言え接近戦しか出来ないIS素人と量産機では余程の奇策でも持ち入らない限り勝てるはずがない。

さて、シャル達が勝ち進み、俺も勝ち進んだ結果どうやら次の試合で二人と戦う事になったようだ。

「キノ……戦う時がきたようだね」

「貴様と戦う事になるとは……だが、負ける気はしない!!」

二人は気合に満ちていた。

「お手柔らかに頼む。まあ、此方も負ける気はしないがな」

二人の気合に負けないぐらいに気合を入れる俺。そして俺とシャル達の戦いが始まる。

本戦開始 前編（後書き）

どうも、作者のマーシーです。

だんだんと更新速度が遅れてきています。掲載当初はそれこそ毎日更新ぐらいの勢いで書いていたのに気が付けば更新が一週間以上空くようになってしまいました。

毎日更新されている他の作者様は本当にすごいです。

さて今回の話で学年別トーナメントの事を書きましたがまさかの一夏敗北。

まあ、この作品内では一夏君は熱血じゃないからな。

さて次回はシャル&ラウラVSキノの戦いが始まります。

どういう展開で落ちがどうなるかは秘密です。

と言っか作者もどつなるか分かりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9134v/>

IS チートは隠すもの

2011年10月29日21時35分発行